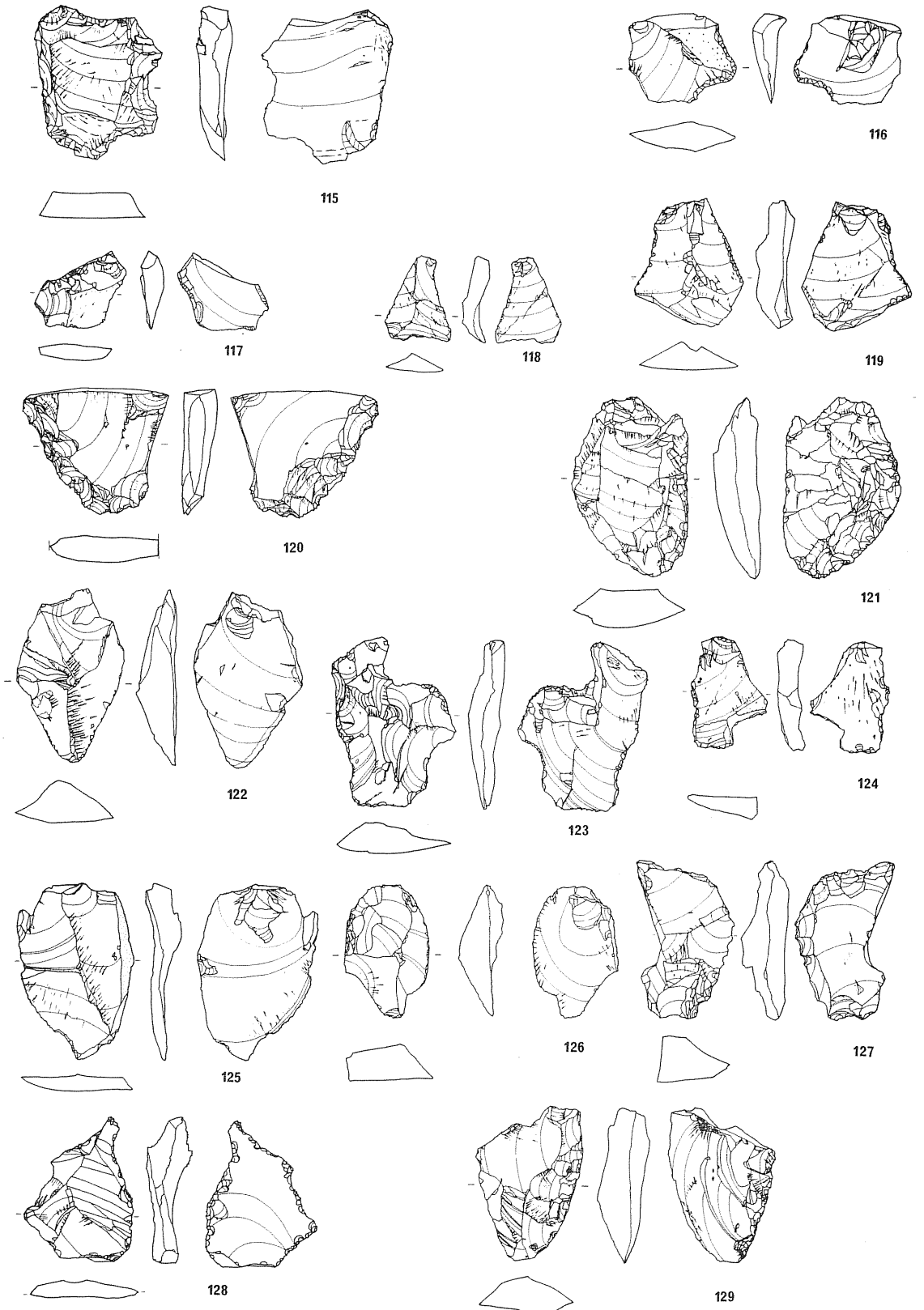
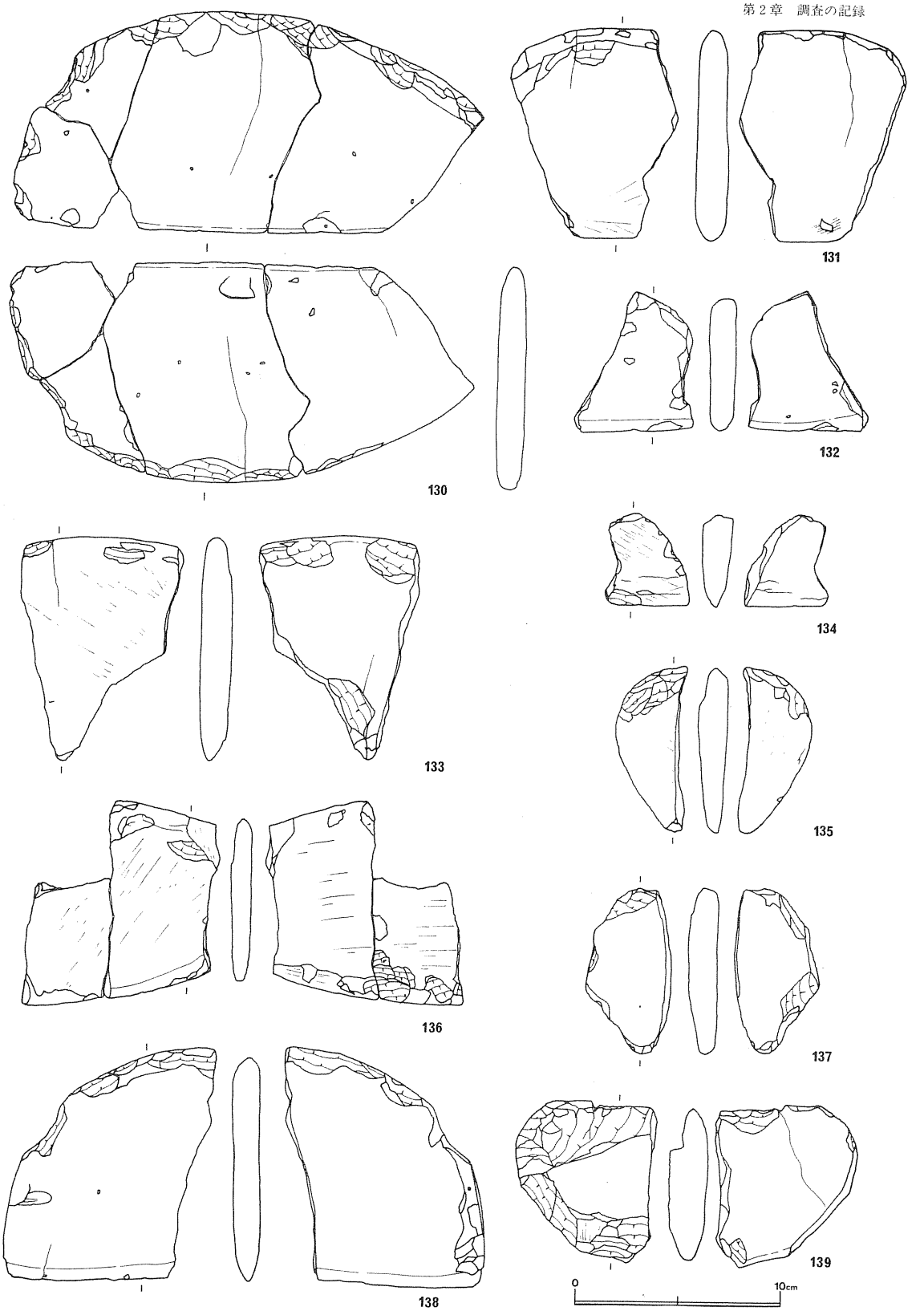
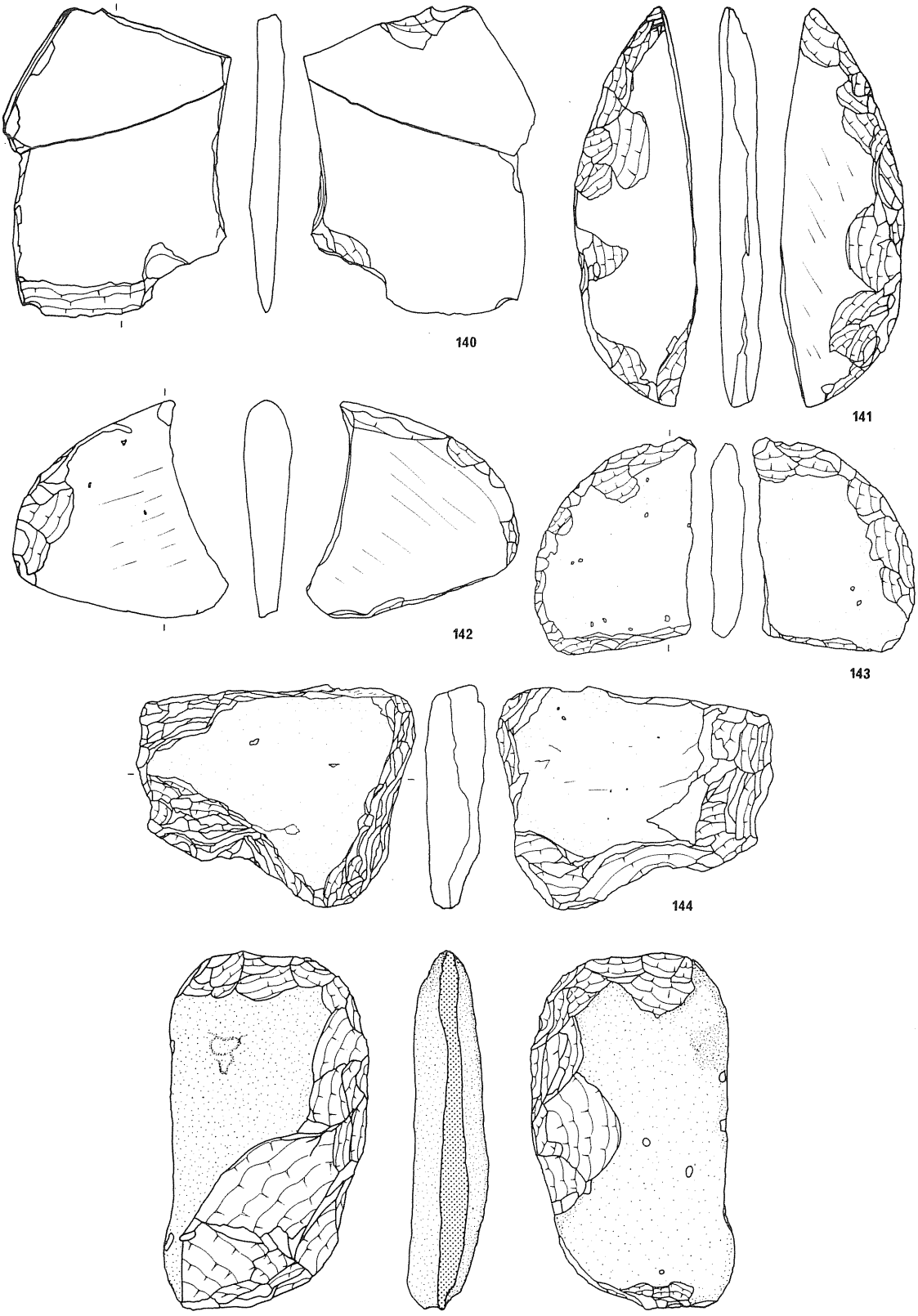


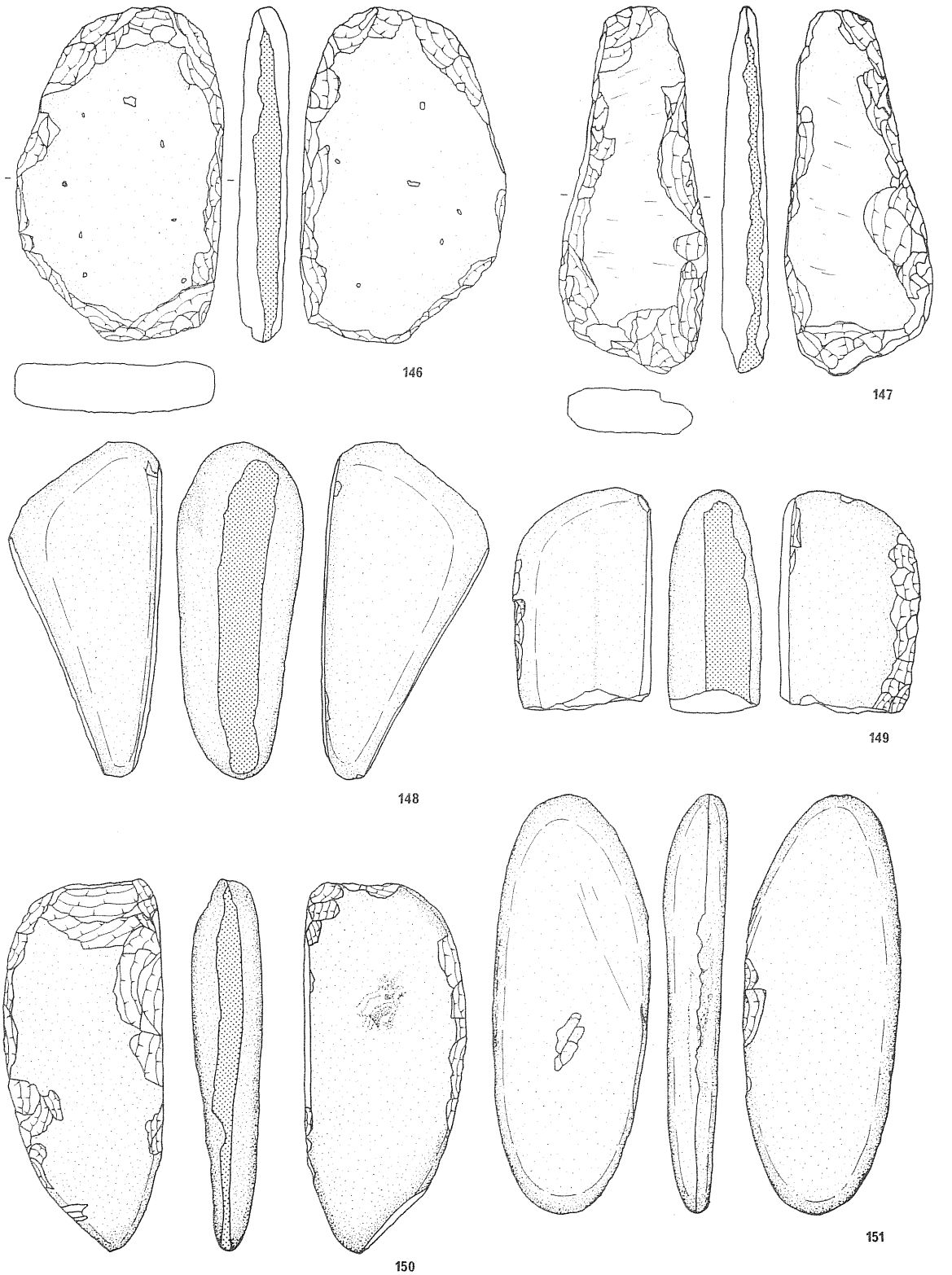
第42図　出土石器(8)　その他の石器



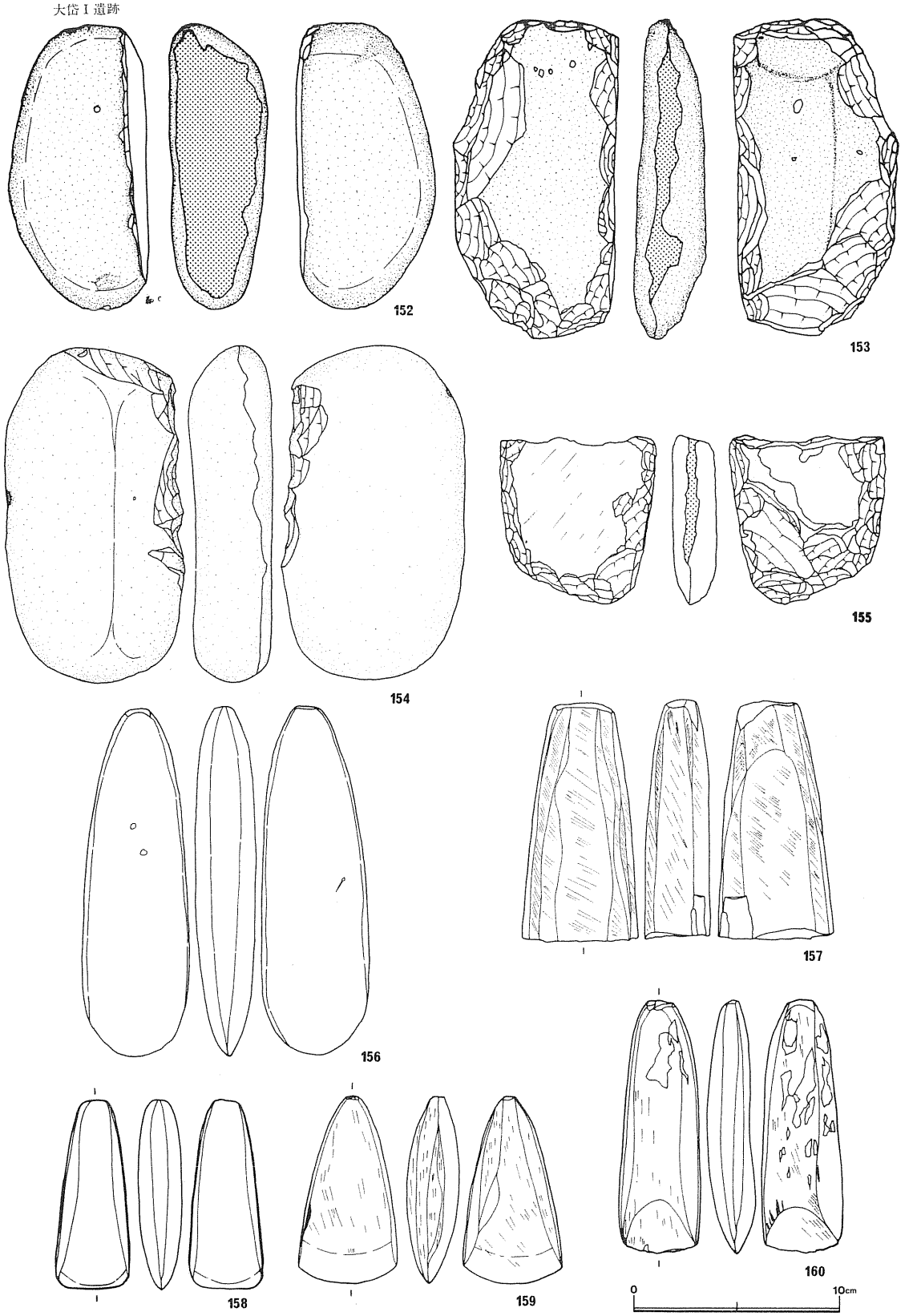
第43図　出土土器(9)　半円状扁平打製石器



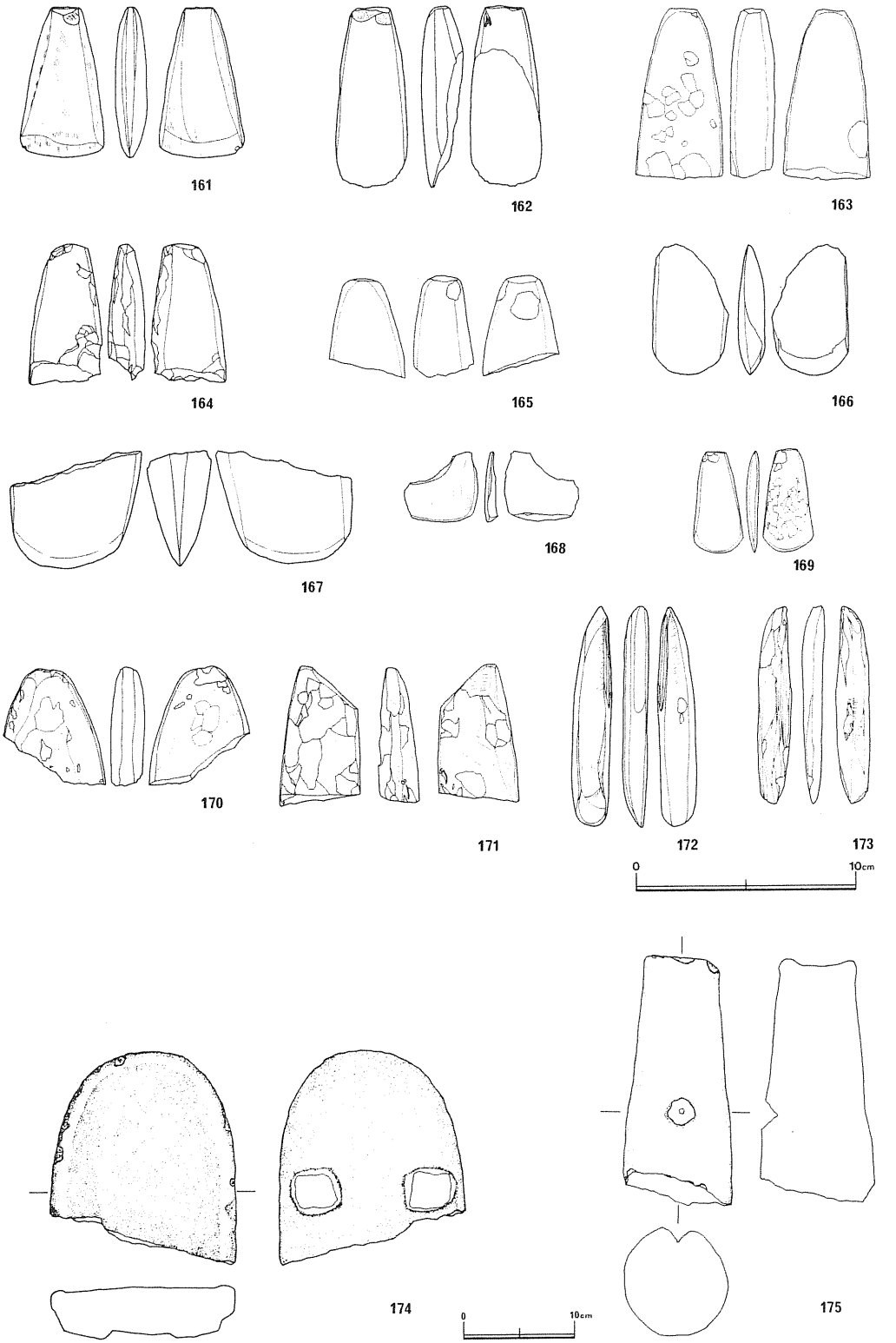
第44図　出土石器(10)　半円状扁平打製石器・有擦痕打製石器



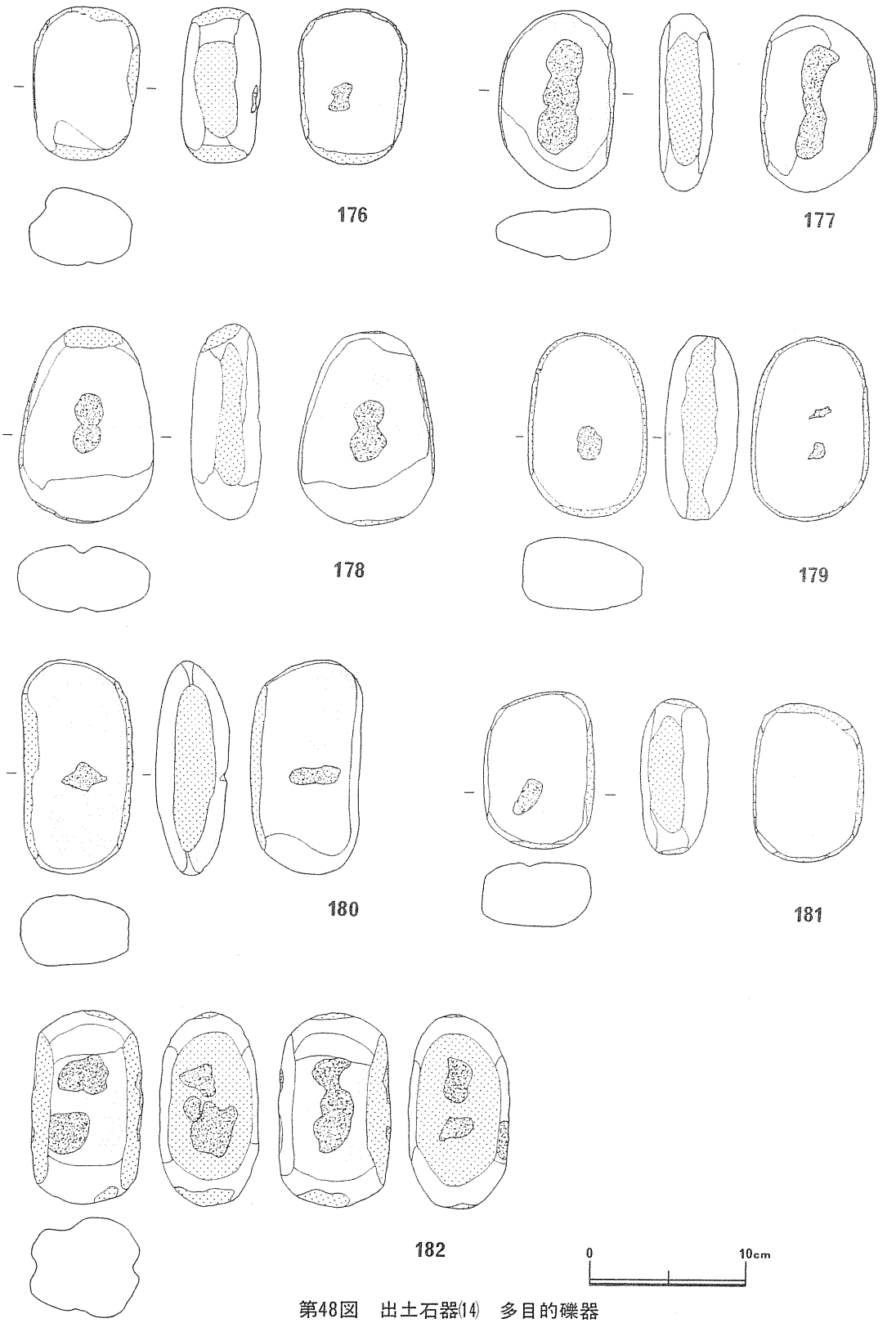
第45図　出土石器(11)　有擦痕打製石器



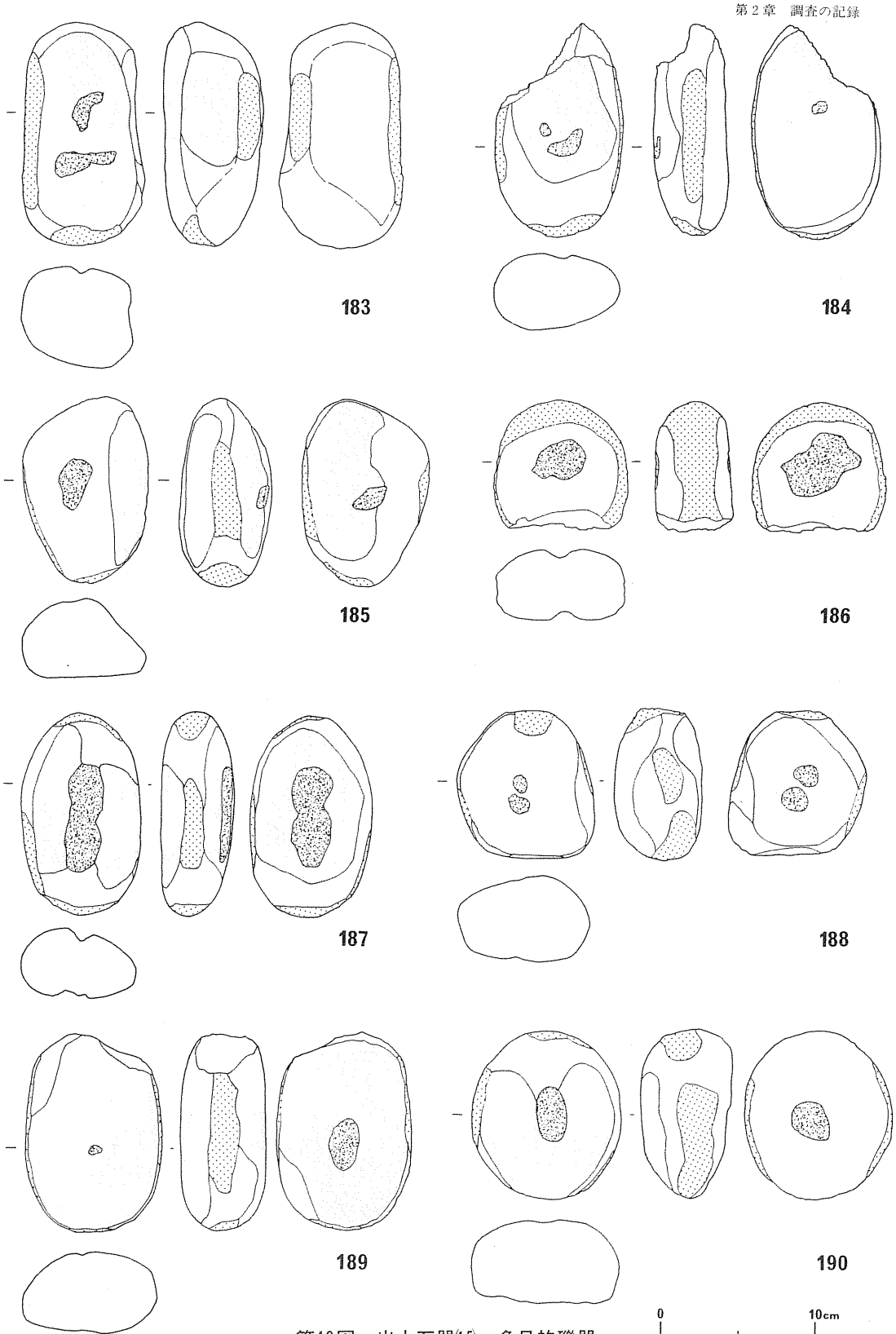
第46図　出土石器(12)　有擦痕打製石器・磨製石斧



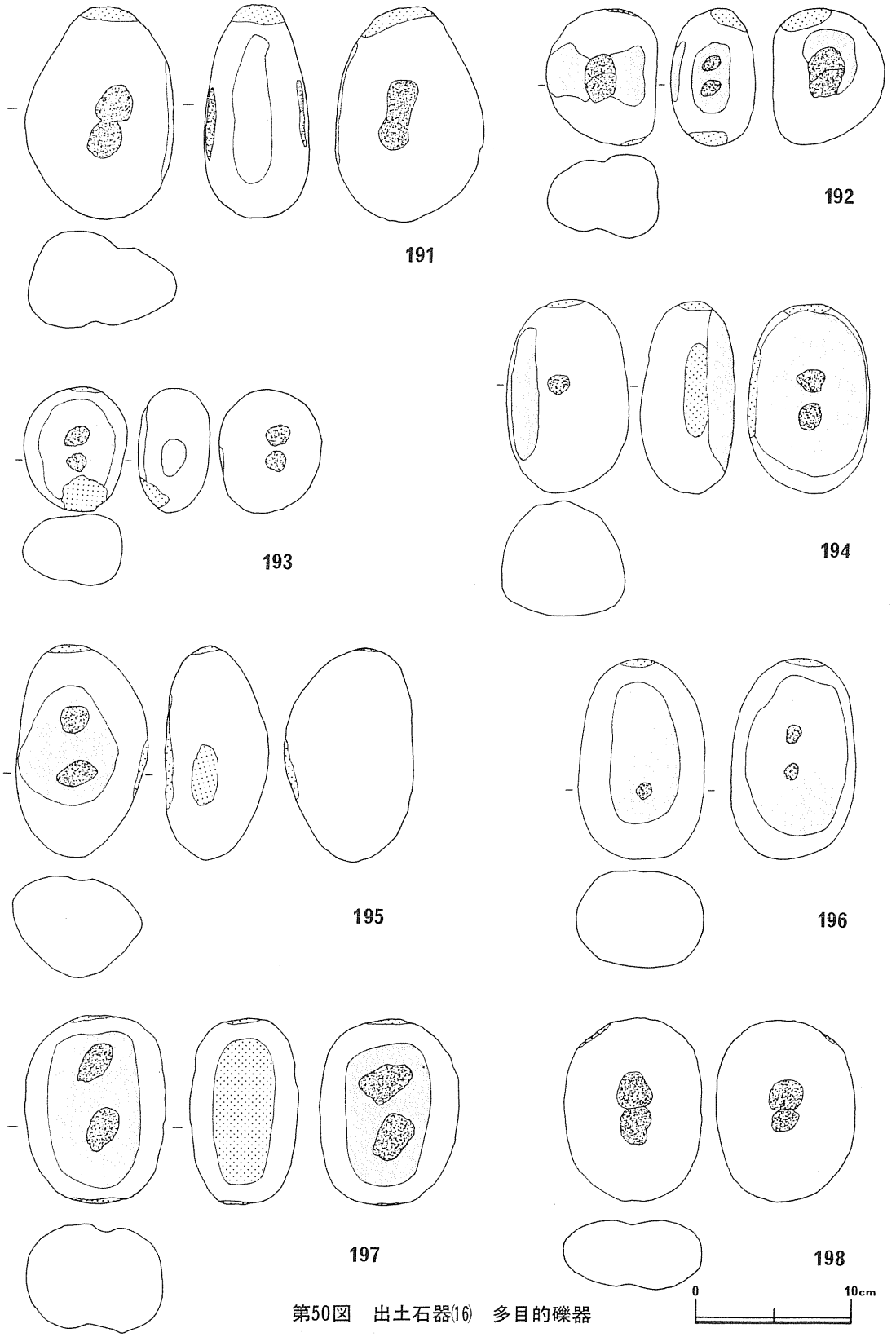
第47図　出土石器(13)　磨製石斧様石製品・石皿・石棒



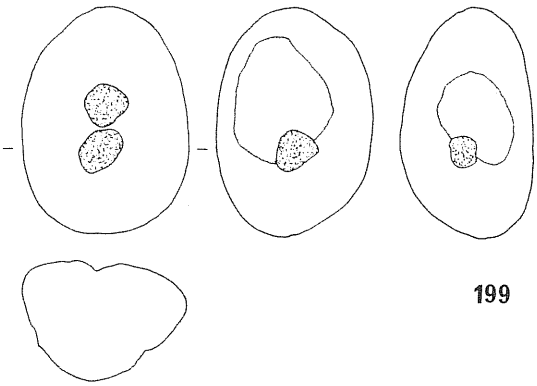
第48図　出土石器(14)　多目的礫器

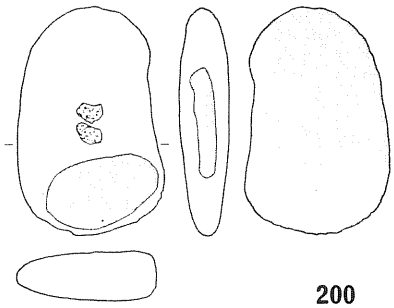


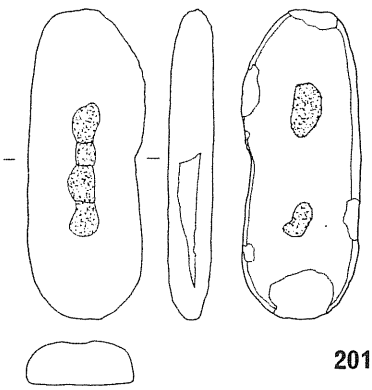
第49図　出土石器(15)　多目的礫器

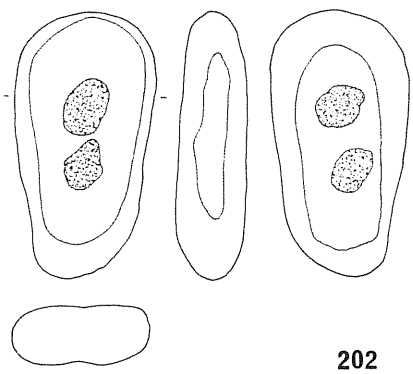


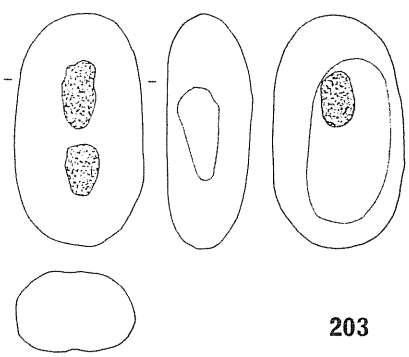
第50図　出土石器(16)　多目的礫器

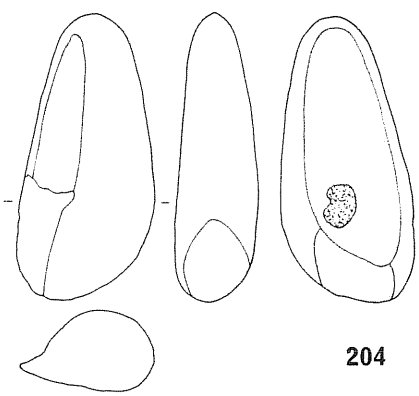


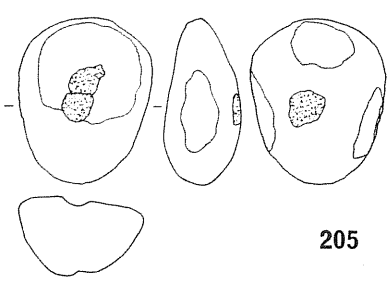


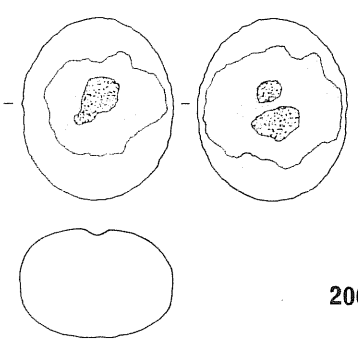




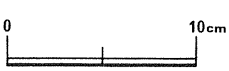


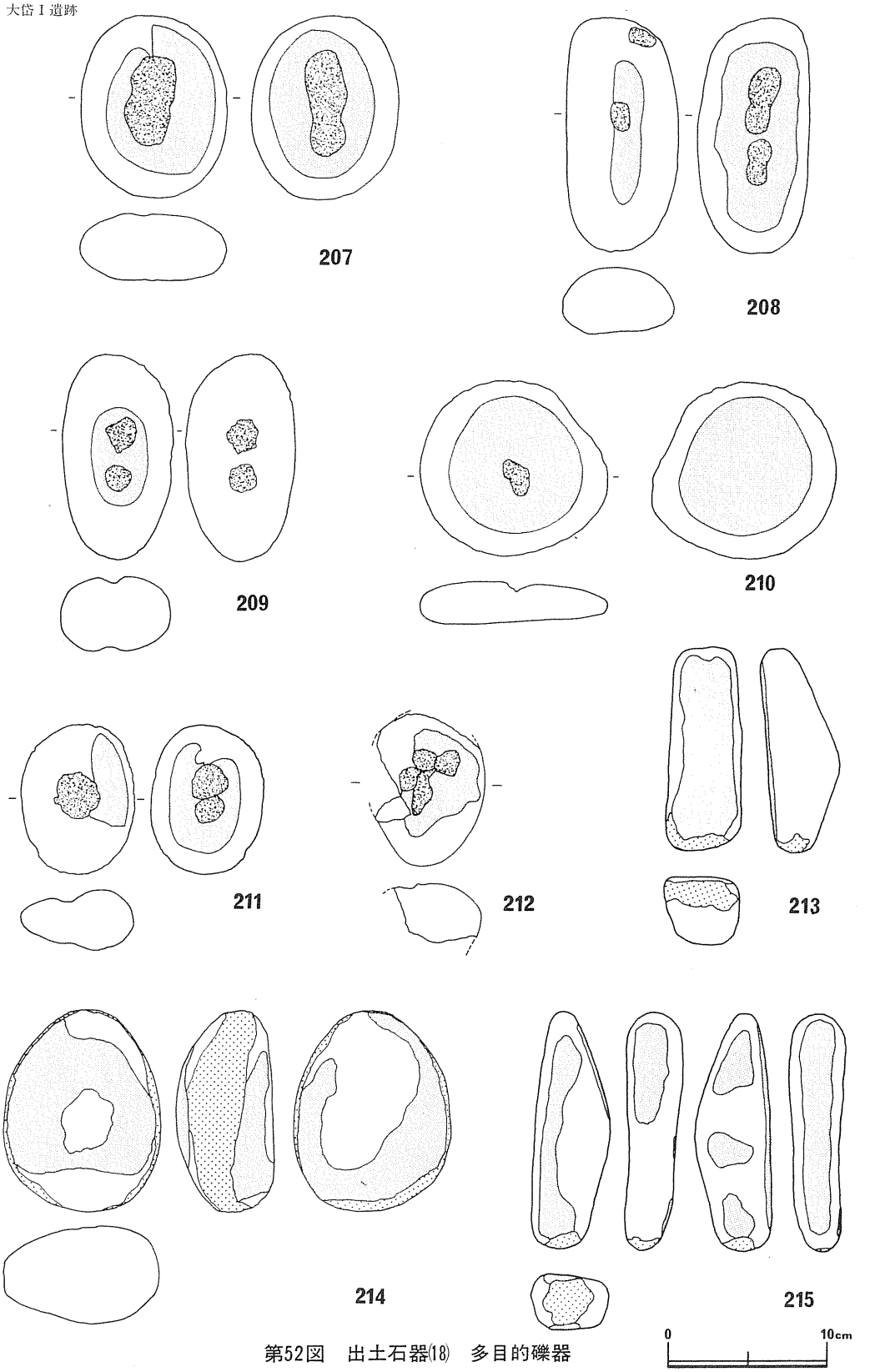




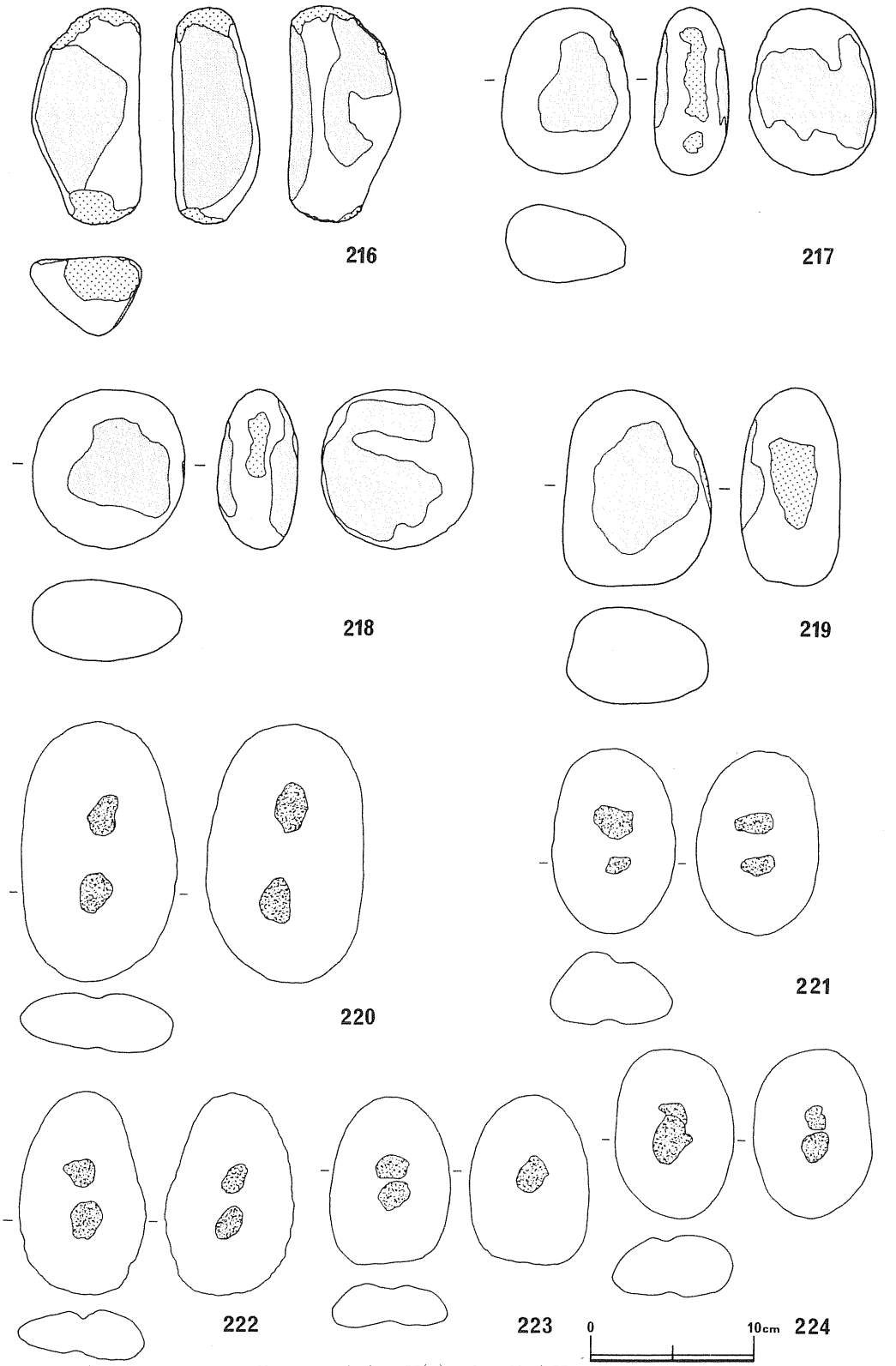


第51図　出土石器(17)　多目的礫器

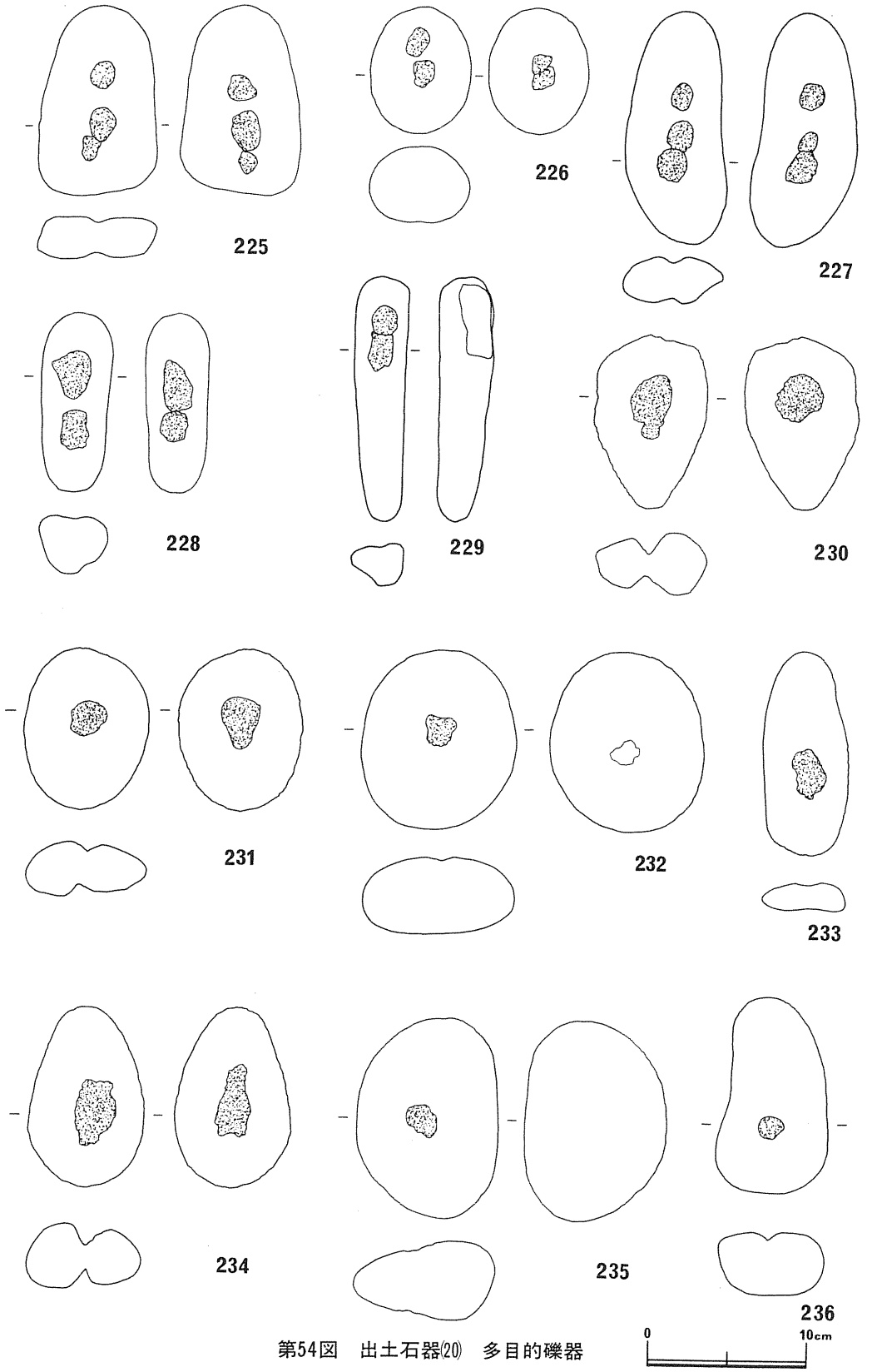




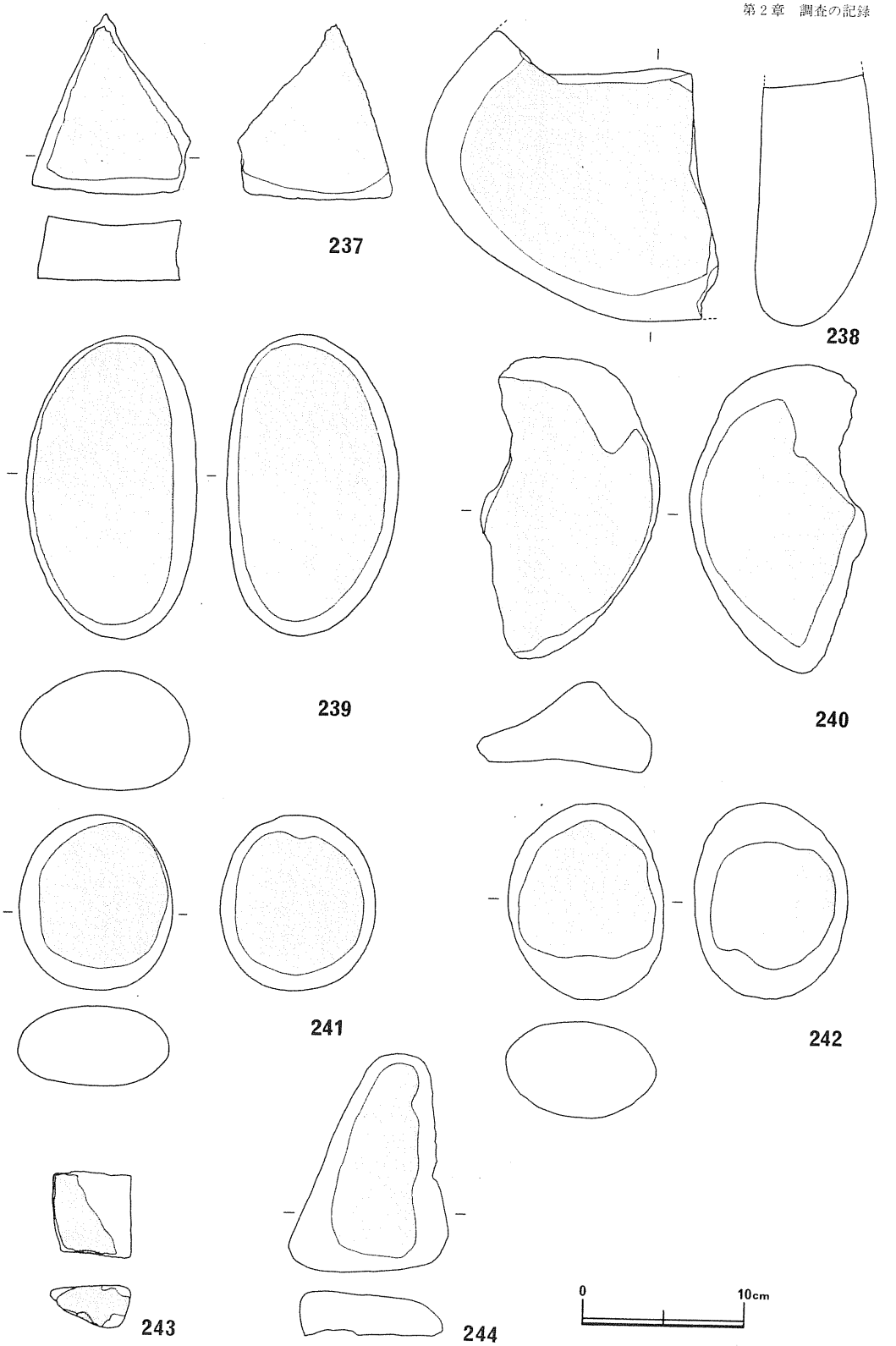
第52図　出土石器(18)　多目的礫器



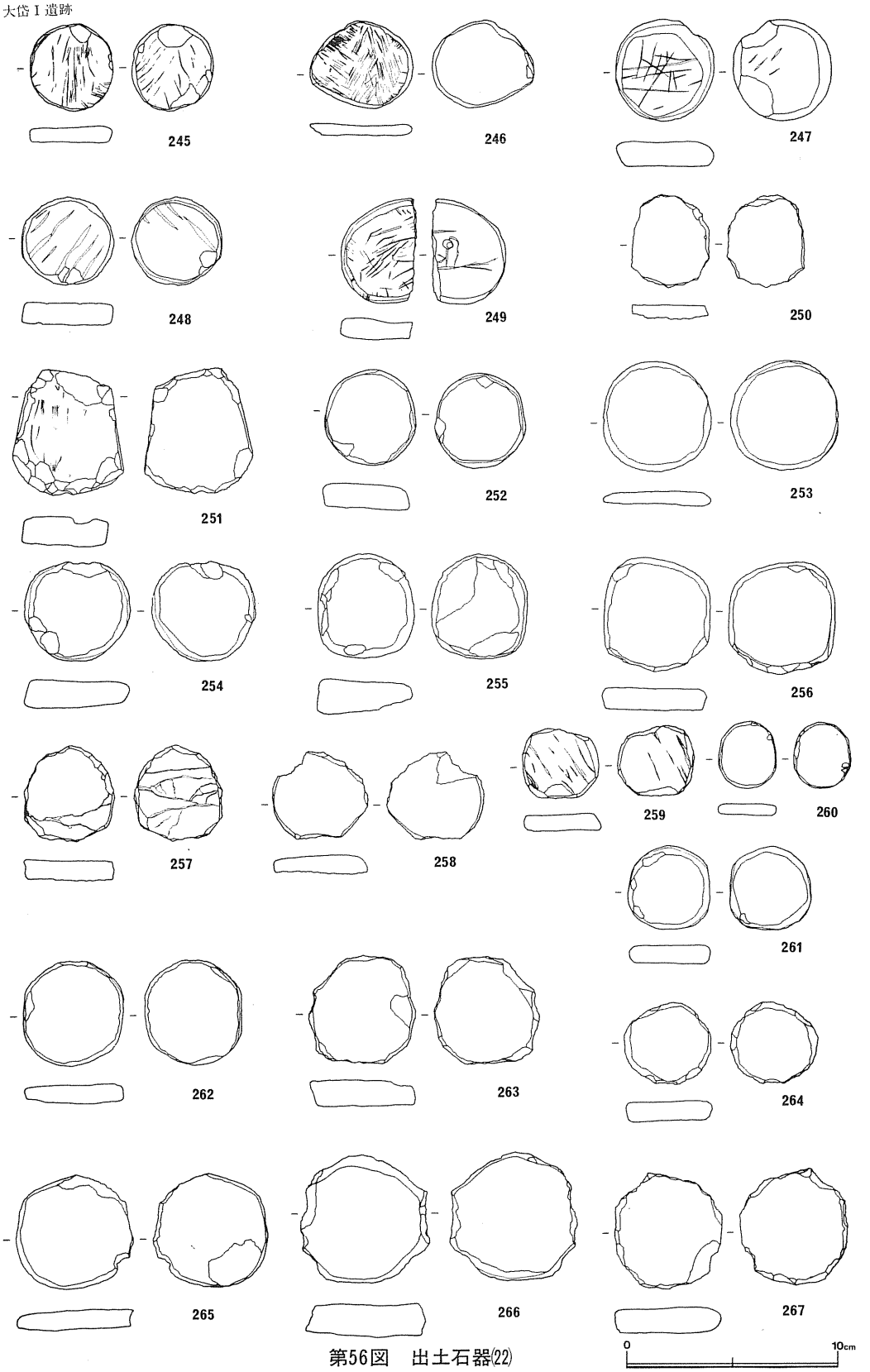
第53図　出土石器(19)　多目的礫器



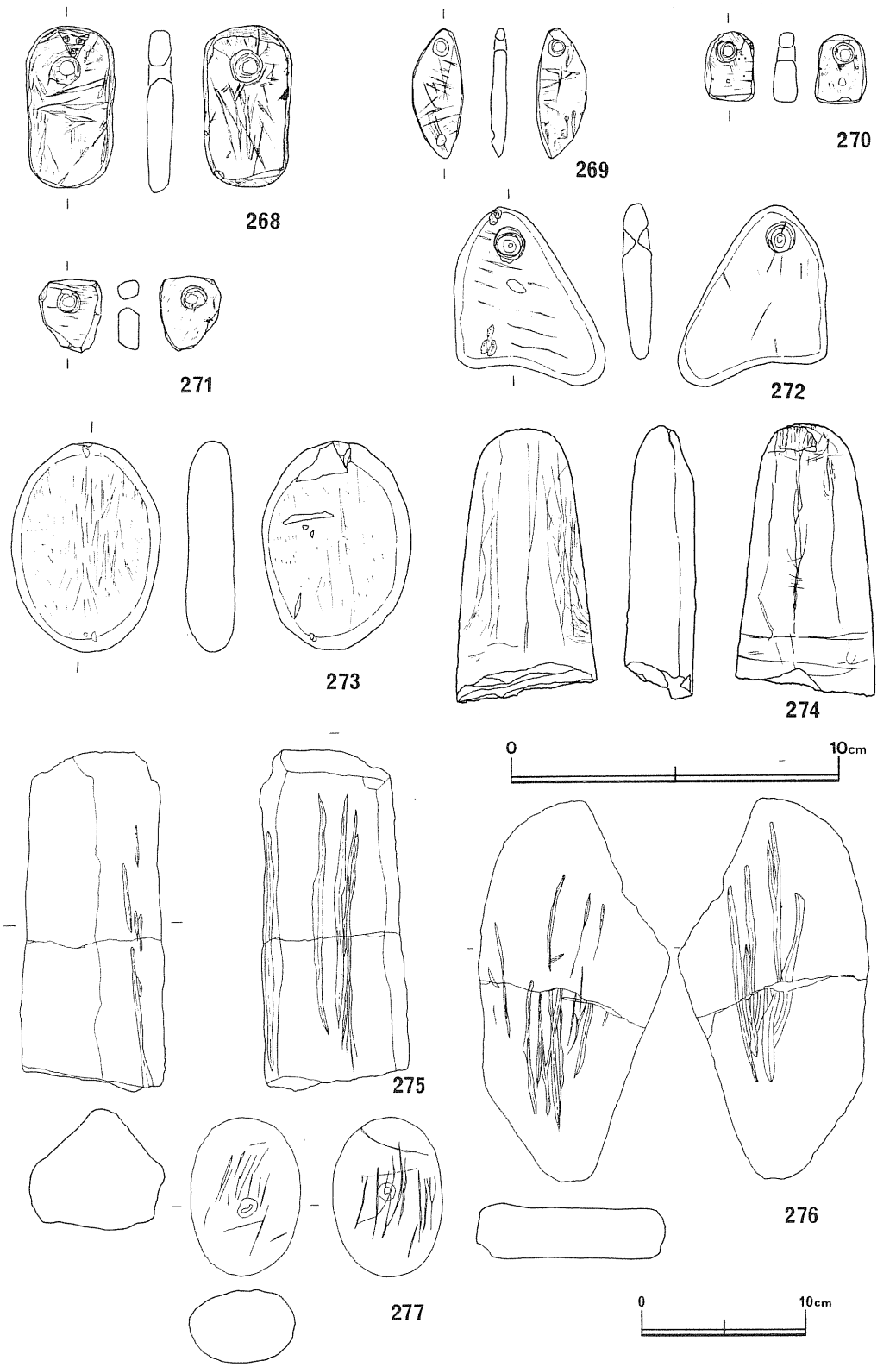
第54図　出土石器⑳　多目的礫器



第55図　出土石器(21)


245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
0
10cm

第56図　出土石器(22)



第57図　出土石器(23)

もに統一性はなく、思い思いの石材に孔を穿って垂飾としたものであろう。268は硬質の泥岩を素材とし、これを小判形に仕上げ、孔をあけたものである。表面の孔の上部には逆三角形の浮彫がある。この逆三角形の中には目と口が表現されたと思われる丸い小さなくぼみがあり、全体としては顔の意匠であると思われる。269は凝灰岩、270、271は安山岩、272は泥岩を原材としている。272の孔は完通していない。

線刻礫（第57図274、図版43）調査区北東端部の後期の遺物包含層から出土した。細長い安山岩の両面に極細の浅い線刻を施したものである。表・裏面とも中央２～３条の縦線、その両側にこの縦線に平行する線を描いており、裏面ではそれが１条づつであるが、表面のそれは数条づつで、下端で外側にカーブしている。裏面の先端部には短い条が並び、下端には横に２本平行な条が走っている。この安山岩は途中で折れているが、この線刻が図示した範囲で終るものか、あるいはもっと続きがあったものかは不明である。また、この線刻が描いたものが何であったのかは不明である。

有擦痕礫（第57図273、277、図版43）　円礫に無数の擦痕をもつものである、273は泥岩277は安山岩である。

有溝礫（第56図275、276、図版43）　角礫などに数条の擦った結果できたと思われる溝を持つものである。砥石と思われる。石材は 275が石英安山岩、 276は砂岩である。

円盤状石製品（第56図245～267、図版43）　安山岩、石英安山岩、粘板岩、泥岩、凝灰岩などの扁平でうすい石材を丸く打ち欠いて円盤状にしたものである。製品の直径は３～６cm厚さ0.5～1.5cmである。245～249、252～256、259～262、264のように、表裏面あるいはどちらか一面を擦って、扁平にし、さらに全周かその一部も擦っているものと他のように単に打ち欠いただけのものとがある。

第２節　弥生時代の遺構と遺物

遺跡のほぼ全域にわたって弥生時代の遺物が散見された。遺物は、第３層大湯軽石層下の第４層暗褐色土層（チョコレート色を呈する）の上位及び中位から出土した。

１　発見遺構と遺物

遺跡のほぼ中央部で、弥生時代の土壙2基が発見された。土壙の周囲には、他の遺構・遺物が集中することもなく土壙が単独で存在した。

(1)土壙

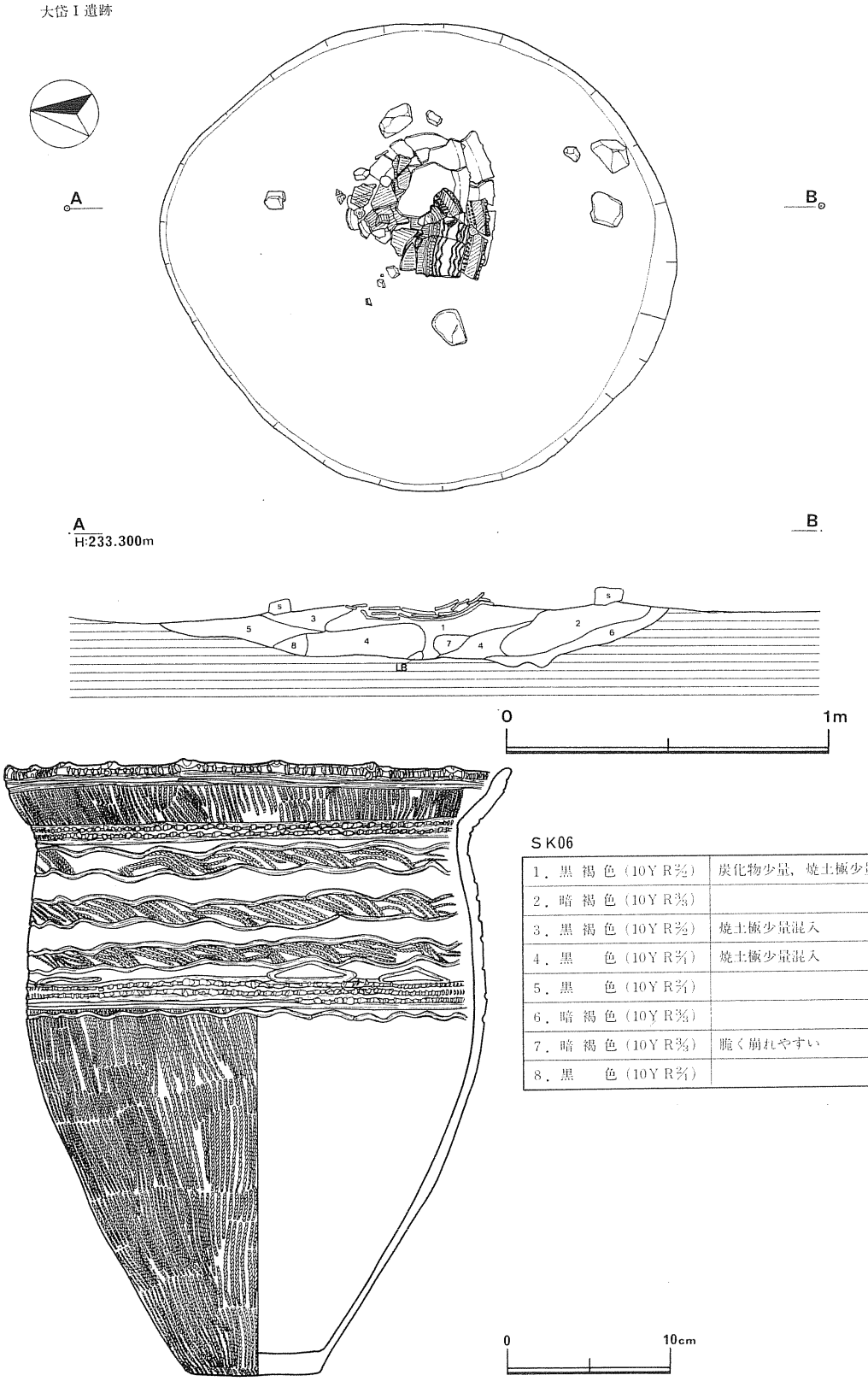
ＳＫ06土壙（第58図、図版44、46）

調査区中央部やや北寄り、ＫＦ71グリッドで発見された土壙である。同グリッドの第４層暗褐色土を掘り下げたところ、間もなく甕形土器が押し潰された形で発見された。弥生時代に属する土器で、しかも完形品であったものが割れたと思われる状況にあったため、周囲を精査したところ直径約1.5ｍの円形を呈する土壙であることが判明した。土器は口縁をほぼ真南にして中央やや東寄りに横たわっており、その周囲には４～５個の径10cm前後の角礫があるが、これが特に意味のあるものとは考えられない。土壙の深さは土器発見面から約20cmと浅く、壙底面はゆるい皿状を呈しており、それほど堅くない。埋土上部にわずかに焼土粒、炭化物が認められたが、壙内で火を焚いたものとは思われなかった。また埋土中に副葬遺物的なものの存在も予想されたため、慎重に掘り下げを行なったが何も出土しなかった。

出土した遺物は、壙中央から潰れた状態で発見された土器１点のみである。この土器は、小さな底部からゆっくりした曲線を描いて頸部に至る倒卵形の胴部に、内湾気味に開く口頸部が付いた甕形土器である。器高38cm、口径31cm、底径８cmを計る。口縁には小さな山形の突起が付され、このため波状を呈する。文様帯は口頸部、胴部上半にあり、それぞれの下限は３～４条の平行沈線と条間を埋める竹管による刺突列によって区画される。口頸部文様帯は上から、竹管による縦位の刻み、２条の平行沈線、縦位の縄文の配列で施文され、口縁の突起部の下には竹管が不規則に刺突されている。胴部文様帯には２条一対の連弧文帯が３段施され、連弧文帯の中は横走～斜行する縄文で埋められている。この対になる連弧文の上と下の弧は½程度ずれるように描かれており、連弧文帯と連弧文帯の間は磨消によって無文化している。胴部文様帯の下限は頸部と同様の平行沈線と沈線間を埋める刺突列であるが、平行沈線は４条で、このため刺突列は一部で３段となっている。胴部中位以下には胴部文様帯に接続する形での連弧文と、縦位の縄文が施されている。縄文は単節のＲＬ縄文である。この甕形土器は弥生時代中期後葉に属するものと思われる。

ＳＫ02土壙（第59図、図版45、46）

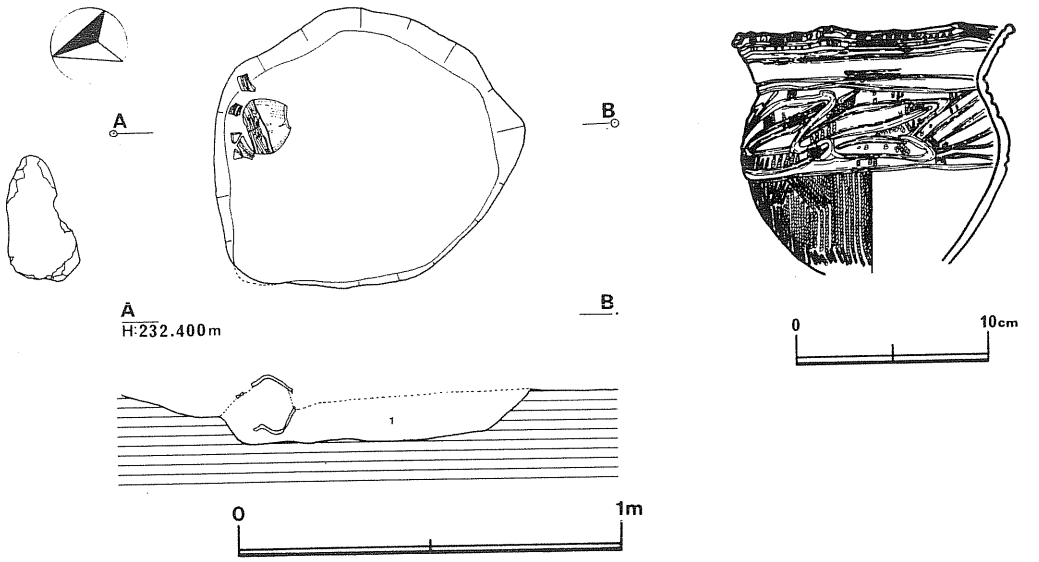
ＳＫ06土壙の南南西90ｍ、ＬＧ52グリッドで確認された土壙である。この部分では、大湯軽石層の下に３ｍ×２ｍの風倒木痕を認めていたがこれも含めて、第６層漸移層直上まで掘り下げたところ、その中央部分から弥生時代の台付鉢形土器が単独で発見された。周囲を精査した結果、この台付鉢形土器は径0.7ｍの円形を呈する土曠の北端部に口縁を北にして横たわっていることが判明した。この土曠は風倒木痕を掘り込んで構築されているため埋土は地山土に似た色調を呈するが、壁面、底面とも比較的しっかりしている。確認面からの深さは15cm前後と浅いが、構築時には35～40cmあったものと考えられる。土壙の北0.5ｍに、土壙確認面よりも



SK06

1．黒 褐 色（10Y R2/2）	炭化物少量，焼土極少量混入
2．暗 褐 色（10Y R3/3）	
3．黒 褐 色（10Y R2/2）	焼土極少量混入
4．黒　　色（10Y R2/1）	焼土極少量混入
5．黒　　色（10Y R2/1）	
6．暗 褐 色（10Y R3/3）	
7．暗 褐 色（10Y R3/3）	脆く崩れやすい
8．黒　　色（10Y R2/1）	

第58図　ＳＫ06土壙(墓)と出土土器



ＳＫ02
１．黄褐色（10ＹＲ5/8）炭化物粒少量、焼土、粒少量混入全体的に粗くボソボソ

第59図　ＳＫ02土壙(墓)と出土土器

20～25cm程浮いた状態で30cm×15cmのやや扁平な角礫が横位に存在する。この角礫の面が土壙の堀り込み面と考えられるところから、何らかの関連も推察されたが、結論を出すには至らなかった。

他の副葬遺物等の存在を予想してＳＫ06同様慎重に掘り進めたが、上記の土器以外には何も出土しなかった。この土器は、球形の胴部に、「く」の字形に外反する口頸部が付く台付鉢形土器で、台部は欠損している。口縁は波状口縁を呈し、台形状の頂部には竹管による刻みが施され、内面には口縁に沿って１条の沈線が巡る。口頸部文様帯は、口縁に沿った１条の沈線と、２条の平行沈線、それに竹管による縦位の刻文とからなり、頸部の沈線で文様帯の下限を画している。胴部文様帯は上半にあり、縄文地の上に磨消縄文手法による粗雑な波状工字文が描かれている。やはり下限を一条の沈線で画し、胴部下半にはＲＬ単節縄文が縦位あるいは斜位に施されている。弥生時代中期中葉の土器と思われる。

２　その他の出土遺物

遺跡のほぼ全面から散発的に弥生時代の遺物が出土している。遺物の中には、図示できるような石器はなく、 若干の剥片だけで、 他は全て土器片である。土器は弥生時代中期～後期のもので、バラエティーに富む。

(1)　第１群土器

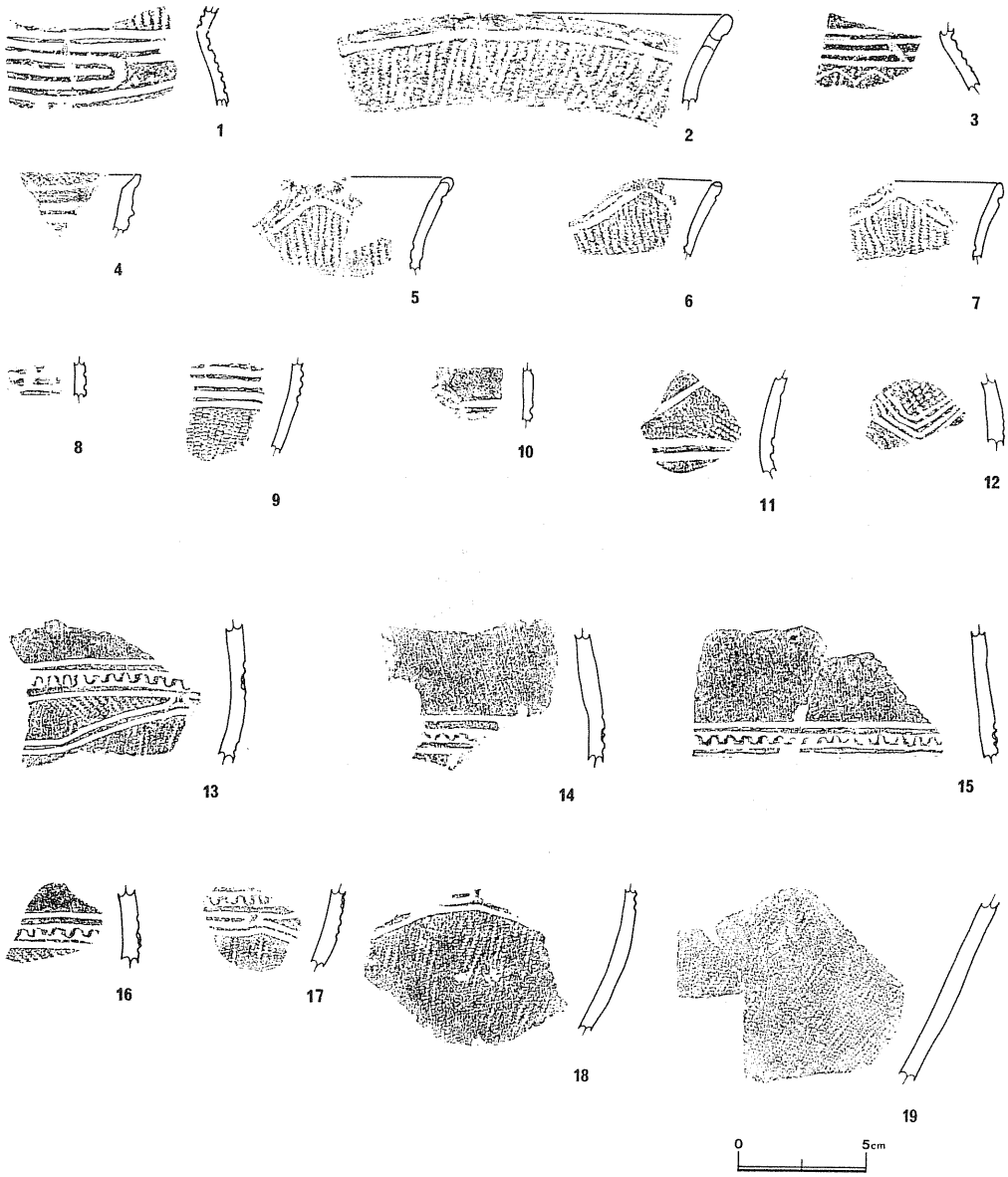
中期に属すると思われる土器群である。甕形土器、鉢形土器、壺形土器がある。

第61図20、22は縄文時代晩期の土器である可能性が高いが、ここでは本群に入れた。

甕形土器（第60図１～３、５～12、61図27、28、図版47、48）　主に口頸部破片のみで完全に復元できたものはない。口頸部の形状及び、施文の違いによって４種に分類できる。①「く」の字形に外反する口頸部に丸味のある胴部の付くものである。60図１がそれで、口縁部外面には縦位のＲＬ縄文、内面に２条の平行沈線、胴部上半に工字文が施されている。②頸部が直立して口縁部が大きく外反するいわゆる長頸甕形土器と思われるもので、60図５～10がこれにあたる。５～10は同一個体で、５～７が口縁部、10が頸部、８、９が胴部上半の破片である。大きく波打つ口縁の波頂には短い粘土紐が付され、その上から３条の押圧が加えられている。文様は平行沈線文と縦位のＲＬ単節縄文による。頸部内面に２条の平行沈線がめぐっている。全体に薄手で焼成良好。③丸味を持つ胴部に、外反する口頸部の付く甕形土器である。61図27、60図２、３、11、12がこれで、２、３は同一個体である。27、２、３と平口縁で地文に縦位のＲＬ単節文が用いられている。27は口縁部、胴部上半ともに平行沈線と連続山形文が施され、胴部上半の沈線間には竹管による右横位からの刺突列が２段配されている。２．３では27に見られる口縁部の連続山形文と、胴部上半の刺突列がない。27、２、３は28と同じ胎土で焼成は普通全体に赤褐色を呈する。④61図28がこれで、丸味を持つ胴部に直立気味の口頸部の付く、短頸甕形土器である。平口縁で口縁部外面は剝落して不明であるが、全面にＲＬ単節縄文が縦位に施され、頸部にのみ２段の刺突列が配されている。この刺突列は棒状工具による左方向からのものである。

鉢形土器（第61図21、23、24、26、図版48）　やや丸味のある胴部で、口頸部がわずかに外反するもの（21、24、26）と内反するもの（23）とがある。21は台付の鉢形土器であるが、他は台が付くか否か明確でない。口縁部は全て波状を呈するが、頂部が山形状のもの（21、23、24）と、そうでないものがある。文様帯は胴部上半より上にあり、平行沈線文を主体として、磨消縄文手法が用いられている。21、23、24は、胴部上半に２～４条の平行沈線が施され、沈線上の数ヶ所には、１～２個の粘土瘤が貼付されている。口縁部には胴部下半と同じ縦位あるいは、斜位の単節縄文が施されている。縄文は21、24がＲＬ、23がＬＲである。26は台付のものと思われる。全面に縦位のＲＬ単節縄文を施した後、口縁部には縦位の刻文、頸部～胴部上半には６条の平行沈線を配したものである。波状口縁の頂部には横位の刻み目がある。外面全面と内面上半には朱が付着している。口縁部内面に、21に１条、26に２条の沈線が囲繞されている。

壺形土器（第61図25、図版48）　25は、球形に近い胴部に直立する短い頸の付く壺形土器である。平口縁で口縁部は無文。頸部に１条の沈線が囲繞する。胴部にはＬＲ単節縄文が横位に施されている。

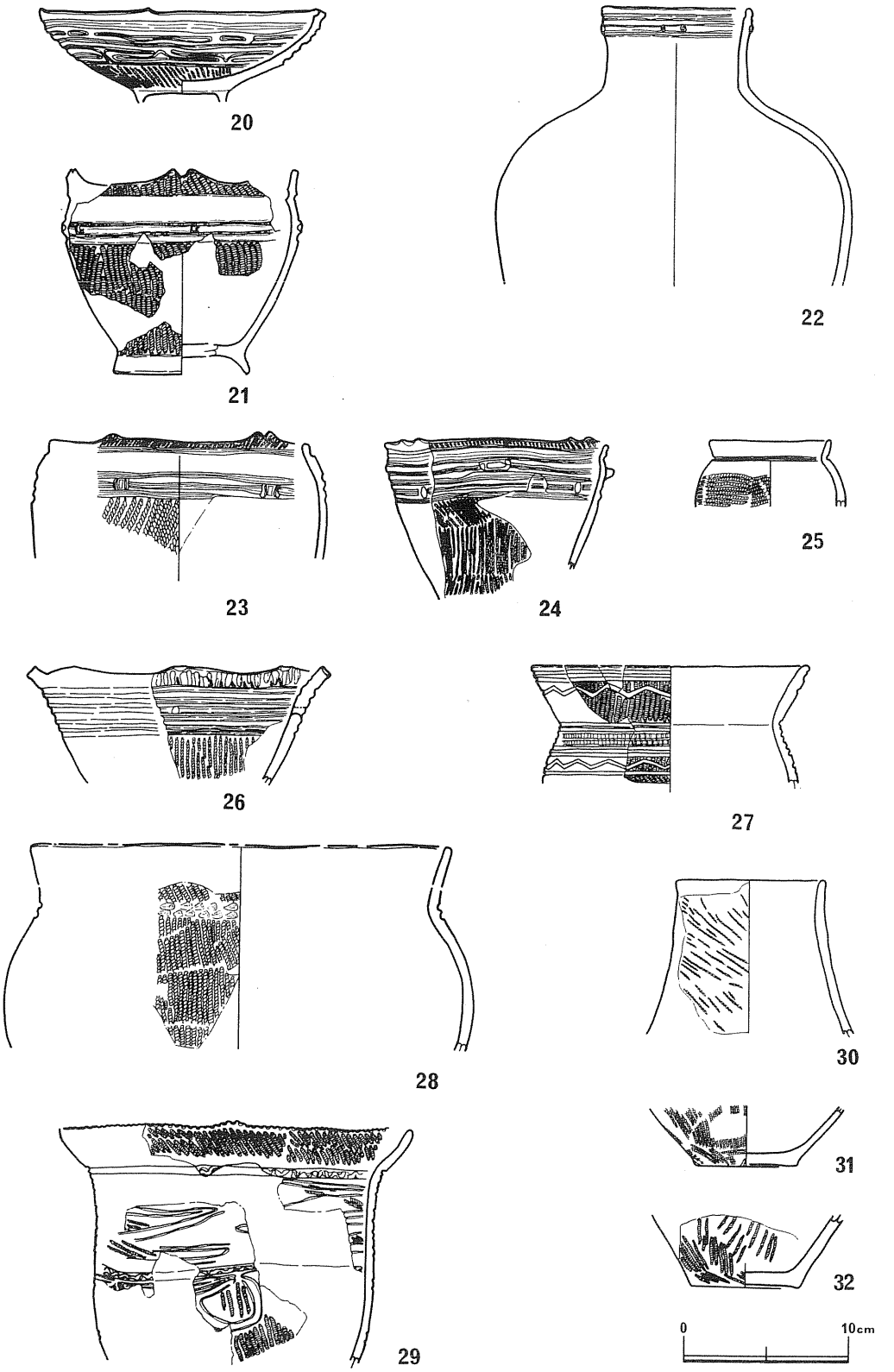


第60図　弥生時代１・２類土器第Ⅰ群土器　第Ⅱ群Ⅰ類土器

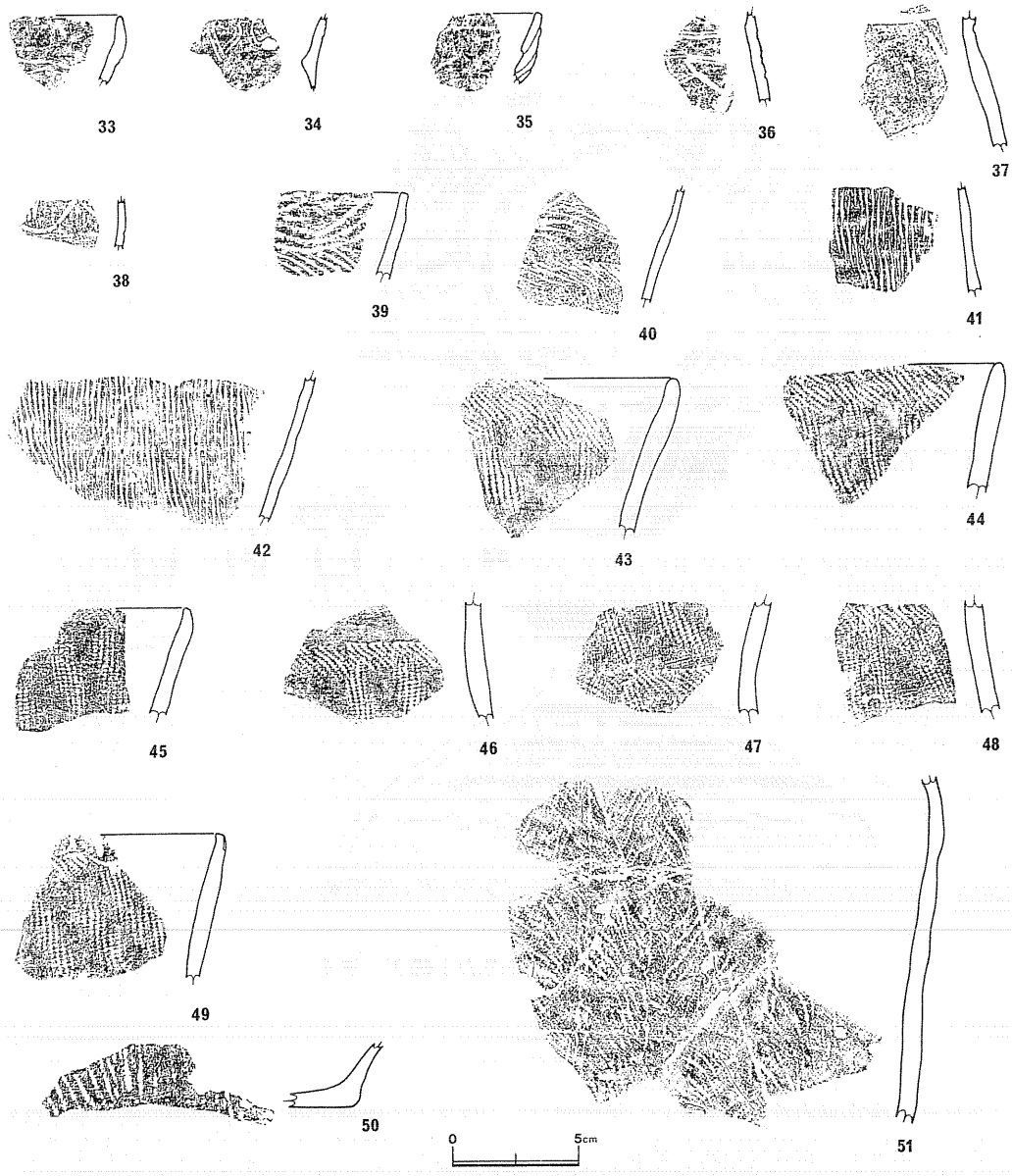
第２群土器

弥生時代後期に属すると思われる土器群である。文様には交互刺突文、撚糸文、ごく粗雑な沈線文などがある。

第１類土器（第60図13～19、61図29、図版47、48）　交互刺突文の施された仲間である。甕形土器がある。

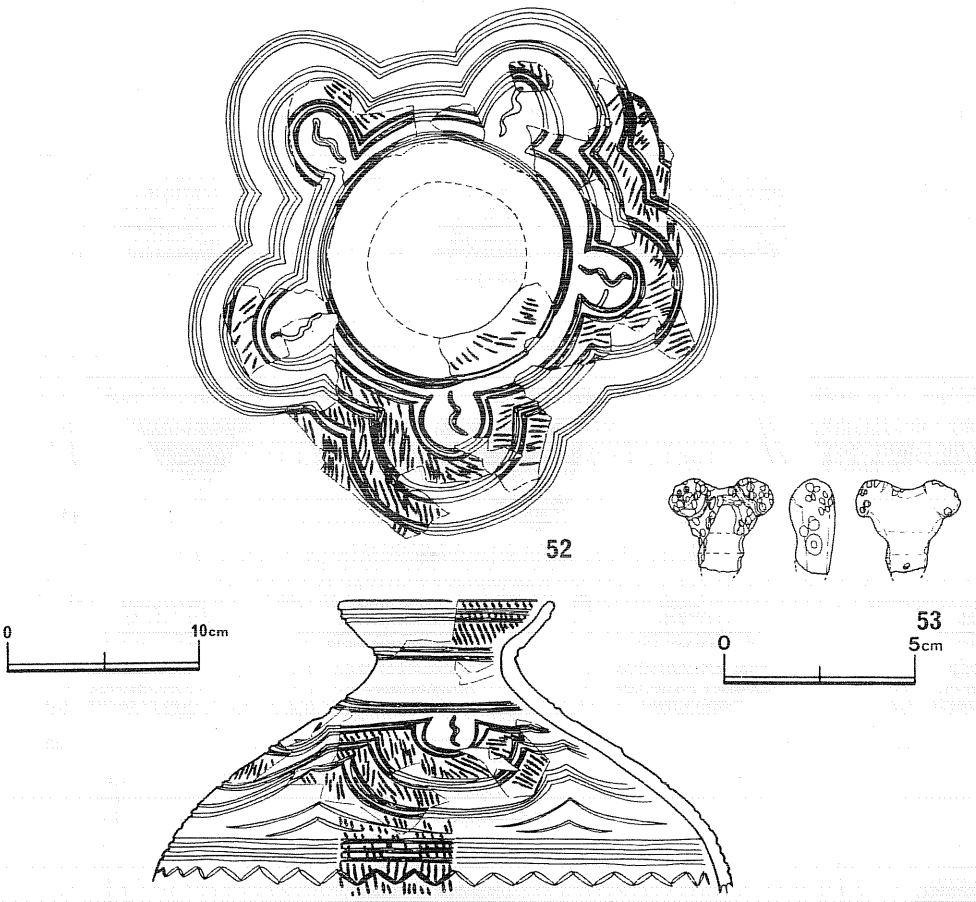


第61図　弥生時代の土器(1)



第62図　弥生時代、３類土器

甕形土器　第61図29は脹らみの少ない胴部に、内湾気味の口頸部が付く甕形土器である。平口縁であるが、部分的に小突起が付く、口縁部にはＲＬ単節斜縄文が、口唇部には器内外から交互に行なわれた刻目が施されている。頸部は胴部中位のそれよりもやや大きめの粗い交互刺突文が巡る。胴部文様帯は上半にあり、ヘラ状工具の先端で粗雑な工字文を描いた後に、横位の単節縄文を部分的に充填している。下端には粗い交互刺突文、その下に2条の沈線で円形文が



第63図　弥生時代の土器(2)　把手

施されている。胴部下半は縦位の単節縄文。胎土には砂粒を含み、焼成不良である。内外面ともに煤状炭化物の付着が著しい。第60図13～19は大型の壺形土器の胴部下半の破片とも思われるが、器外面に煤状炭化物が付着しており甕形土器とした。同一個体である。胴部最大径の部分に4条の平行沈線を囲繞させ、中央の条間に細い竹管による交互刺突文を施す。上半は無文で、下には2条の平行沈線と短刻線で結ばれた三角連繋文が横走する。三角連繋文の間には斜位の撚糸文が充填されている。胴部下半は縦位の撚糸文。胎土、焼成ともに良好である。

第2類土器（第62図33～37、図版47）　粗雑な沈線文で文様を描いた仲間である。数が少なく、小破片ばかりなため器形は明確でない。

33、34は同一個体で壺形土器の口頸部破片と思われる。壺形土器であれば非常に小さな口で細長い頸の付くものかも知れない。非常に浅くて粗雑な沈線で口縁部に1条の沈線とハート形

の連続文様を描いている。35もこれに近いものと思われる。36は半截竹管で工字文風の文様、37は円形文を描いている。胎土、焼成ともにやや不良から普通。

第３類土器（第61図30～32、62図39～42、50、51、図版47）　器面のほぼ全面に撚糸文の施されたものである。器形は不明なものが多い。61図30は壺形土器の口頸部かと思われる。口縁部はほんのわずかしか残っていない。施文幅の短い撚糸文が斜位に施されている。62図39、40は口頸部破片で同一個体である。直立気味の口縁部には撚糸圧痕による菱形文風の文様、その下には斜位の撚糸文が施されている。41、42も同一個体で縦位の撚糸文である。51は撚糸文によって縦位の羽状縄文風の文様が表出されており、横位の綾絡文も見える。61図31、32、62図50は底部破片である。31の底部には４ヶ所の張り出しが作られ、このため底面は脹らみのある方形となっている。

第４類土器（第62図43～49、図版47）　いわゆる帯縄文の施された仲間で、口縁部が外傾し、端部で直立気味になる甕形土器であると思われる。縄文の施文順序は、ＲＬ原体を横位に回転施文し、その下にそれぞれ1.5㎝前後の間隔を持つように縦位の縄文を施したもので、これで１段の文様帯になっている。43～48は同一個体である。49の施文方法は43～48と同じであるが、口縁部に原体の圧痕が縦位にあり、口唇部にも縄文が施されている。

第５類土器（第62図38、63図52、図版47、49）　平行沈線で連弧文及び「Ｕ」字文が描かれたもので、磨消縄文が行なわれている。62図38は連続する円形文あるいは「Ｕ」字文と浅い平行沈線が見える。63図52は球形の胴部から頸部で大きくすぼまり、短い口縁部が内湾気味に大きく開く壺形土器である。平口縁であるが、数ヵ所に小さな突起が付く。口縁部から胴部上端では３単位の平行沈線が囲繞され、口縁部には内外面ともに縄文が縦位に施されている。主文様帯は胴部上半にある。３単位の平行沈線で連弧文が、花弁状に描かれ、このうち５ヶ所では「Ｕ」字形文となっている。Ｕ字形文の中には四分休符状の短沈線が施される。これらの沈線間には単節縄文が充填されるが、磨消縄文手法によって一部無文化している。文様帯の下端は３条の平行沈線と連続山形文で画される。胴部下半には縦位のＲＬ単節縄文が施されている。この土器の胴部最大径は30㎝強で、直径7.5㎝の底部も出土しているが、うまく接合しない。胎土にはあまり砂粒を含まず、焼成は普通である。

把手（第63図53、図版49）　動物の頭部を装飾化したような小さな把手が１点出土している。熊であろうか。丸い耳と顔面が描かれていたように見えるが、その部分は剝落している。表面には先端の尖った棒状工具による刺突が全面に施され、側面から焼成前に小孔が穿たれている。首のところで折れているが、この部分の断面は直径約１㎝の円形を呈する。

第3章　ま　と　め

大岱Ⅰ遺跡は小坂川の右岸、標高 231～ 235ｍの段丘（関上面）上にある。この段丘面は、これまで大谷地環状列石、寺の沢Ⅰ・Ⅱ遺跡、小坂環状列石墳墓(註1)など多くの遺跡、遺物の発見されて来た段丘面とは小坂川をはさんで東西に対峙する位置にあり、それだけに調査成果が期待されていた。しかし、合計18,624㎡の発掘調査面積の割には発見された遺構は縄文時代竪穴住居跡３軒、土壙16基、Ｔピット２基、井戸状遺構２基、焼土20ケ所、弥生時代土壙２基と少ない。また、遺物も縄文時代前期から弥生時代後期にわたって出土したが、散発的な出方であった。このように遺構、遺物の少なかった理由としては、今回の調査対象区が段丘西端部であり当該時期の生活の中心的な場ではなかったということが考えられる。現に、この段丘の東側に張り出した舌状台地に近いところからは比較的多くの遺物が出土し、南端の舌状台地部分にある大岱Ⅳ遺跡からは縄文時代前期の遺構、遺物が多く発見されている(註2)。しかしながら、今回の調査は細長い台地の西半分を発掘したものであり、そこに残された古代人たちの土地利用、占地のあり方を考える上で貴重な資料になったものと言える。

このように少ない遺構、遺物ではあるが、その中のいくつかの遺構、遺物について以下にまとめてみたい。

１　土器横置石囲炉について

ＳＩ 01は縄文時代後期初頭に属すると思われる竪穴住居跡である。しかし炉だけの確認で、全体のプラン等は不明である。この炉は基本的には石囲炉であるが、炉の一部に土器が用いられている。つまり、長径10～30cmの扁平な河原石９個を立て並べて、直径約 0.7ｍの円形石囲炉としたものであるが、炉の南東隅で石と石の間があいており、ここに二重の粗製深鉢形土器が口縁を炉の内側に向けて横位に置かれているものである。炉石の内側は強い熱を受けて赤化し、土器もその周囲とともによく焼けている。この深鉢形土器は正立あるいは斜位になっていたものが倒れたり、偶然にこの場に落したものではない。このように、石囲炉の一部に深鉢形土器を横位に用いる例はこれまで県内で発見されたことはなく、わずかに岩手県都南村湯沢遺跡に類似を見ることができる(註3)。しかしながら湯沢遺跡のそれは、〈石組形斜位土器埋設炉…円形の石組の一端に土器を斜めに埋設したもの(註4)〉で、本遺跡例とは若干異なる。その時期も中期大木10Ⅱ～Ⅲ期で、本遺跡例よりもわずかに先行する。また、このＳＩ 01の炉が本遺跡後期初頭の炉の形態として一般的なものであったかどうかも不明であり、これとほぼ同時期と見られるＳＩ 03の炉には土器は用いられていない。いずれにしろ、たった１例ではあるが湯沢遺跡に見られる〈石組形斜位土器埋設炉〉と何らかの関連が窺える例であり、今後の資料の増加等を

待ちたい。

2　多目的礫器について

これまで一般的には凹石、磨石、擦石、敲石などという名称で呼ばれていた石器群に対して、1つの個体で複数の機能を有していたと考えられるものが多いことから、これらを多目的礫器とした。これまでは、例えば凹石に磨いたり、擦ったりした痕がある場合、これを凹石の転用ということで処理して来たことが多い。これに対して、ここでは1つの礫器が最初からいくつかの機能を持つものとして用いられたと考えたのである。そのいくつかの機能を考える場合、残された痕跡が、使用された（機能した）結果としての痕跡か、これから使用するために剝離あるいは成形された痕跡であるのかが問題となる。本石器にあっては、主に3種の痕跡を認めることができる。Ⓐ＝凹み、Ⓑ＝ゴツゴツあるいはボツボツした面、Ⓒ＝ツルツルした面である。この中には、例えばⒶ＝凹みの場合、ごく痕跡程度のものと、深いもの、その中間くらいのものとがあり、いずれも使用された結果として残った痕であると考えるのが、妥当である。このことは、Ⓑ、Ⓒでも同様である。それでは一体、これらⒶ、Ⓑ、Ⓒはどのような使用及び機能の結果生じたものであろうか。ここでは、その裏付けとなるような実験などは一斉行っておらず、その論拠が弱いという謗りはまぬがれないが、一応以下のように推論した。(註5) Ⓐ＝凹み→モノを敲いた痕と思われる。この凹みが形成される場合、1回の打撃だけで大きく剝れることはなく、それは直径1～3㎜、深さ1㎜弱程度のことが多いようで、このような打撃がほぼ同一の部分にくり返しくり返し行なわれた結果、大きな凹みができる。モノの特定はむづかしく否定的な実験データもあるが(註6)、クルミの尖った方を台石などの上で叩いたのではなかろうか。Ⓑ＝ゴツゴツあるいはボツボツした面→モノを台石（石皿）の上で潰した痕と思われる。上下両端の痕跡は若干異なるが(註7)、両側辺の平担に近い面は有擦痕打製石器の側面に見られる状態と非常に良く似ている。有擦痕打製石器の場合、両面から打ち欠かれた後に平担でボツボツした面が形成されたのに対し、多目的礫器では両面からの打ち欠き痕はなく、自然面が使用の結果このような面になったものと思われる。Ⓒ＝ツルツルの面→台石などの上でモノをスッた痕と思われる。

これらⒶ、Ⓑ、Ⓒの痕跡のできるような使用は恐らくは片手で握った状態での使用であろう。石器の大きさも片手で握ってちょうどしっくりする程度である。このように見てくると、これらⒶ、Ⓑ、Ⓒの痕跡はいずれも調理に関した一連の使用の結果生じたもののように思えてくる。そして、その対象となるモノは恐らくは堅果類ではあるまいか。使用痕だけからの推論ではあるが、現在までの段階ではこのように考えておきたい。

3　弥生時代の土壙について

ＳＫ06、02、2基の弥生時代の土壙が発見されている。両者は約90ｍ離れており、その東側を

除く周囲からは他の弥生時代の遺構、遺物は検出されなかった。２基の土壙は、その規模、土器の出土状況に差異はあるものの、平面形が円形で、それぞれ完形あるいはほぼ完形の土器が１個ずつ出土するという点では共通している。つまり、ＳＫ06は直径1.5ｍの円形を呈し、その中央部の埋土中から完形の甕形土器が横倒しの潰れた状態で出土した。またＳＫ02は、径約0.75ｍの円形で、北端部から（台付）鉢形土器が横倒しの形で出土した。両土壙は壁・底面とも明確ではあるが、踏みかためられたような堅さではなく、埋土は人為的に埋められた状況を呈している。このような弥生時代の土壙は、これまで県内では発見された例がない。青森県では宇鉄Ⅱ遺跡（註８）、垂柳遺跡（註９）、瀬野遺跡（註10）などに類似する土壙が見られる。しかしながら、それらの遺跡で発見されている土壙は、楕円形が主体である。宇鉄Ⅱ遺跡ではその中から土器の他、管玉、勾玉、小玉、石器などが出土し、ベニガラの分布も認められ、土壙墓として把えられている。本遺跡の土壙はどのような性格の遺構と考えるべきなのであろうか。確かに現在までのところ、人骨、ベニガラ、管玉等の副葬遺物などの検出はなく、墓とする要件は満たされていない。しかしながら、遺構の在り方、土器の出土状況などからして、これらＳＫ06、02二基の土壙は墓壙である可能性が強いとしておきたい。なお、土壙の時期は、その出土土器からＳＫ06は、中期後葉の田舎館式期の後半、ＳＫ02は二枚橋式～宇鉄Ⅱ式期前後と思われる。

４　弥生式土器について

遺跡のほぼ全域にわたって、大湯軽石層下の第４層暗褐色土から弥生時代の遺物が出土している。これらの土器は概観するに、弥生時代中期から後期に亙っているが、その量、器種ともに少なく、断片的なものである。ここでは、それらの器形、文様などから、おおよその時期を求めてみたい。

61図21、23、24は鉢形、あるいは台付鉢形土器である。突起状のゆるい波状口縁、無文の頸部、胴部上半の結節沈線文などから、中期前葉の砂沢式～二枚橋式期に属するものと思われる。

61図26、ＳＫ02出土土器、60図５～10は鉢形土器あるいは甕形土器である。口縁部に施された縦位の刻目、結節沈線文、波状工字文などから中期中葉の二枚橋式～宇鉄Ⅱ式期に入るものと思われる。

61図27、28、ＳＫ06出土土器、60図２、３は甕形土器である。胴部上半の肩部が明瞭でなく、口頸部が外反する器形、刺突列と鋸歯文のモチーフなどから中期後半の田舎館２・３群式期に相当するものであろう。

61図29、60図13～19は甕形土器あるいは壺形土器である。文様帯の上・下を限る交互刺突文、くずれた形の工字文、それに円形文、三角連撃文（註11）などから、基本的には後期の天王山系統の土器群と思われ、大きな意味での小坂式に入るものであろう。

61図30～32、62図33～51は口頸部がそれほど外反しない甕形土器、あるいは内傾して太くや

や長い頸を持つ壺形土器と思われる。ごく浅く頼り気のない沈線文、細い撚糸文、帯縄文などの主文様は種々の要素が混じり合ったもののように見えるが、後期後半の小坂X式あるいは一本松式期の土器群と思われる。(註12)(註13)

62図52の壺形土器は、これまで小坂町周辺では知られていなかった土器である。口頸部、底部に比べて胴部最大径が非常に大きな器形を呈する。主文様は磨消縄文手法を用いた沈線による連弧文に近いもの、U字文、連続山形文（あるいは波状沈線文）などである。このような連弧文あるいは連続山形文の退化した文様、円形文あるいはU字文はこれまでのところ岩手県一本松遺跡などで見られるという。(註14)やはり後期終末期の土器であろう。

以上、今回の大岱I遺跡で出土した弥生式土器の時期を述べたわけであるが、これらは層位的な裏付けがあるものでなく、また共伴というものでもない。また、SK06出土土器などには恵山式後半の影響もあるやに思えるが、今回の調査では明確な北海道系の土器は出土しなかった。

以上、今回の大岱I遺跡の発掘調査結果についてまとめてみた。この中からは、縄文時代前期から弥生時代後期に至る人々が、調査区内に立ち入ったことはわかっても、その中で彼らがどのような意識のもとに生活したかという点については不明である。この後大岱I遺跡に隣接する大岱II、III、IV、円河原遺跡などが調査される予定である。それらの遺跡も当然のことながら彼らの生活圏の一部であったはずであり、その調査成果をも加味して、同時代の人達の暮しぶりを明らかにして行きたいと思う。

（註1）　安保彰『小坂のあけぼの　縄文期・弥生期』　1975年

（註2）　大岱IV遺跡の発掘調査は1982、83年の2ヶ年の継続で行われ、その調査報告書は1984年刊行の予定である。

（註3）　岩手県埋蔵文化財センター『都南村湯沢遺跡』　1978年

（註4）　目黒吉明「住居の炉」『縄文文化の研究8』　雄山閣　1982年

（註5）　例えば凹石に関しては　藤森英一「凹石は何に使えるか」『井戸尻』　1965年などの実験を通しての論攷がある。

（註6）　註5に同じ。

（註7）　上下両端にあるゴツゴツした面を、これが物を敲き潰す目的に使用した痕跡であるとすると、Ⓐの凹みの部分とかなり似た機能であると言える。Ⓐの凹みの部分が硬くて尖ったものをたたく場合、Ⓑの上下両端の面はⒶの対象物よりも石器のあたる面の大きい物を敲き潰す時に使用したと考え、この機能をⒷの中から独立させることもできると思われる。

（註8）　青森県立郷土館『宇鉄II遺跡発掘調査報告書』　1979年

（註９）　田舎館村教育委員会『垂柳遺跡』　1982年

（註10）　東北考古学会『瀬野遺跡』　1982年

（註11）　橘善光「弥生土器－東北・北東北３－」『考古学ジャーナル166』　1979年

（註12）　奥山潤・安保影「十和田湖西南部（小坂鉱山）の弥生文化とその後続形態（上・下）」『考古学雑誌　49巻２・３号』　1963年

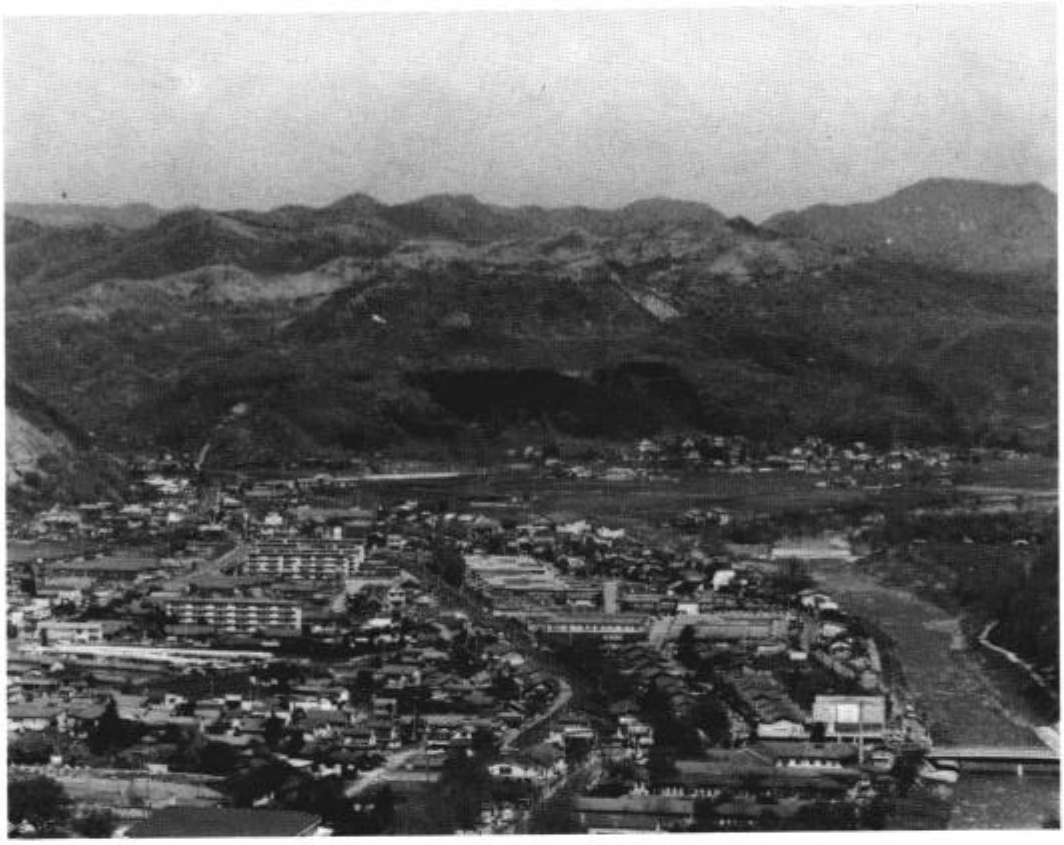
（註13）　武田良夫「岩手県における弥生土器について－盛岡地方を主として－」『考古風土記３』1978年

（註14）　橘善光「弥生時器－東北・北東北４－」『考古学ジャーナル168』　1979年

昭和57年度東北縦貫自動車道発掘調査・整理作業参加者

整理作業員　浅石悦子・池田邦子・工藤重子・安保良子・津島満子・高橋一子・上岡由美子・中川由美子・遠藤信子・庄司みつ子・浪岡サツエ・前田教子・橋本美枝・川口富美子・目時レコ・大西英子・大野甲子・渡辺節子・高柳良子・藤倉寿枝・小松睦子・草彌弘子・熊谷恵子・後藤のり子・菅原恵子・高橋チエ子・武田美智子・竹村純子・進藤始子・茂木マイ子・長澤廣子・室谷孝子・古屋学・高階恵子・大河洋子・後藤正子・高柳三枝子・池田マサ子・長渕厚子・小松郁子・斉藤恭子・戸澤典子・田中まき子・森元てる子・高橋カヅ子・原輝子・佐々木フクエ

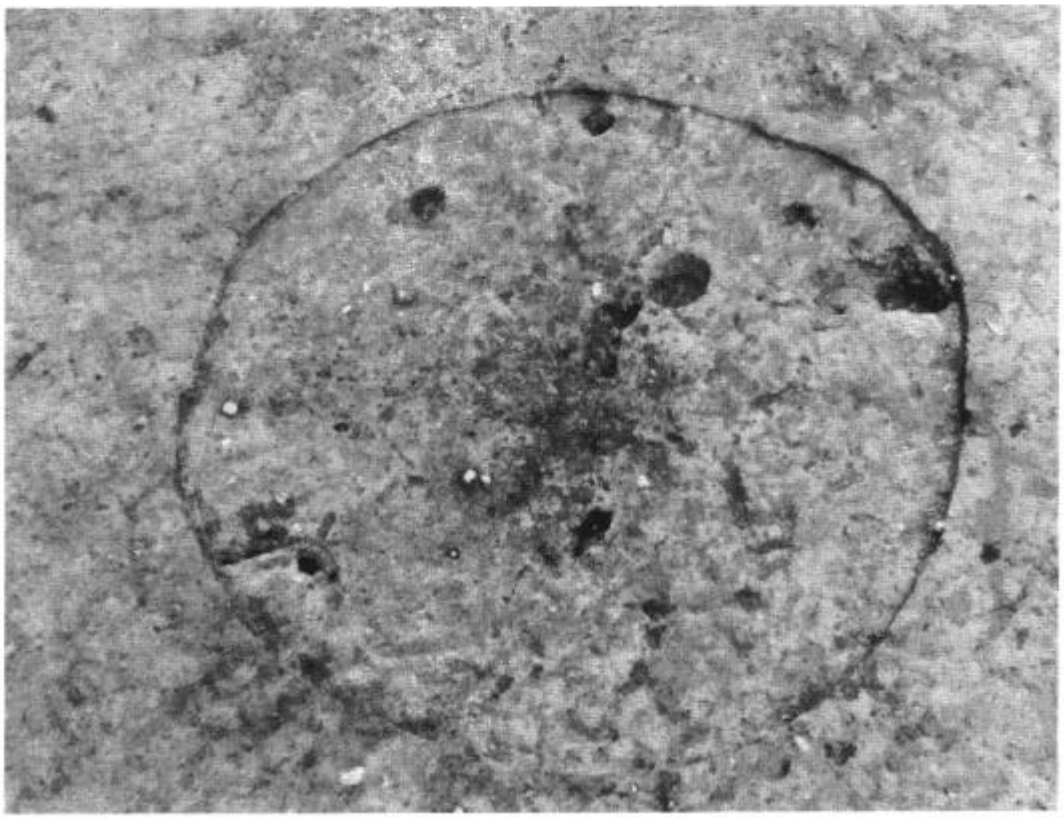
発掘作業員　中村忠男・中村芳徳・池田兼松・川口正・成田勝次郎・古川喜市・池田耕順・山本重治・銭盛秀志・目時源司・本田政康・剽幸雄・高橋忠男・小畑金次郎・佐藤良蔵・伊藤清次郎・高橋昭孝・中村明美・高橋英志・菅原正雄・村田文栄・村松一男・杉原総・小川好美・和田馨・木村啓治・上野秀治・熊谷芳蔵・熊谷泰一・工藤政七・似島善七・黒沢由吉・木村一郎・荒川護・亀田喜蔵・亀田正二・中村吉介・宮館隆蔵・沢田久美男・柳館陸次郎・島野省一郎・工藤与一・工藤幸徳・金沢與市・多田豊治・本田美彦・高橋實・田中誠一・浜谷秀光・片平良直・田村朋嗣・近藤誠・長谷川安正・久米井正秀・千田勝行・田口俊明・三沢範人・小堀誠・中村キサ・秋本タマ・大森サエ・川口昭子・杉原ハギ・古沢イチエ・中村ヨリ・杉原ヨシノ・杉原ヨシ・池田しずえ・杉原トシ・中村京子中村薫・中村キエ・杉原ハナ・池田栄美子・和田トミ・杉原良子・中村三枝子・中村年子・池田サエ子・杉原チワ・中村カズ・中村ノブ・本田栄子・本田ハマ・本田タミ・本田カズ子・本田京子・中村ヤエ・本田喜代子・中沼リツ子・小笠原令子・沢田ヨリ子・本田泰子・本田ケイ子・山崎ミヨ・沢田幸子・伊藤江美・中村かず・松山芳子・佐藤セツ子・多田テツ・多田キヨ・木村すみ子・杉沢ミキ・成田みどり・和田ミエ・和田セツ中山敬子・鈴木美枝・小堀ミサオ・渡辺ナミ・目時タエ・成田マチエ・小西有子・国塚孝子・船水フヂエ・斉藤キワ・川村アイ子・前川克子・田口ノリ・佐藤マサヨ・庄野伸子・清水生子・岩谷成子・伊達みや子・目時イサ・安保キヤ・目時トキ・目時恵子・上野淑子・木村昭子・柏谷アエ子・伊藤スガ・三浦ヌイ・小野寺峰子・畑沢ツギ・近江セイ子・高橋キミ子・中村マリ子・熊谷誠子・熊谷サツ・小林サツ・熊谷静子・熊谷ミヨ熊谷キクエ・小林幸子・熊谷スサ・小林キミ・熊谷ケエ子・亀田キン・船水律子・本田和子・吉田しずゑ・小笠原ヨシエ・中村さよ・沢口チエ・畠山宮子・斉藤恵子・小笠原サヨ・工藤ルイ子・対馬洋子・宮館ヨシノ・成田ユキ・和田勝子・和田セツ子・成田キヨ・奈良チワ・工藤ナナ子・阿部たみ・中野睦子・中村ミヤ・佐藤ハナ・田村スミ・柳田トミ・千田キミ・吉岡カツ・武田キエ・目時ウメ・越後ツマ子・田村キエ・高橋カヅ子・三浦テル・長内ツナ・佐藤桂子・伊藤ウメ・沢口ミナ・千葉敦子・横田ユキ・工藤久子・佐々木茂子・成田ワカ・酒井富子・橋本静江・望月キヨ子・松谷公弥子・中嶋タカ子



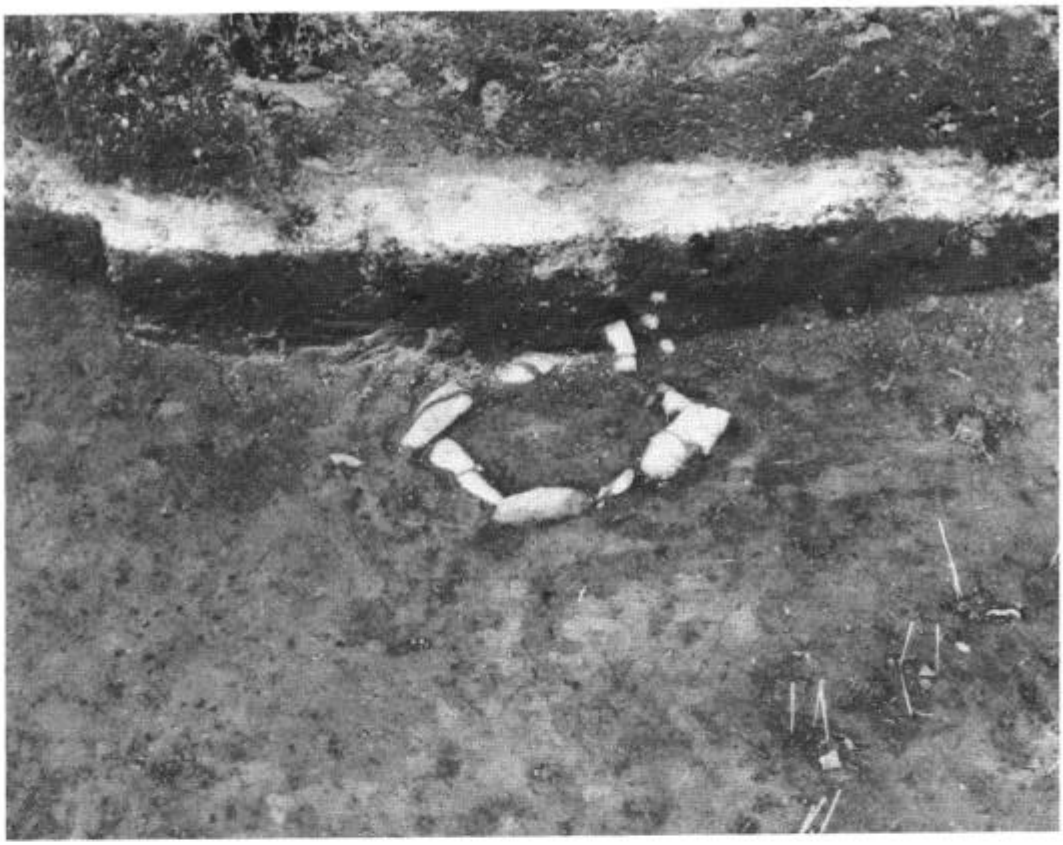
図版1　上　遺跡遠景（南東▶）　下　遺跡全景（南▶）

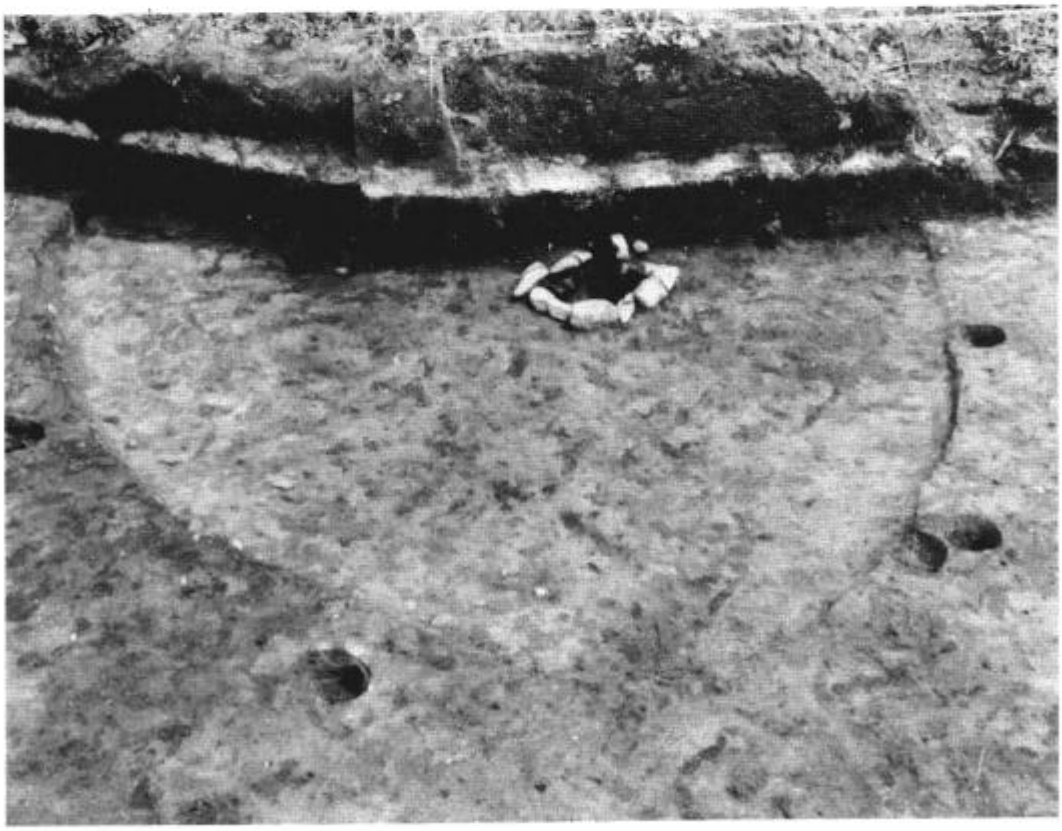
図版２　上　遺跡全景（南▶）　下　調査終了後（南▶）

図版3　上　調査終了後（北西▶）　下　土層断面



図版4　上　土器出土状況　下　S I 31　竪穴住居跡（北▶）



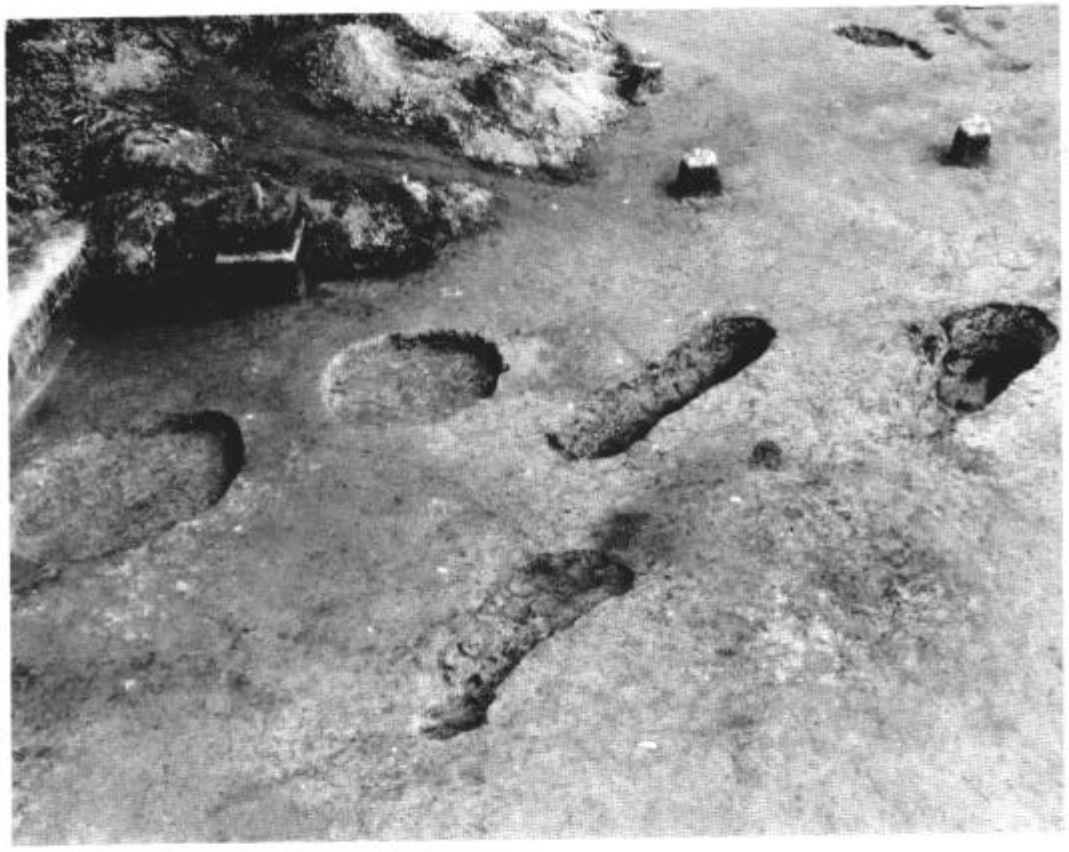


図版5　上　ＳＩ03　竪穴住居跡石囲炉発見状況（西▶）

　　下　ＳＩ03　竪穴住居跡（西▶）

図版6　上　S I 01　竪穴住居跡発見状況（東▶）

　　下　S I 01　竪穴住居跡石囲炉（北▶）

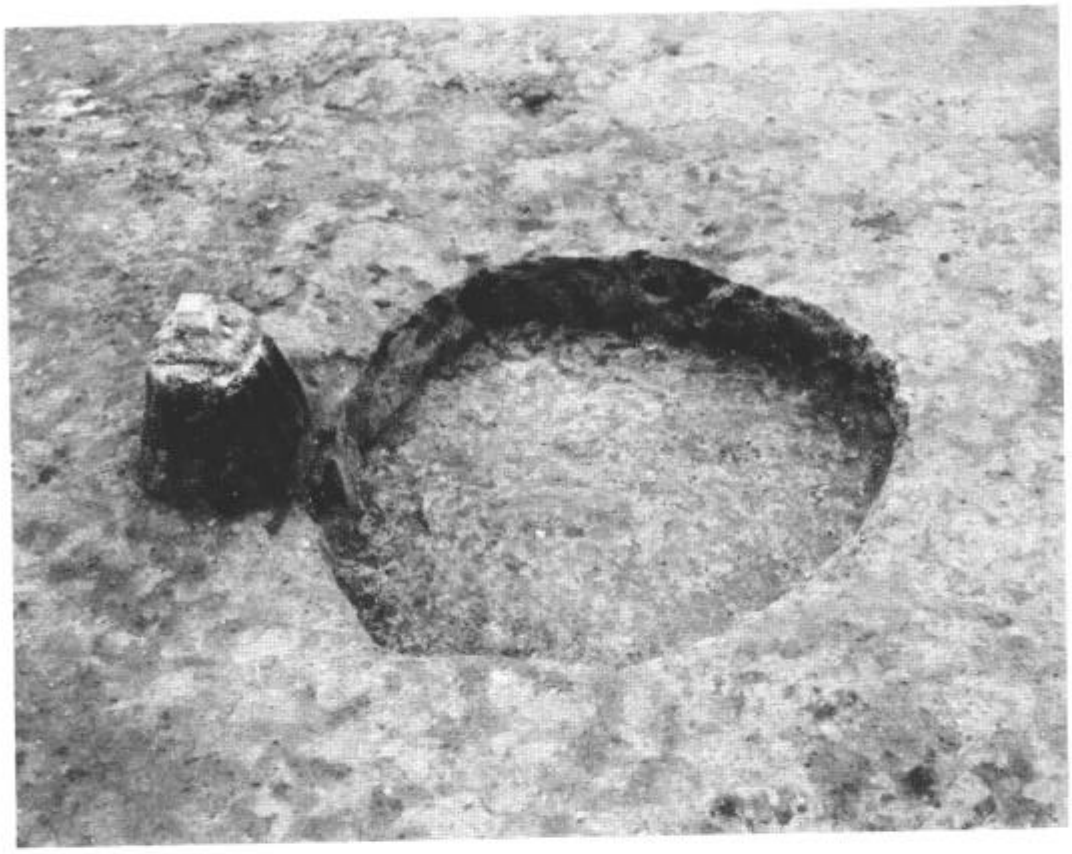


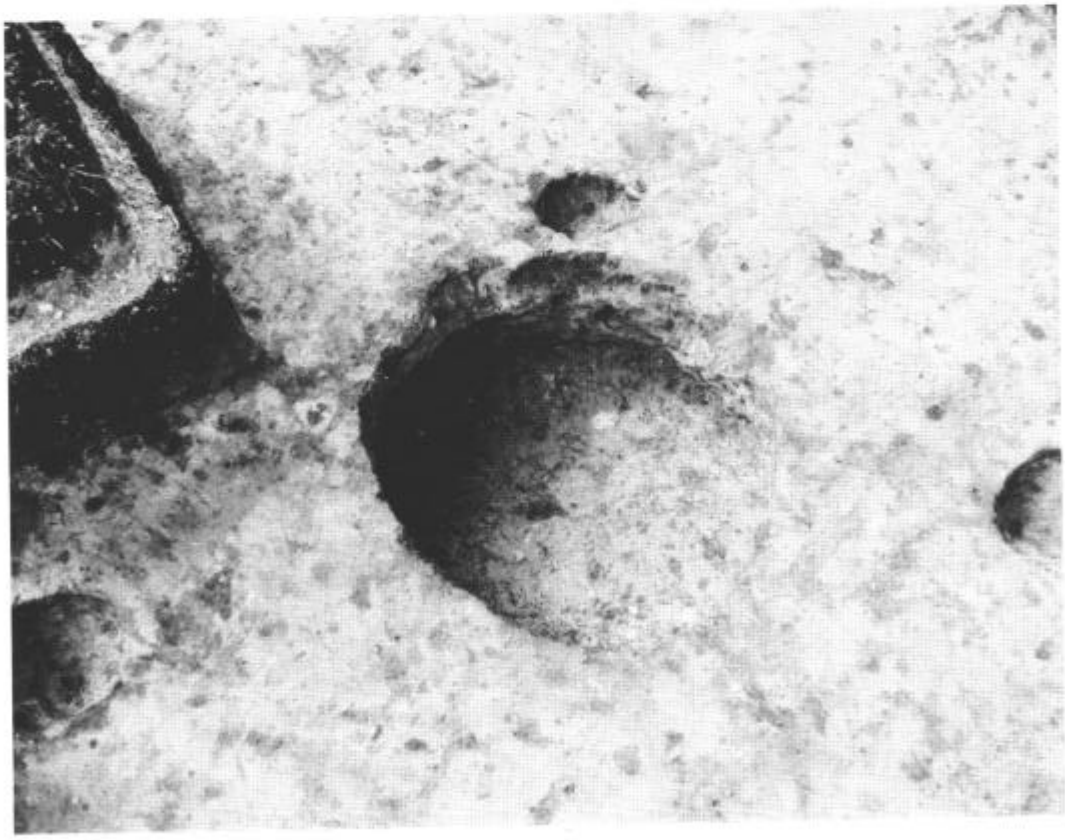
図版７　上　調査区南端部遺構群（南▶）

下　ＳＫ 04　大型円形土壙（北▶）

図版８　上　ＳＫ 05　土壙確認時の状況（南▶）

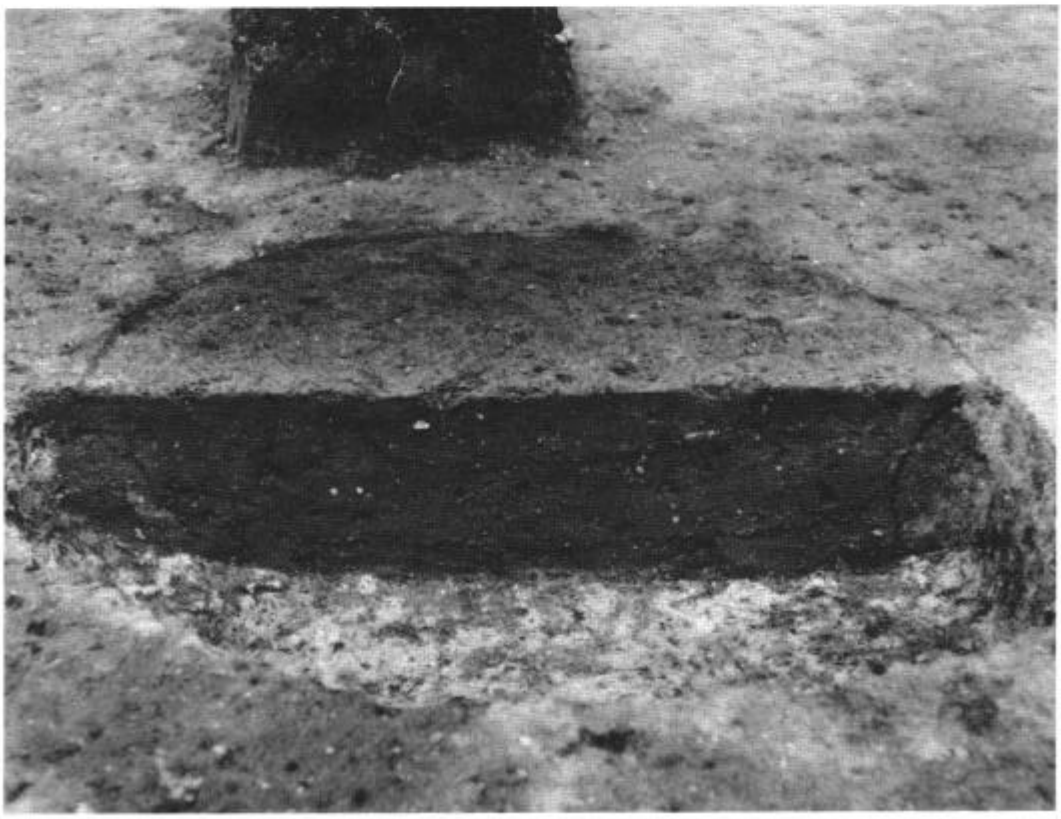
　　下　ＳＫ 05　大型円形土壙（南▶）





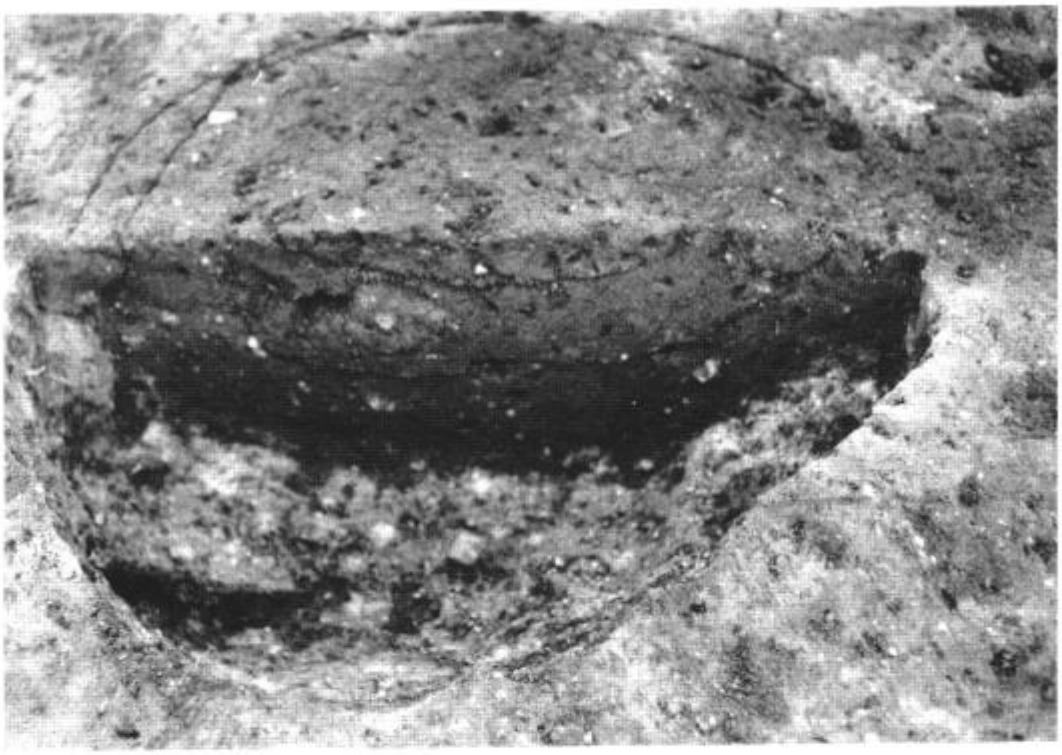
図版9　上　ＳＫ 07　大型円形土壙（東▶）

　　下　ＳＫ 10　袋状土壙（南▶）



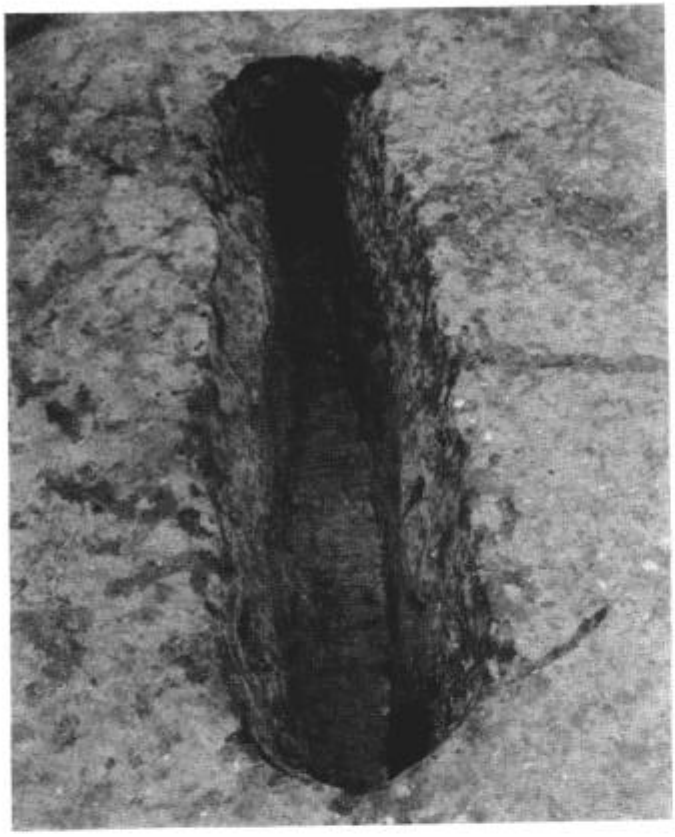
図版10　上　ＳＫ 18　円形土壙（南▶）

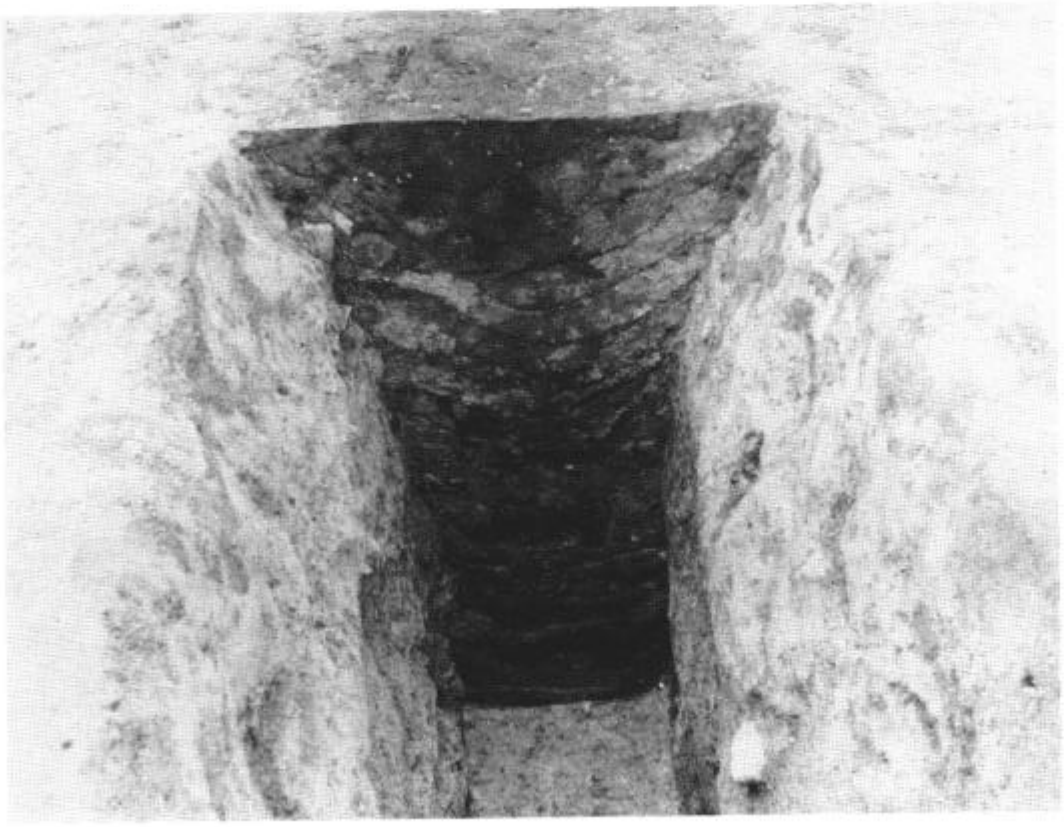
　　下　ＳＫ 21　円形土壙（南▶）



図版11　上　ＳＫ 29　円形土壙（西▶）

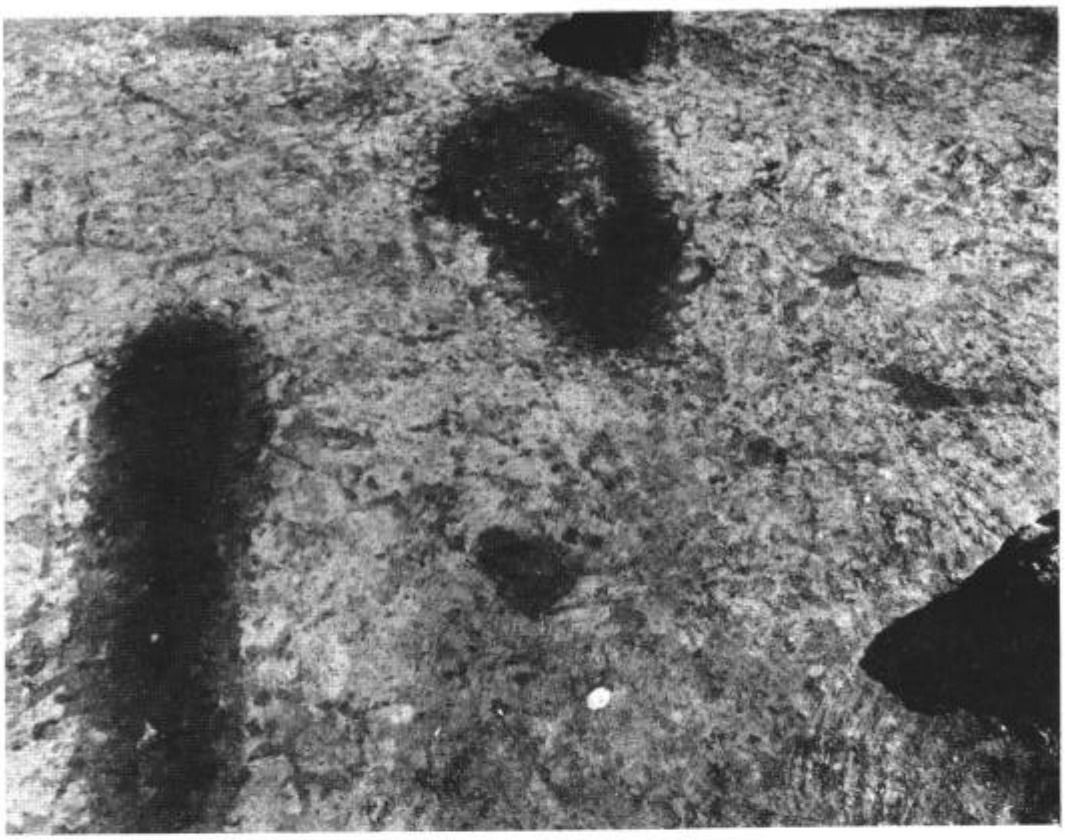
　　下　ＳＫＴ 12　Ｔピット確認状況（南西▶）

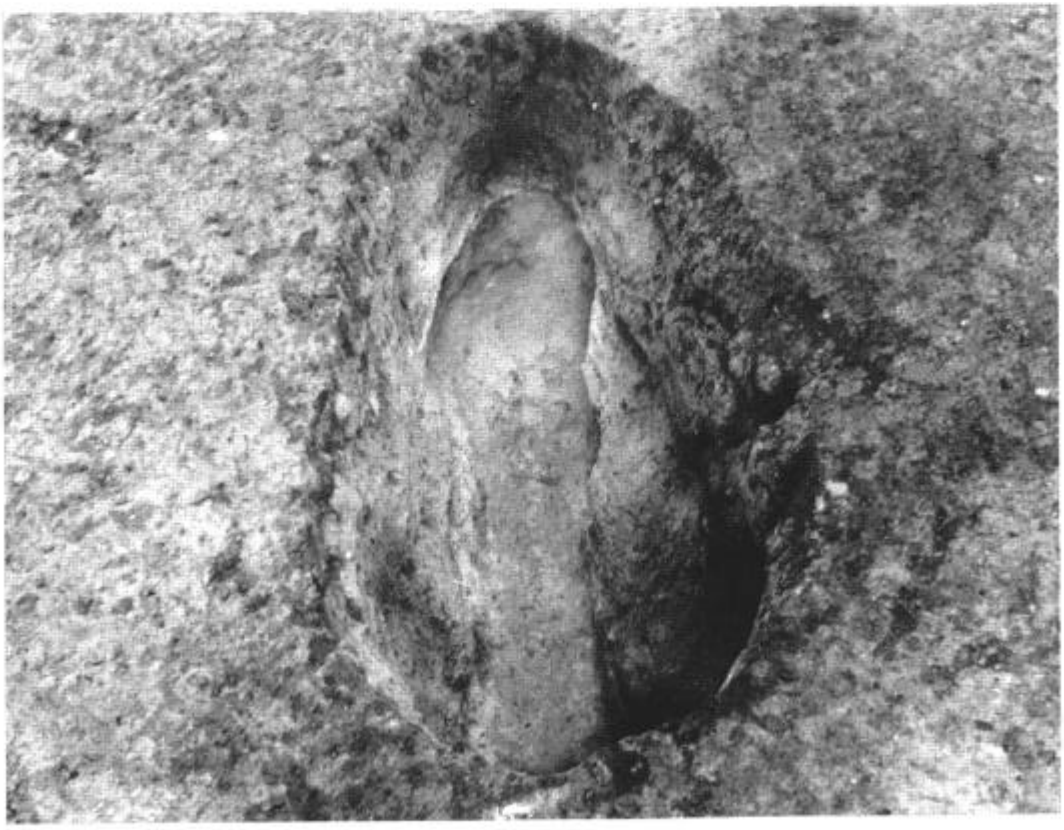




図版12　上　ＳＫＴ 12　Ｔピット（北東▶）

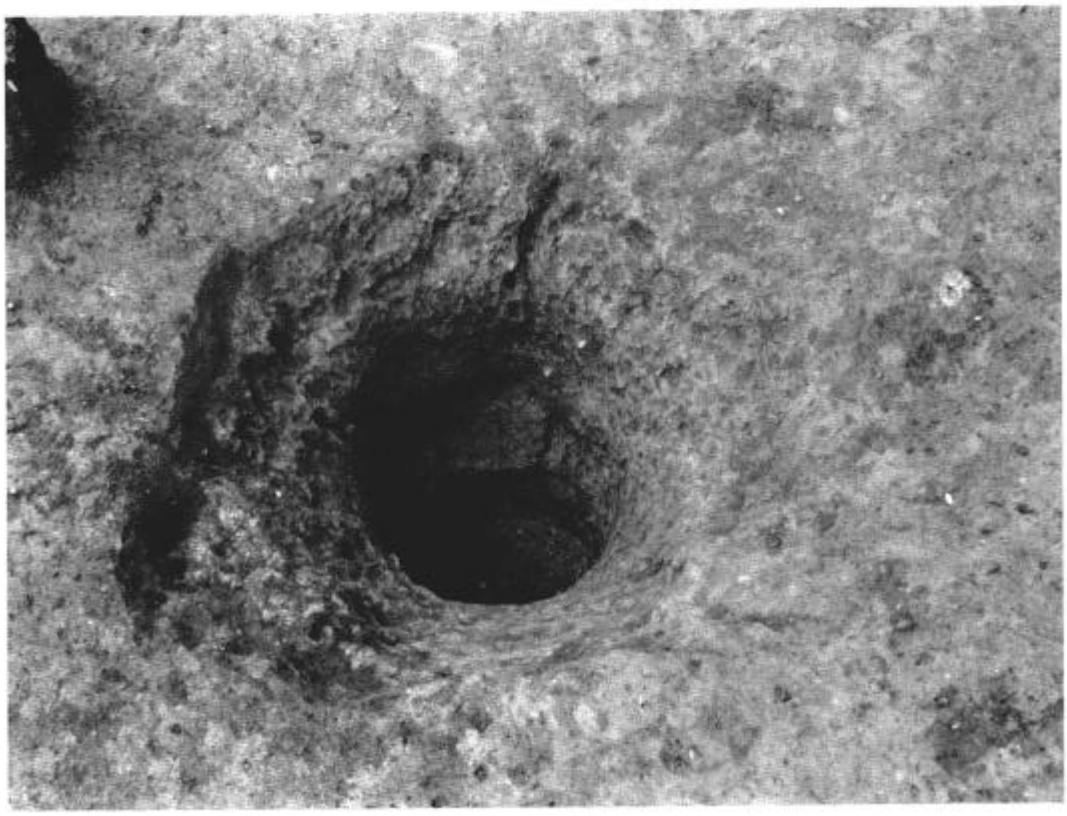
下　同上　埋土の状況（北東▶）





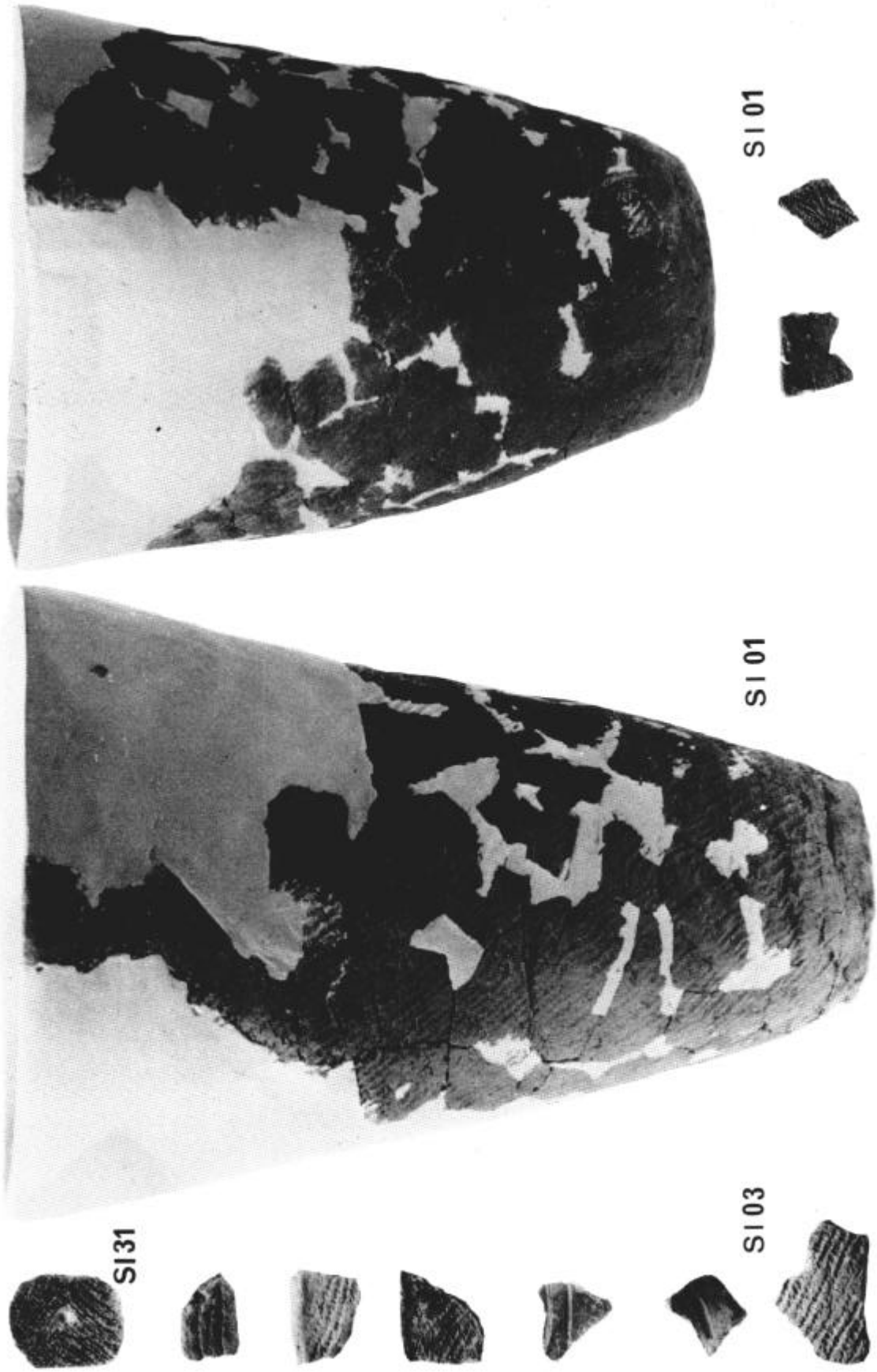
図版13　上　ＳＫＴ 12・13　Ｔピット確認状況（南西▶）

　　下　ＳＫＴ 13　Ｔピット（北▶）

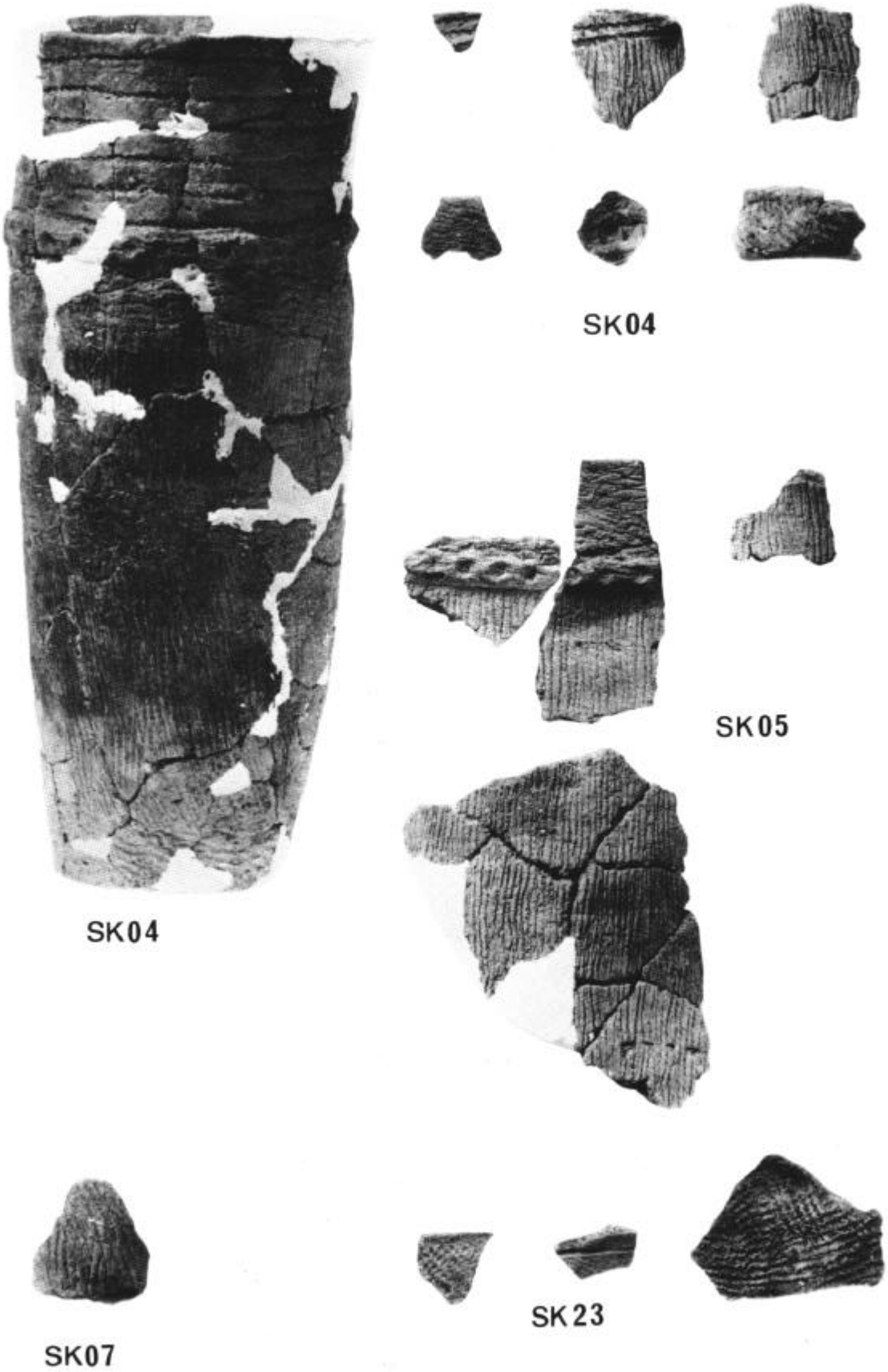


図版14　上　ＳＫ 09　井戸状遺構（北▶）

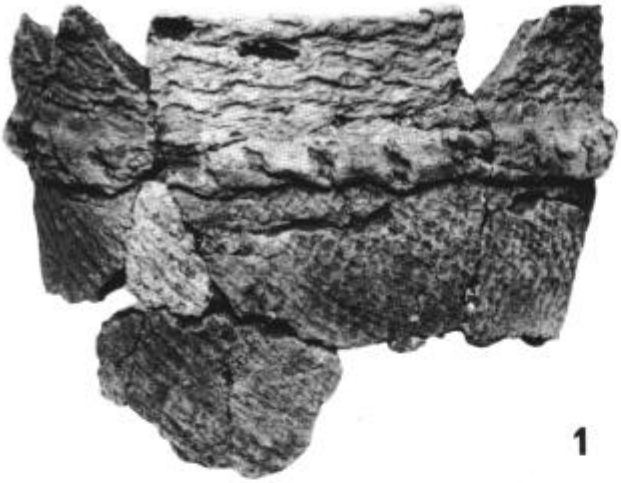
下　ＳＫ 14　井戸状遺構（東▶）



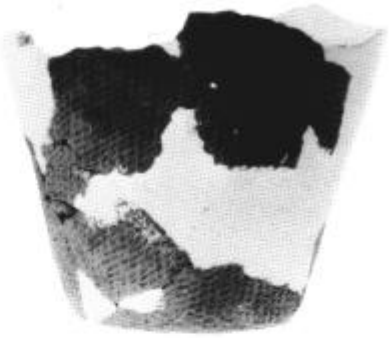
図版15　ＳＩ 31・03・01　竪穴住居跡出土遺物



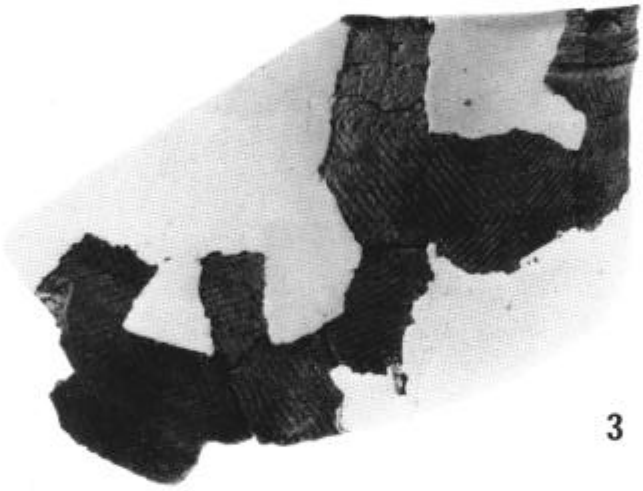
図版16　ＳＫ 04・05・07・23　土壙出土遺物



1



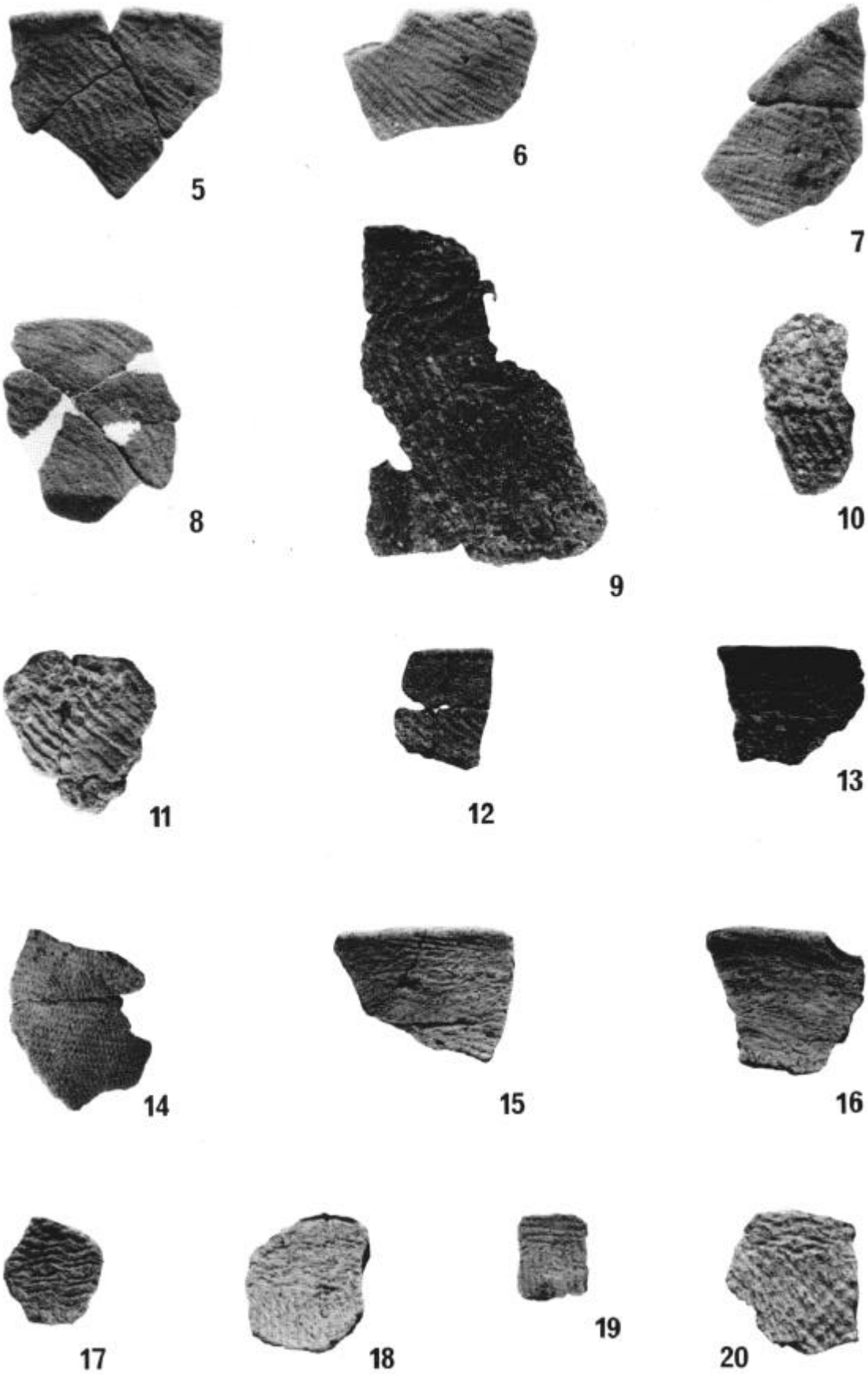
2



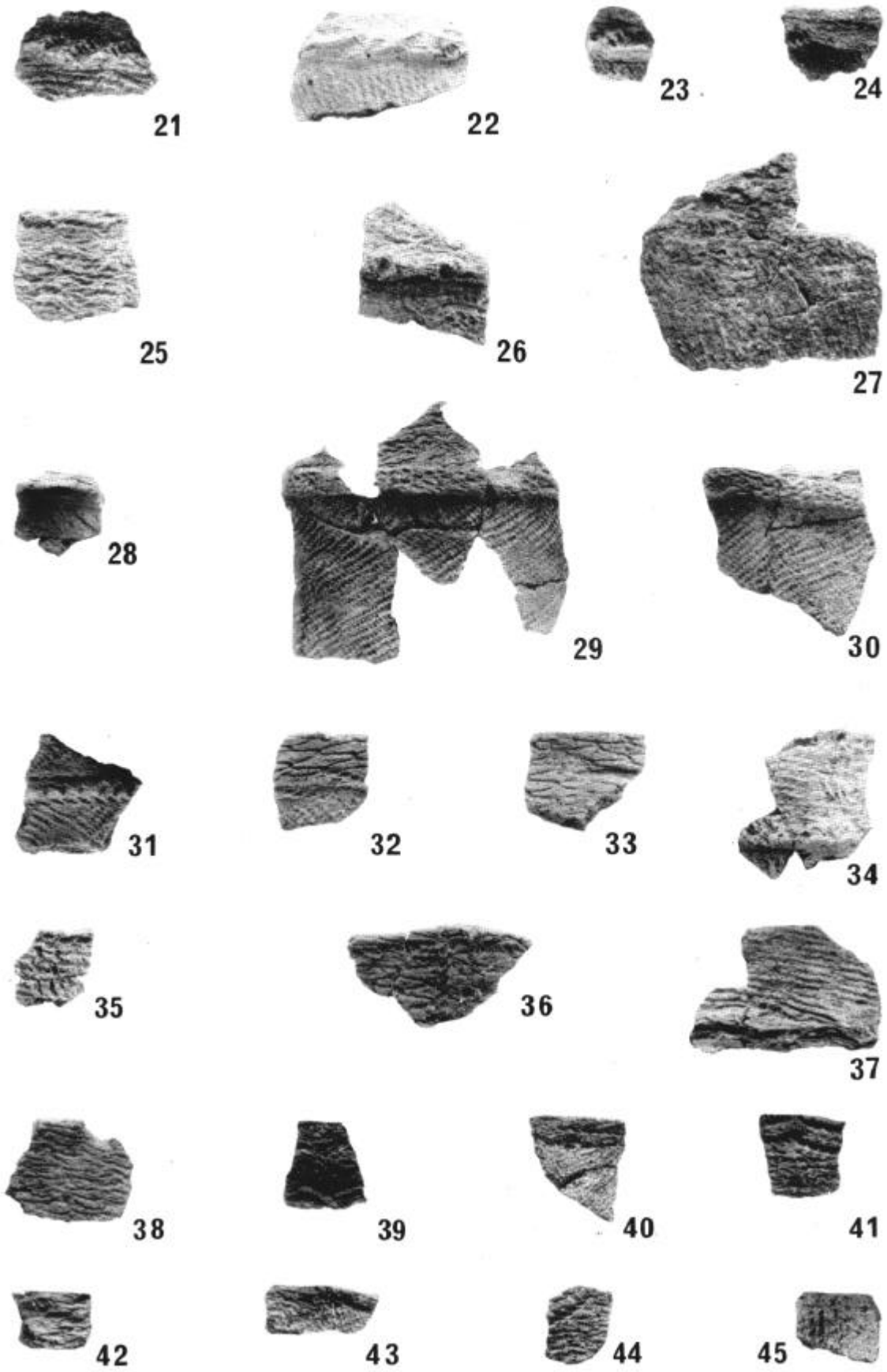
3

4

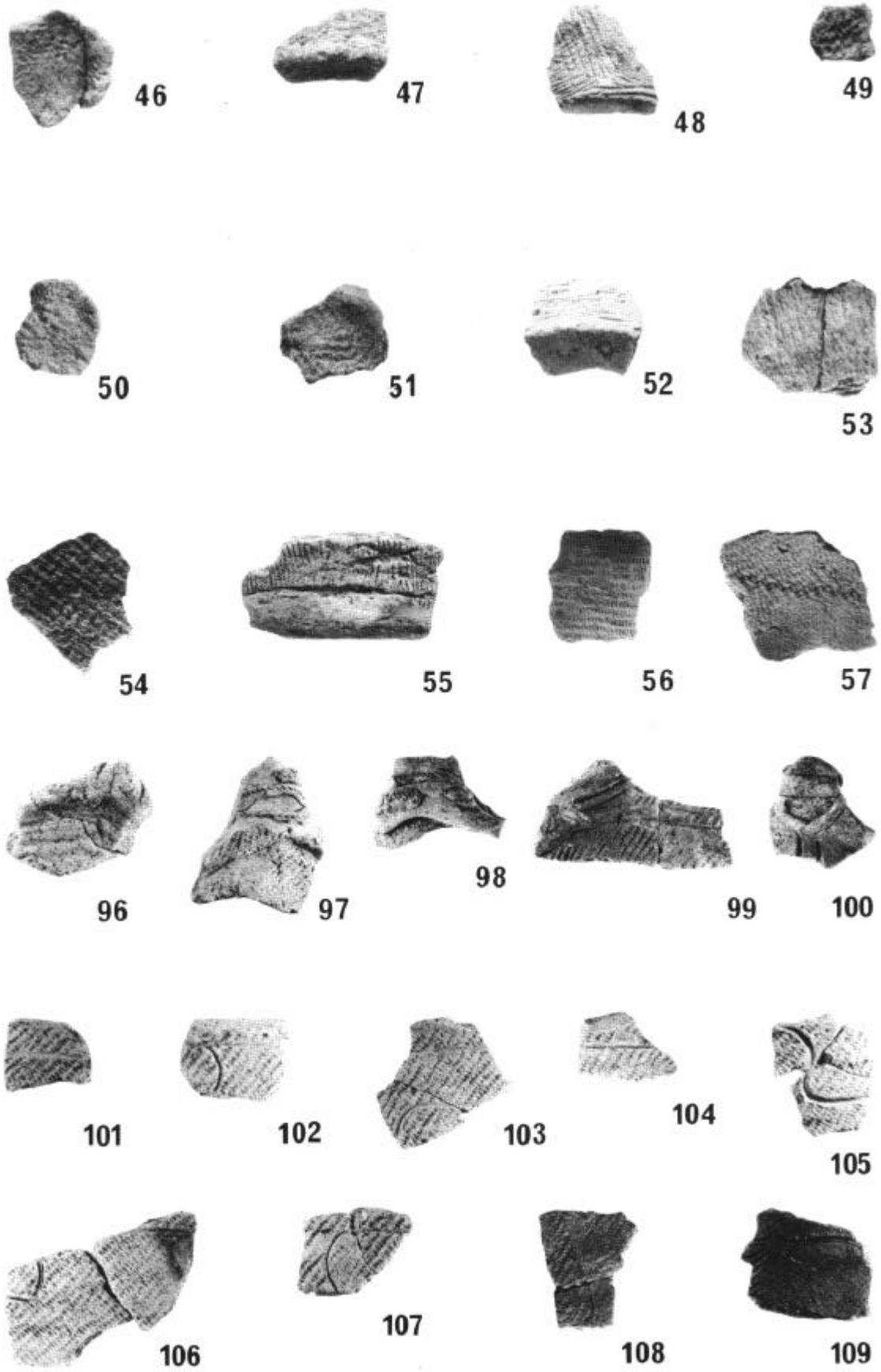
図版17　縄文時代前期の土器



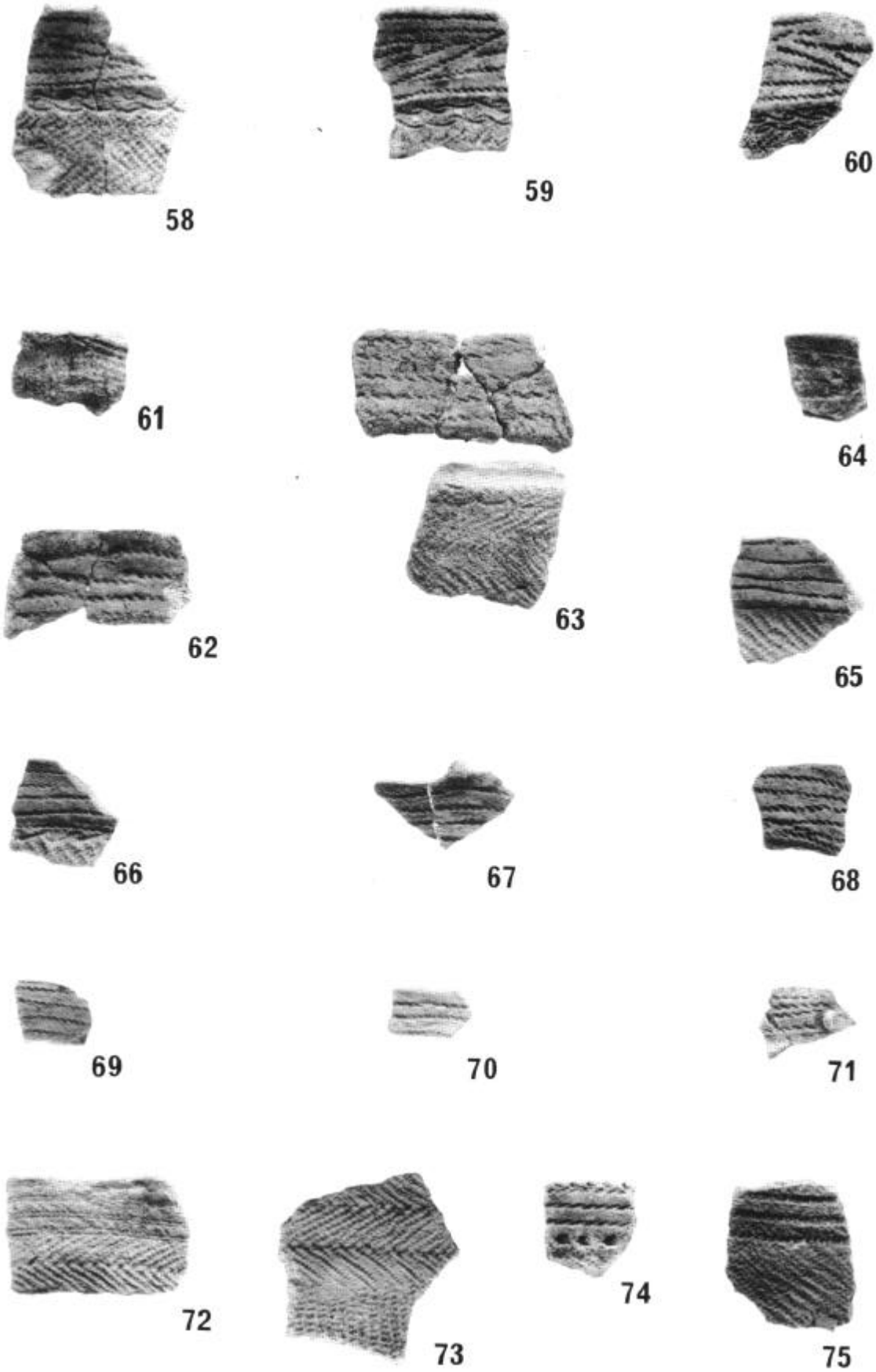
図版18　縄文時代Ⅰ群1・2類土器



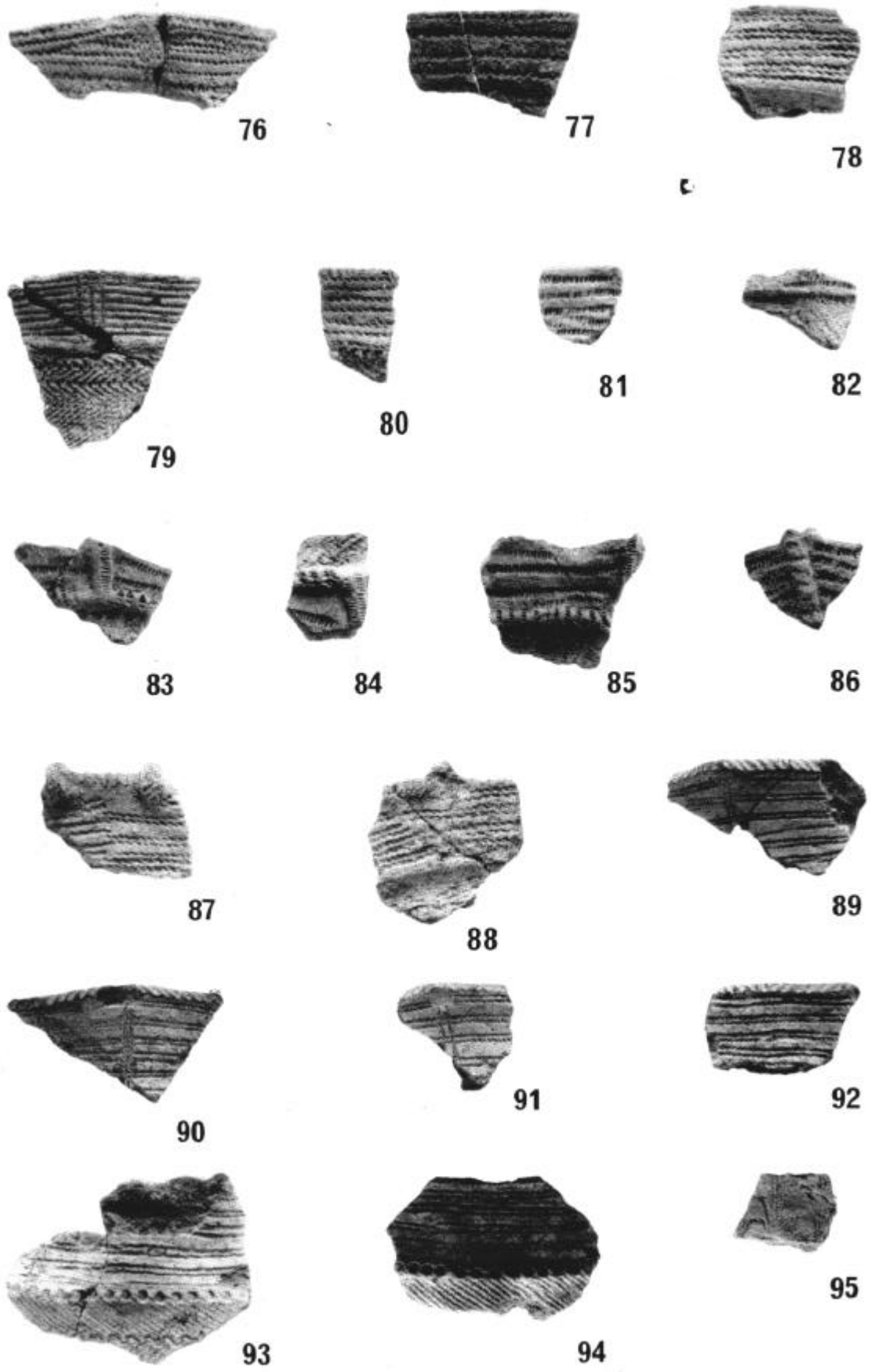
図版19　縄文時代Ⅰ群３・４類土器



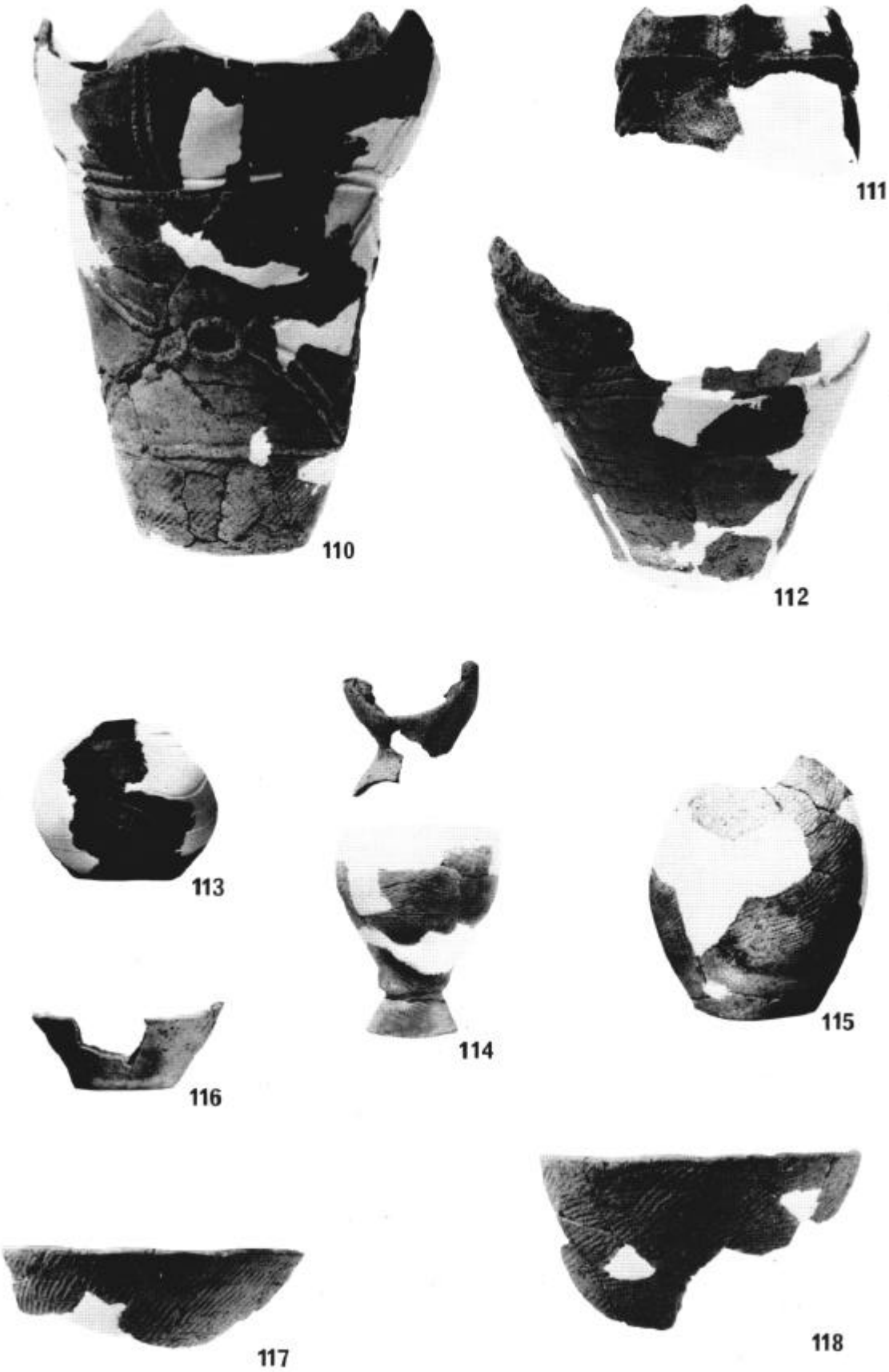
図版20　縄文時代Ⅰ群５類・Ⅱ群１・２類土器



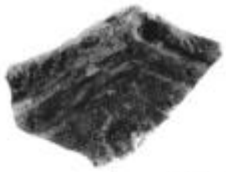
図版21　縄文時代Ⅰ群６・７類土器



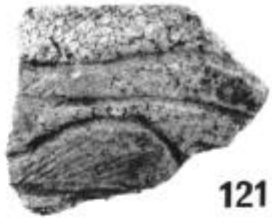
図版22　縄文時代Ⅰ群8・9類土器



図版23　縄文時代中期末～後期の土器(1)


119

120


121

122

123

124

125

126

127

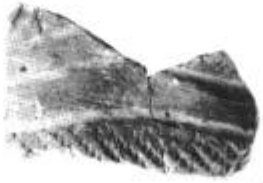
128

129

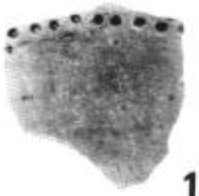
130

131

132


133

134


135

136

図版24　縄文時代Ⅳ群２類土器

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

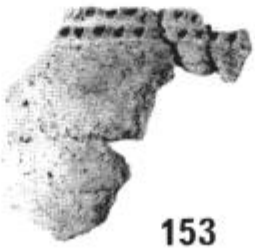
148

149

150

151

152


153

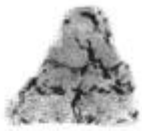
154

図版25　縄文時代Ⅲ群２・３・４類土器

155

156

157


158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

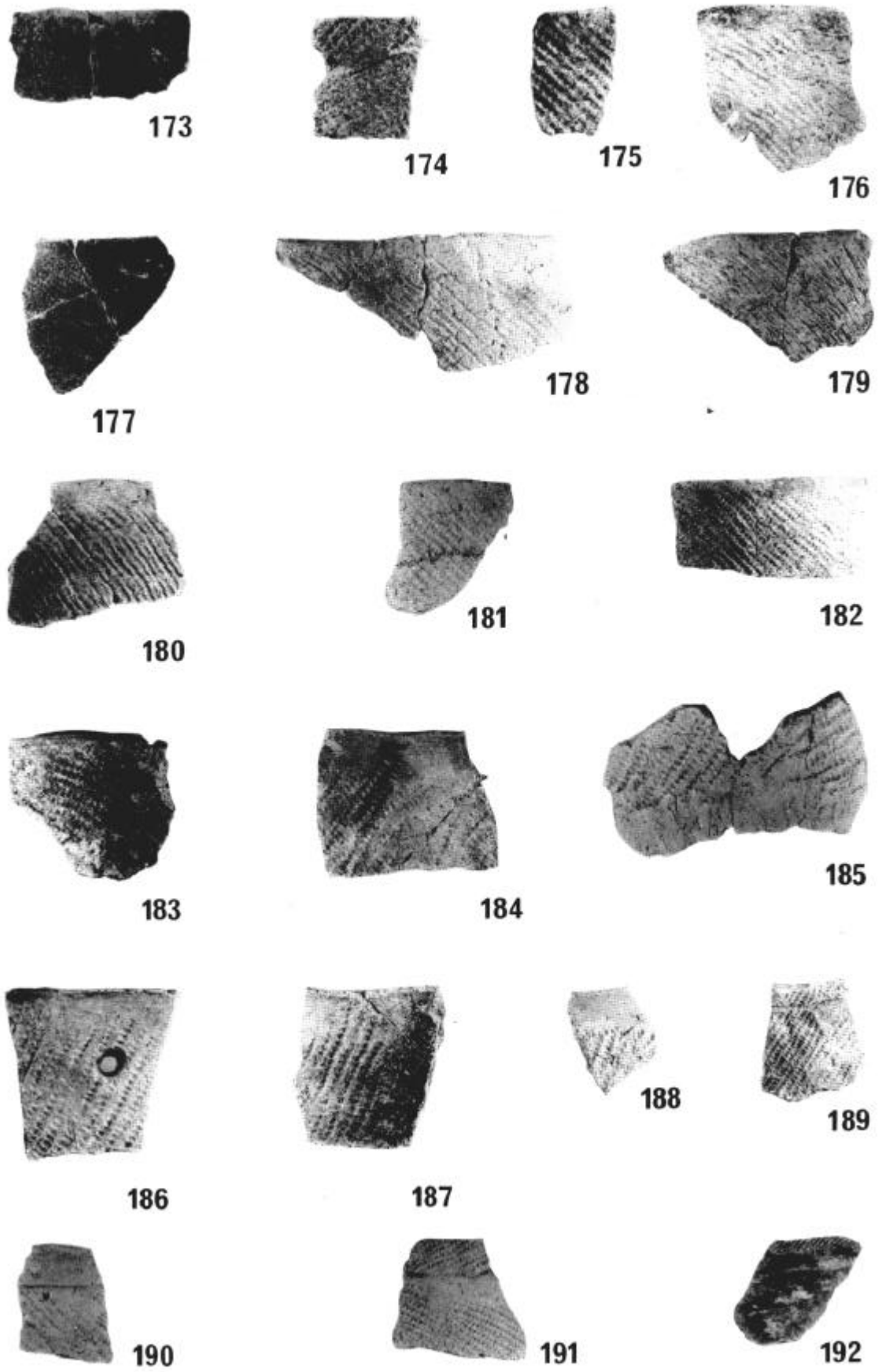
169

170

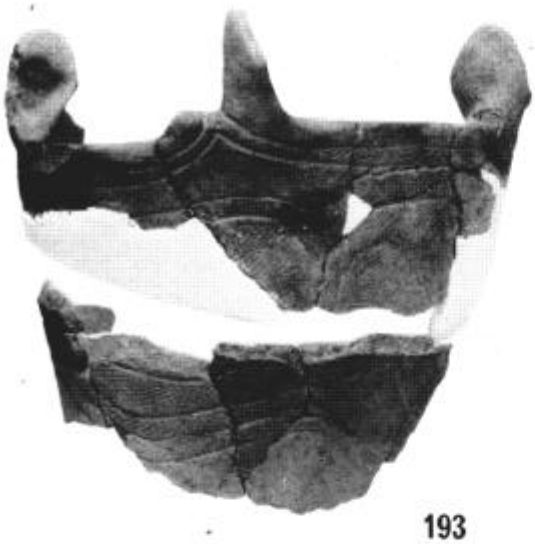
171

172

図版26　縄文時代Ⅳ群５類土器

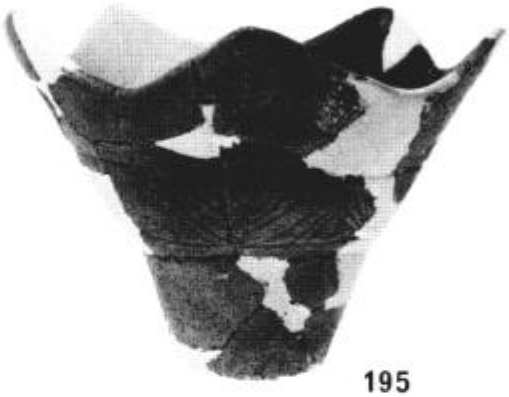


図版27　縄文時代Ⅲ群６類土器



193

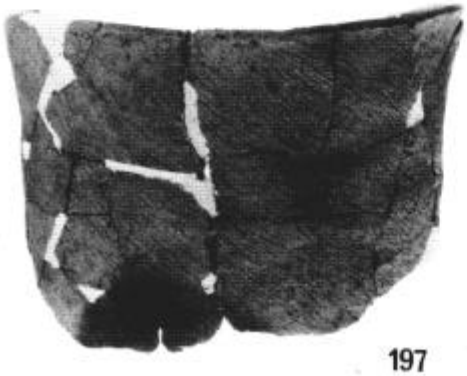
194



195

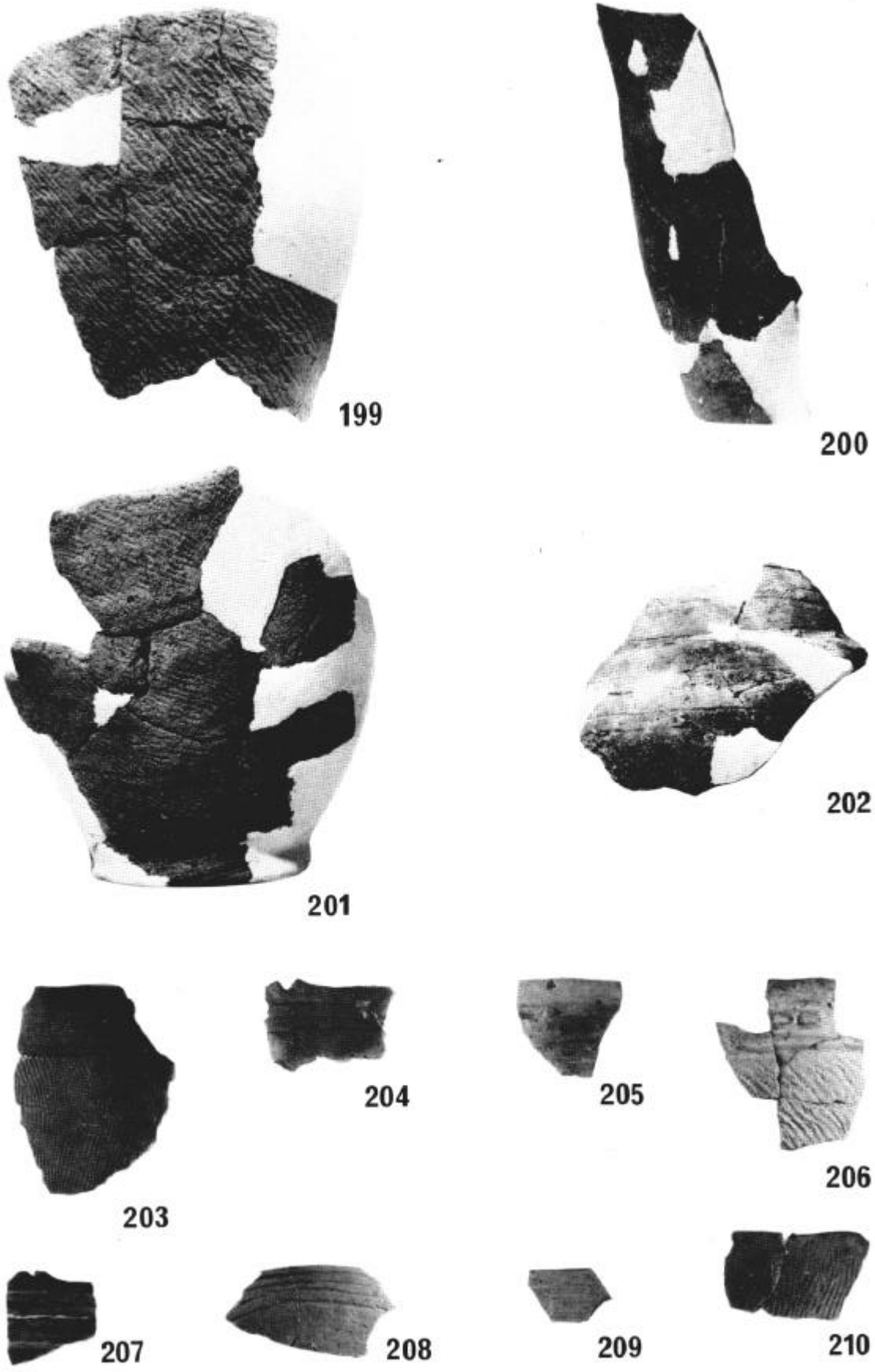
196

198



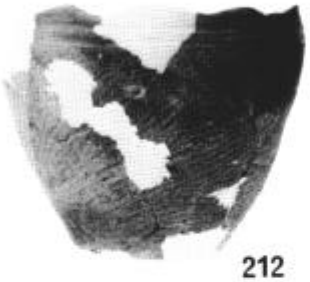
197

図版28　縄文時代後期の土器(2)

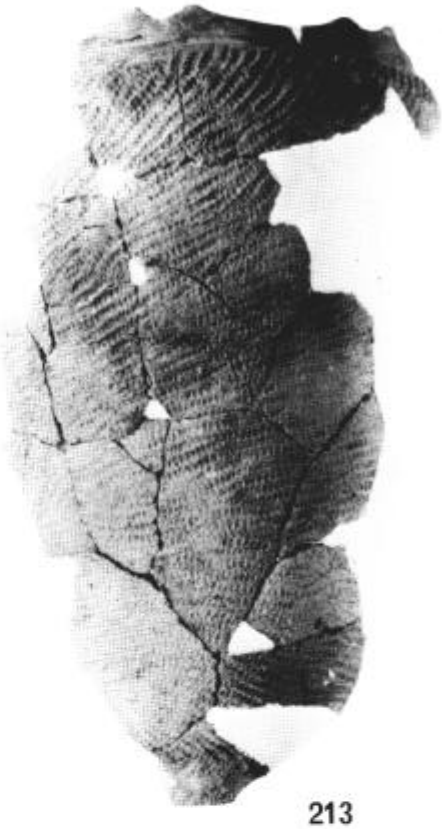


図版29　縄文時代後期の土器(3)・Ⅳ群土器

211



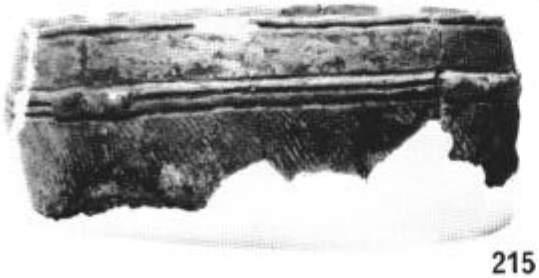
212



213

214

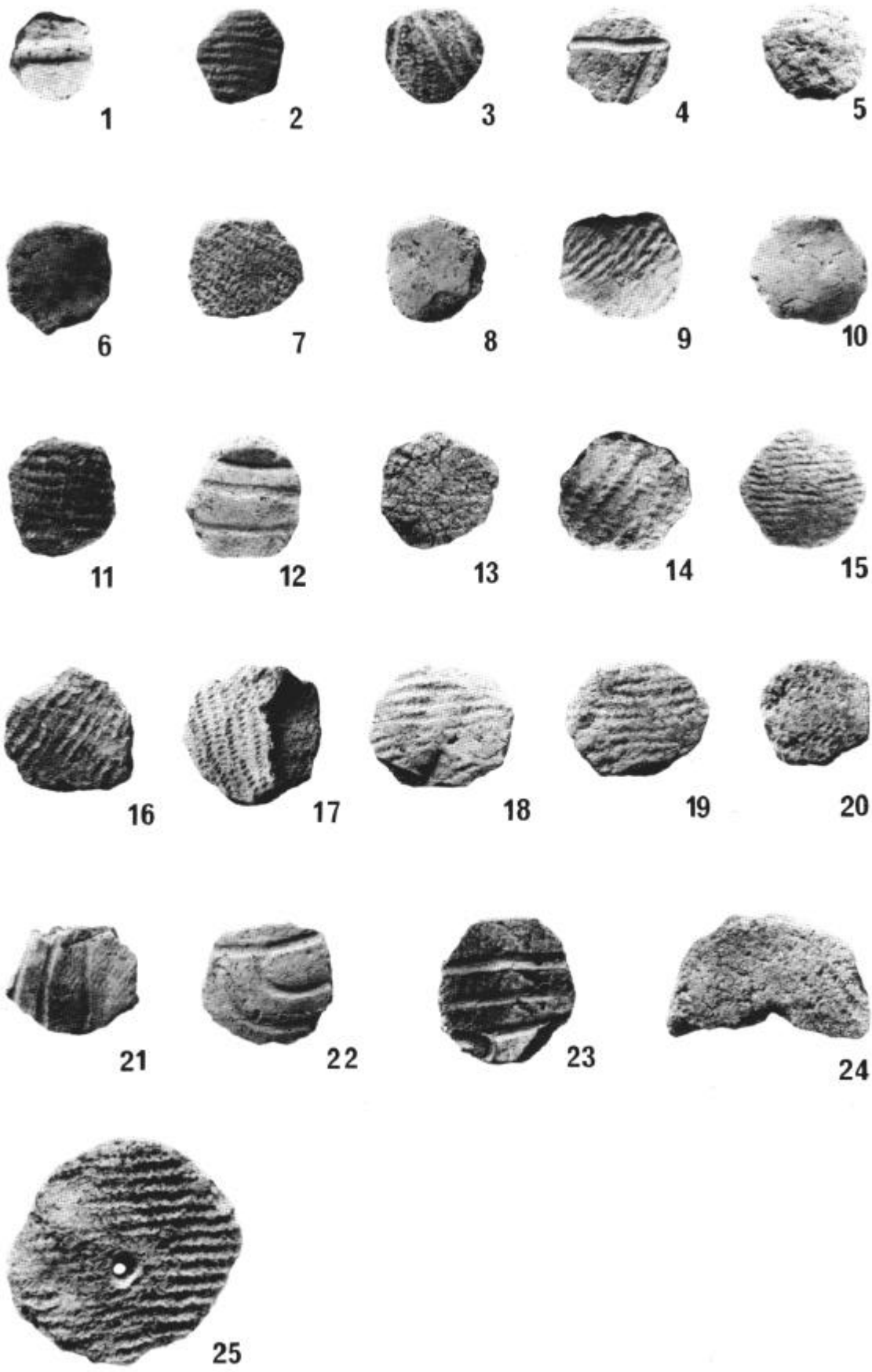
216



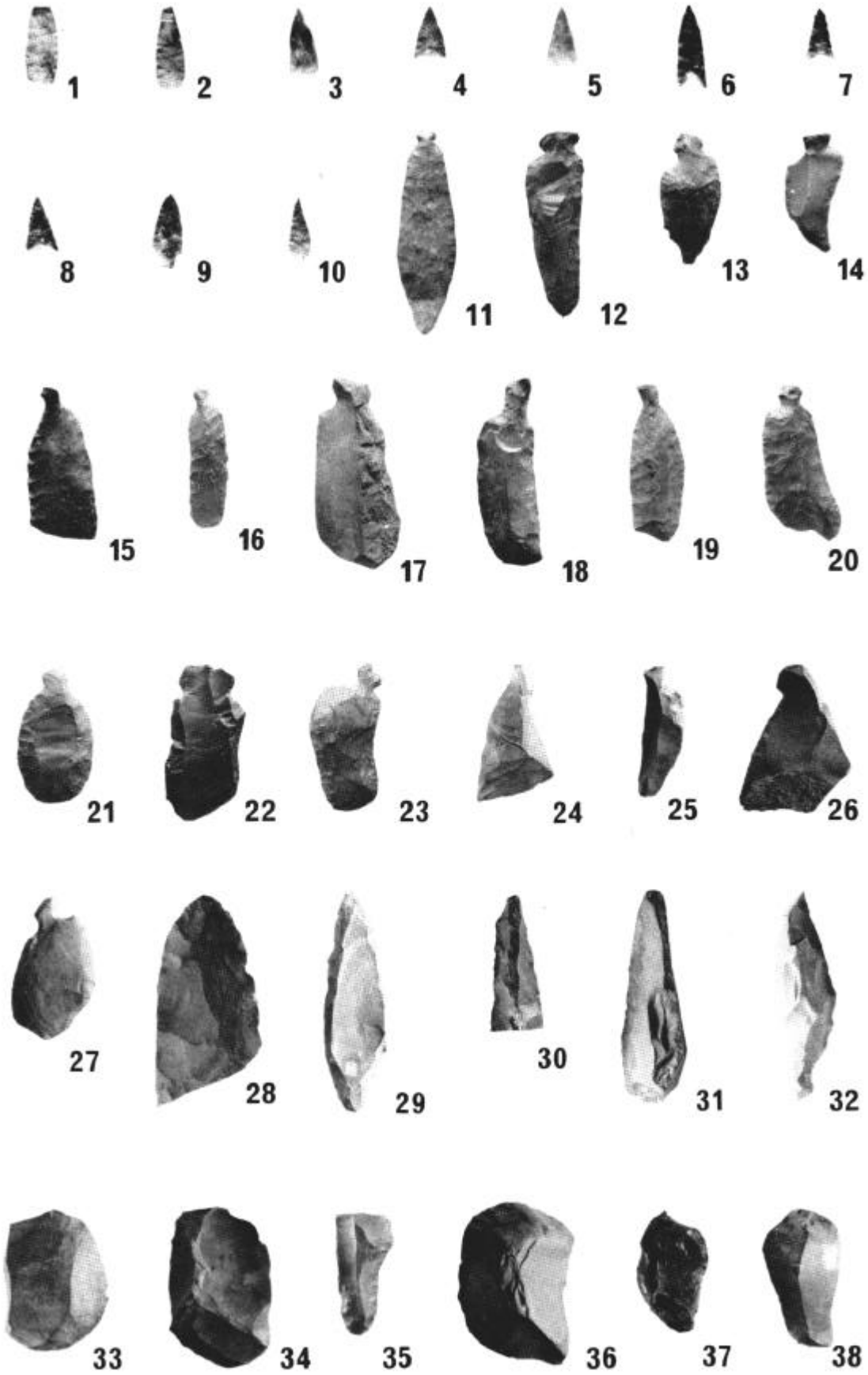
215

217

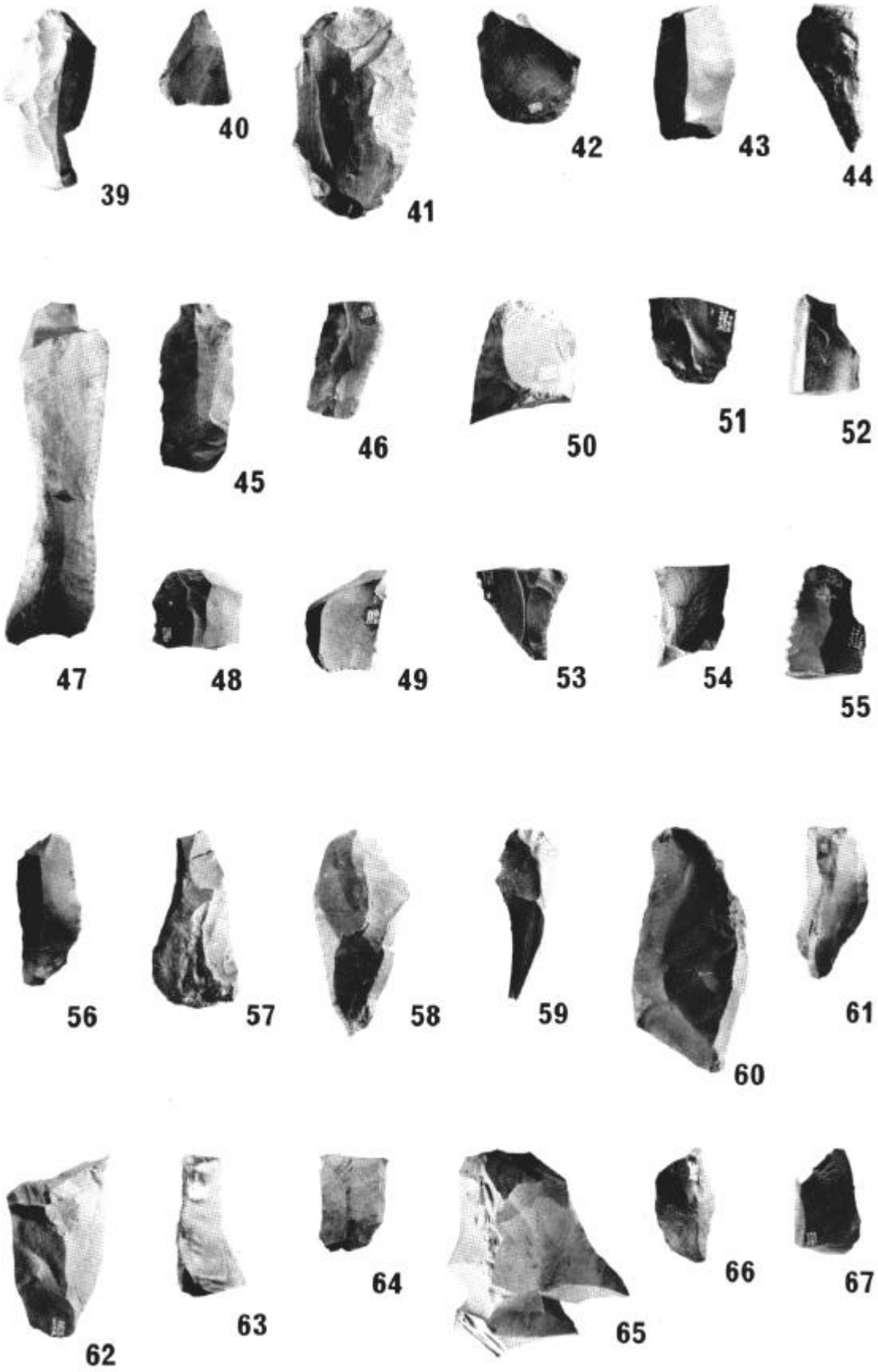
図版30　縄文時代晩期の土器



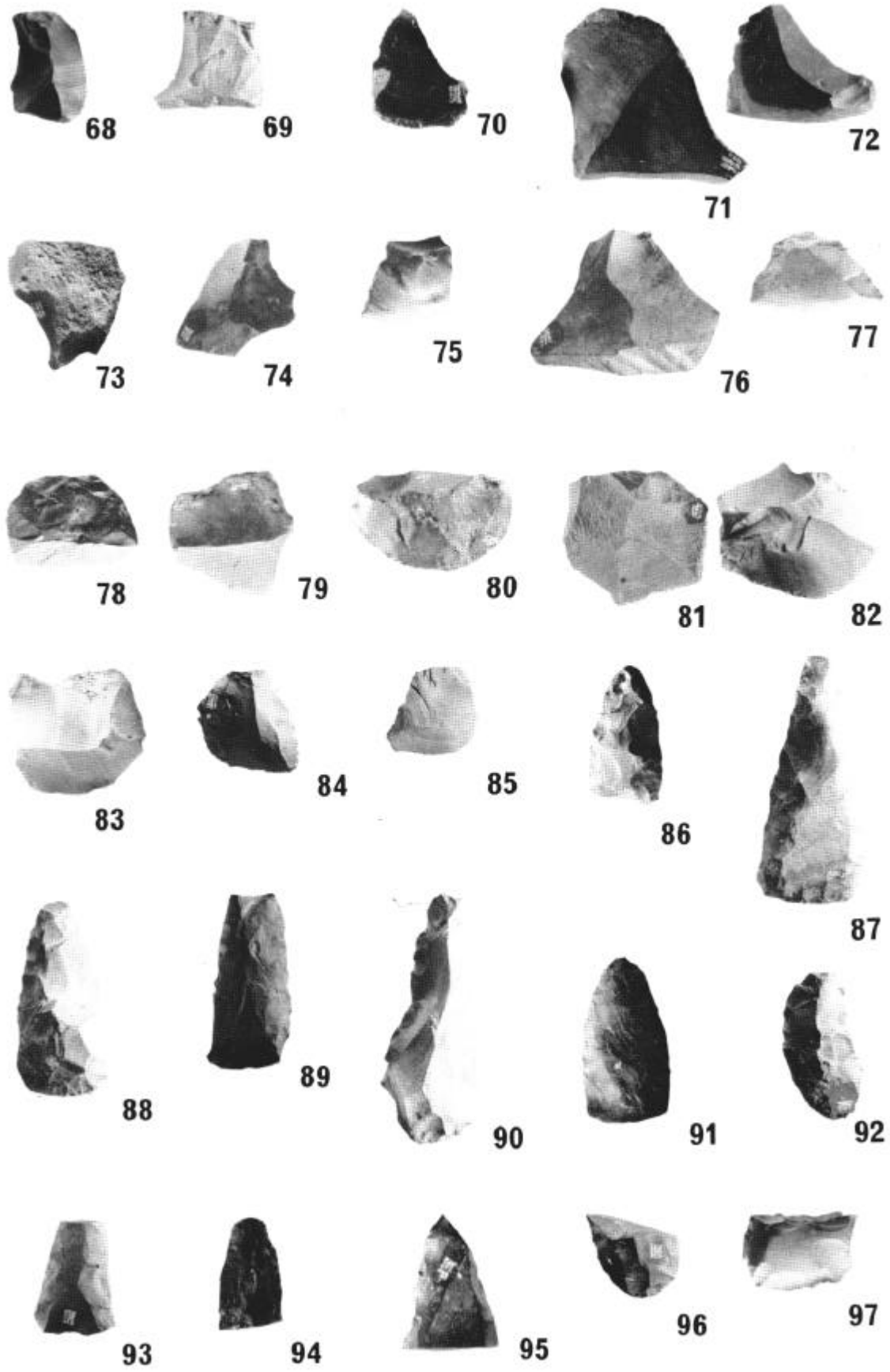
図版31　円盤状土製品



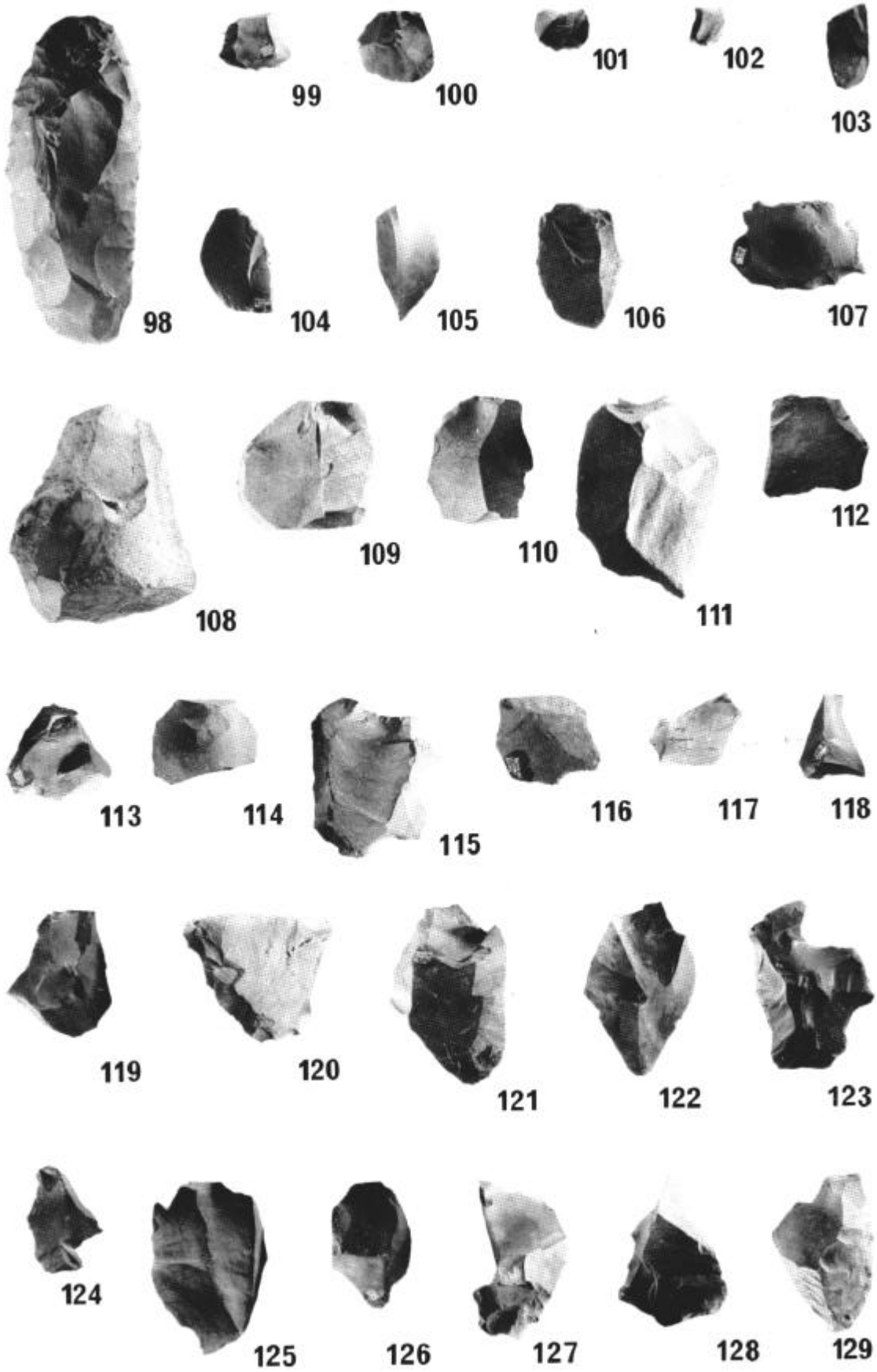
図版32　出土石器(1)　石鏃・匙状石器・石槍・掻器



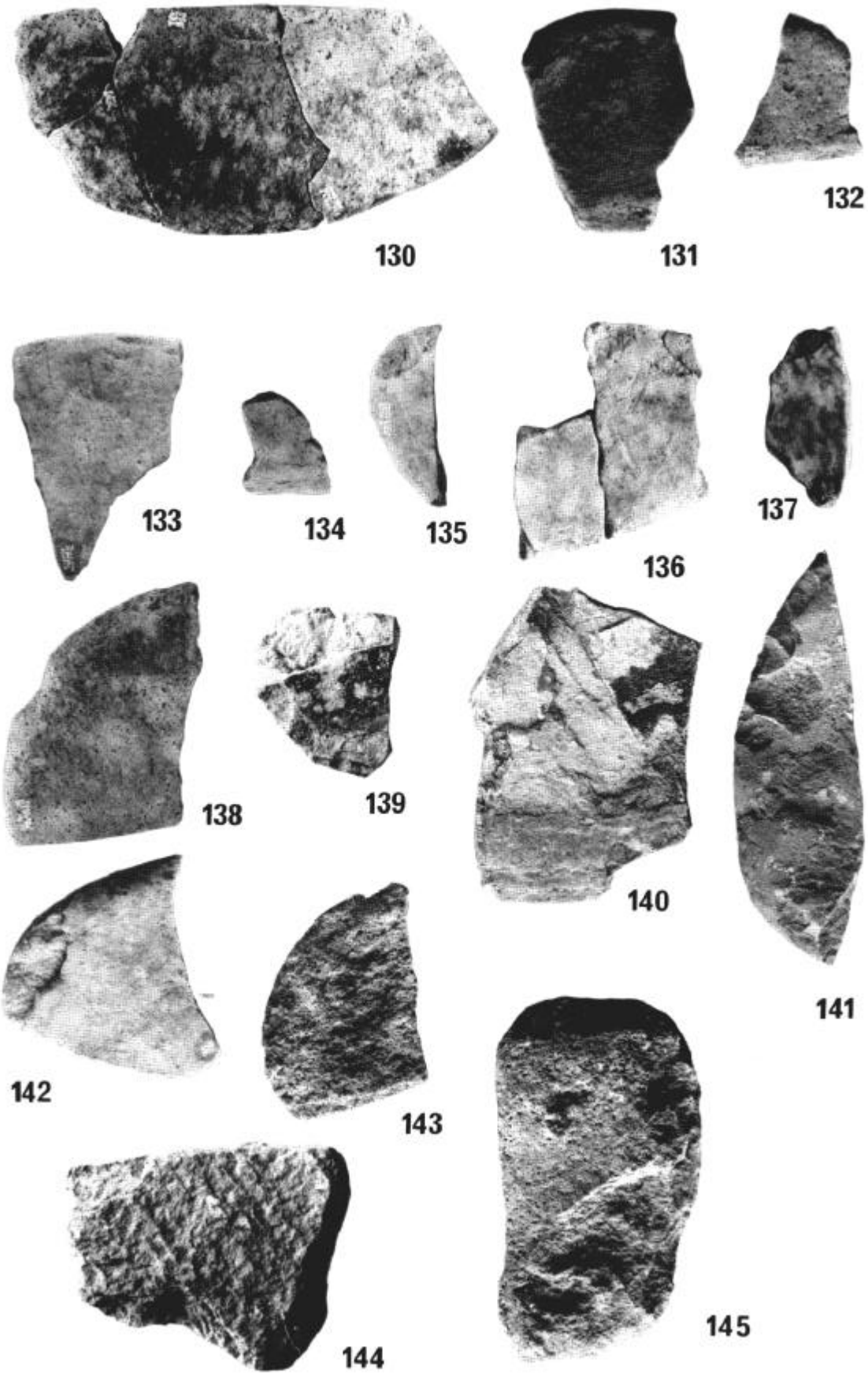
図版33　出土石器(2)　掻器・削器



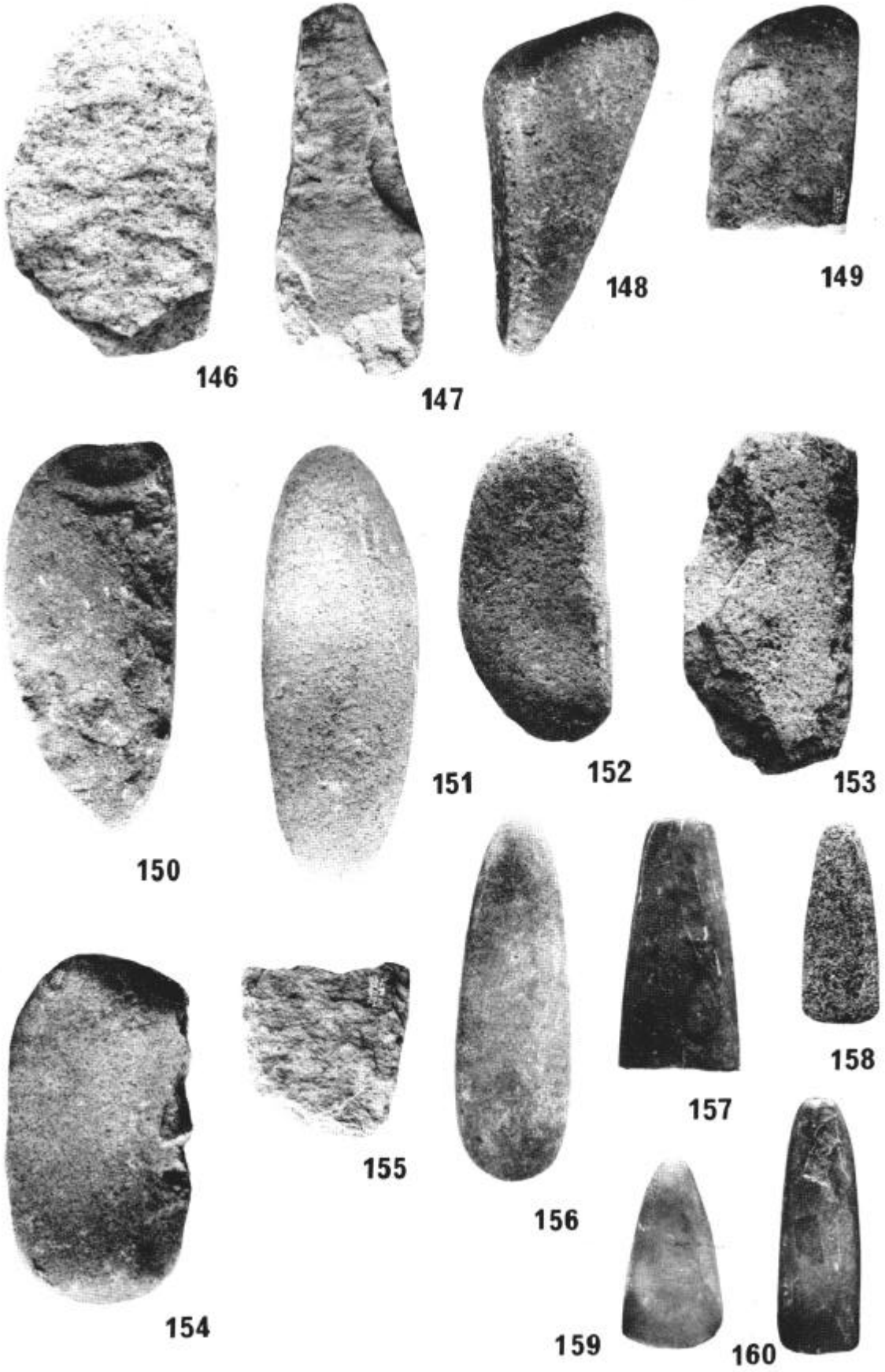
図版34　出土石器(3)　削器・篦状石器



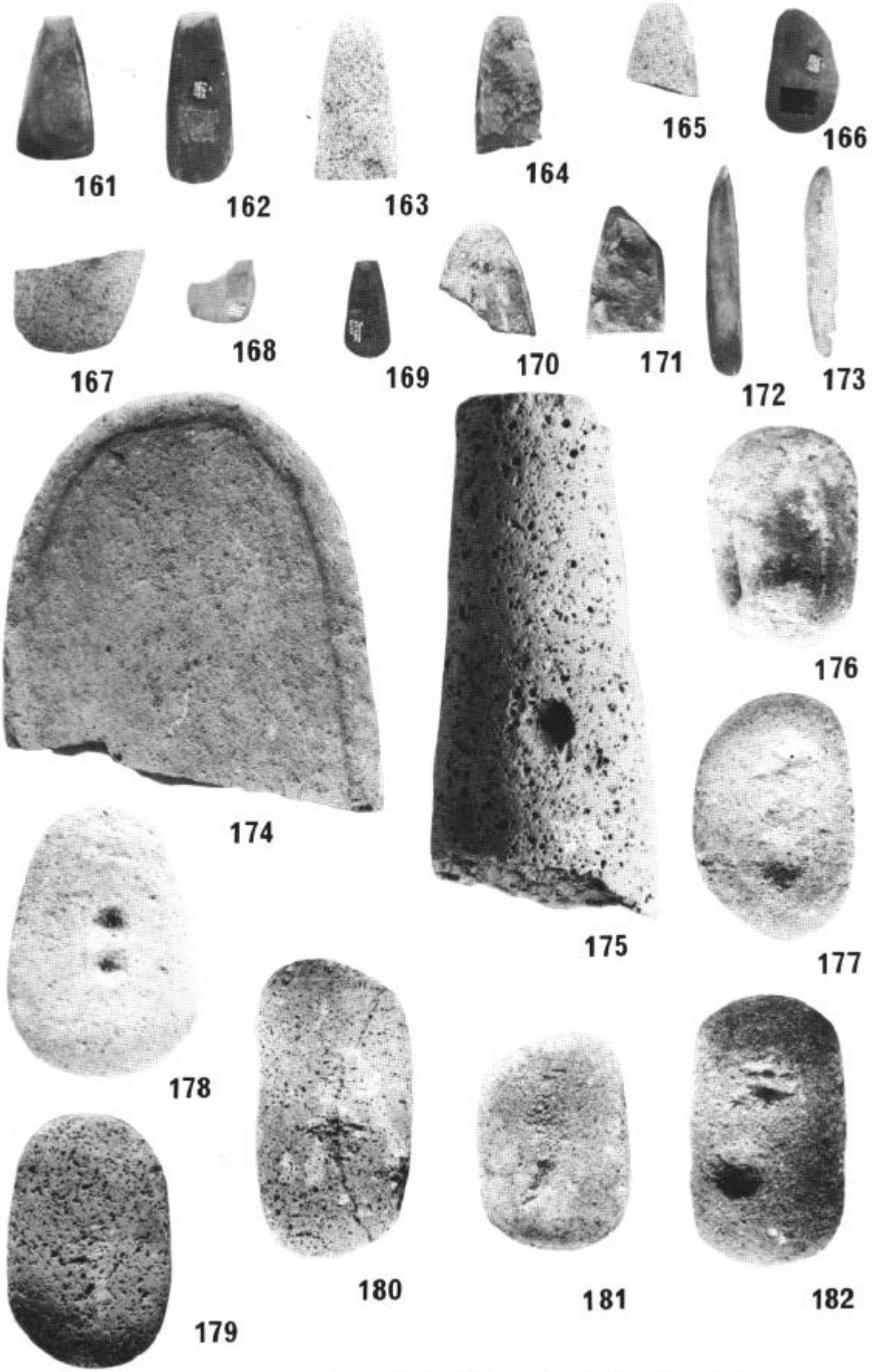
図版35　出土石器(4)　楕円形石器・小型円形石器・その他の石器



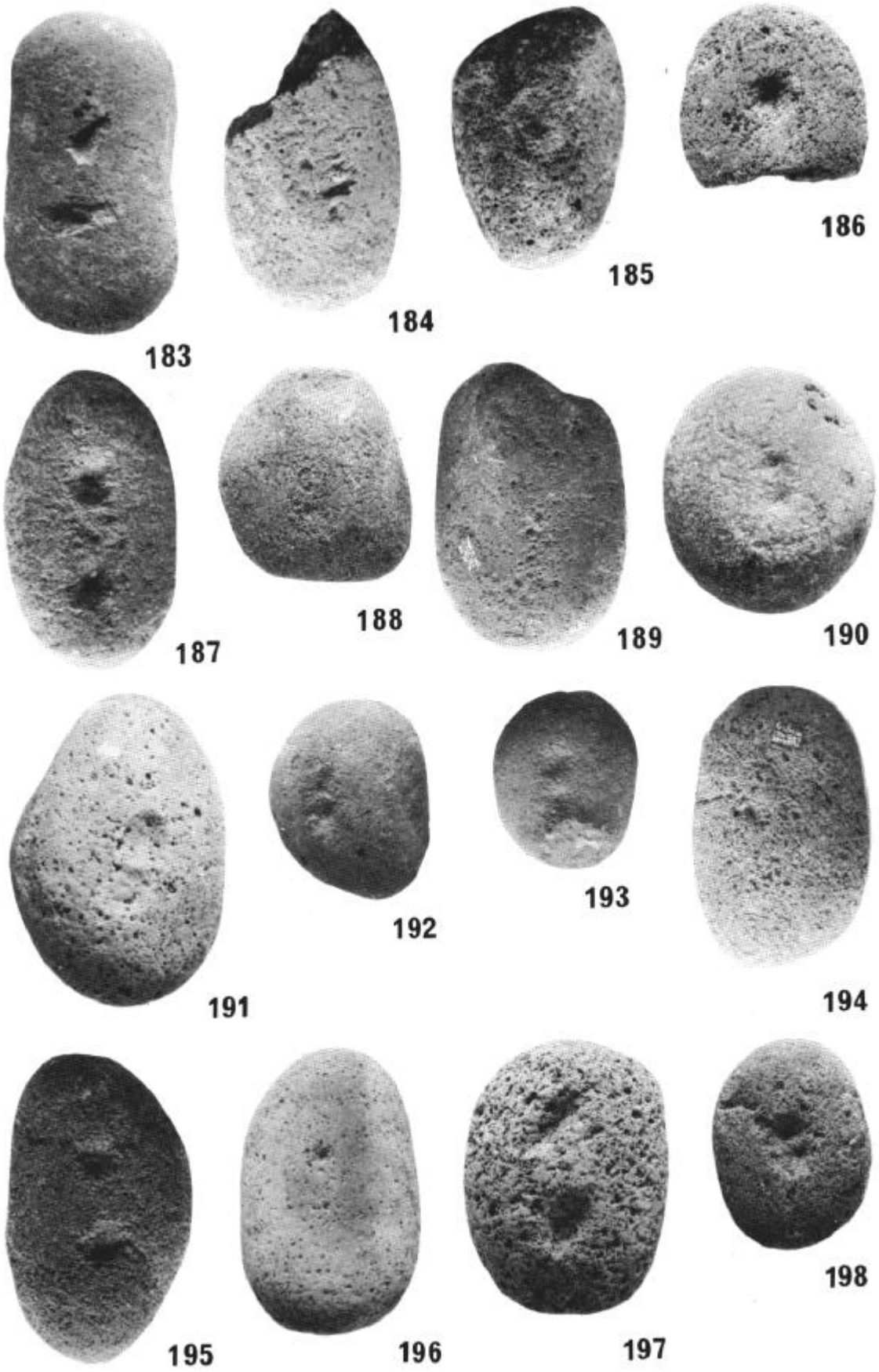
図版36　出土石器(5)　半円状扁平打製石器・有擦痕打製石器



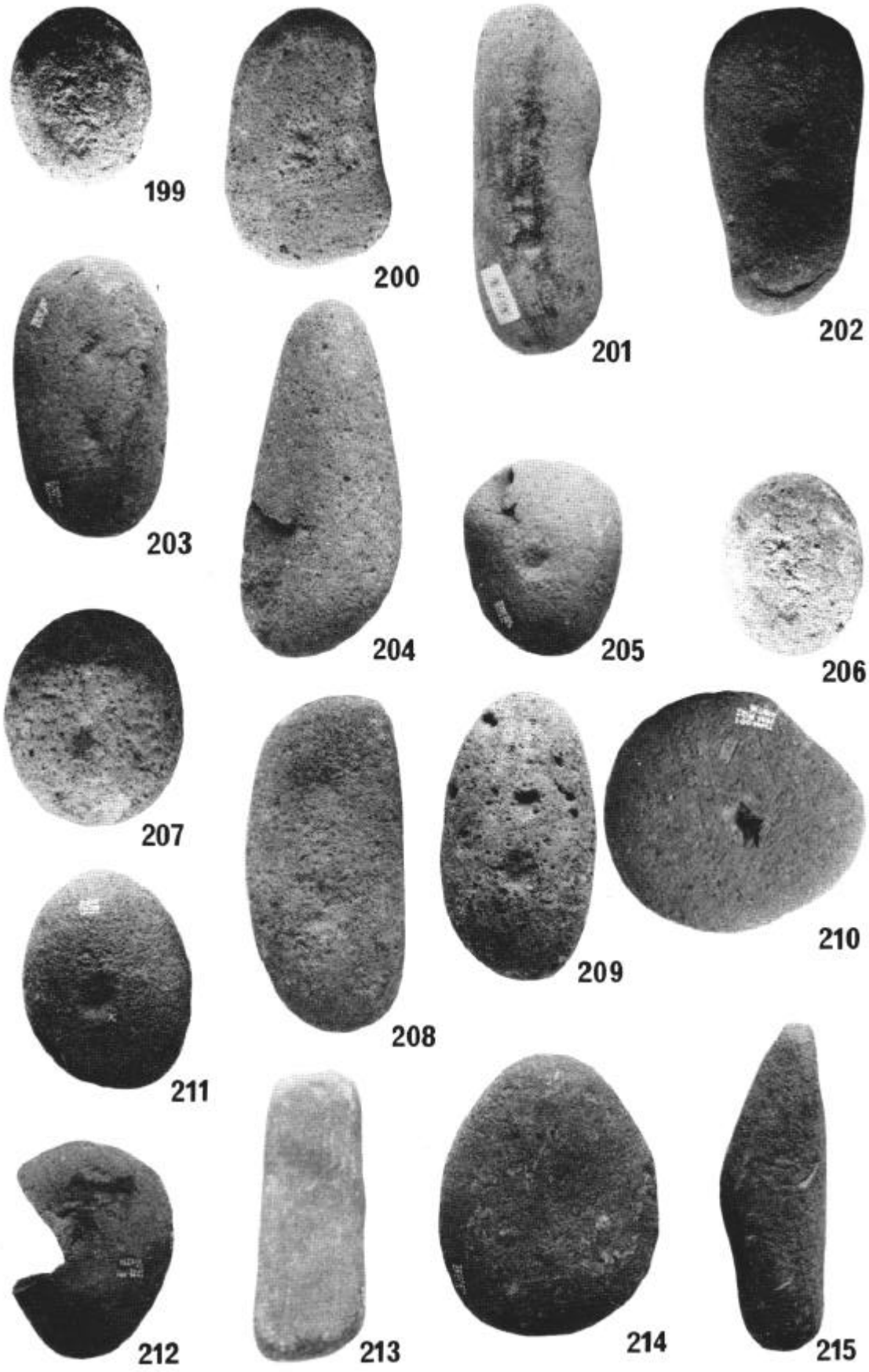
図版37　出土石器(6)　有擦痕打製石器・磨製石斧



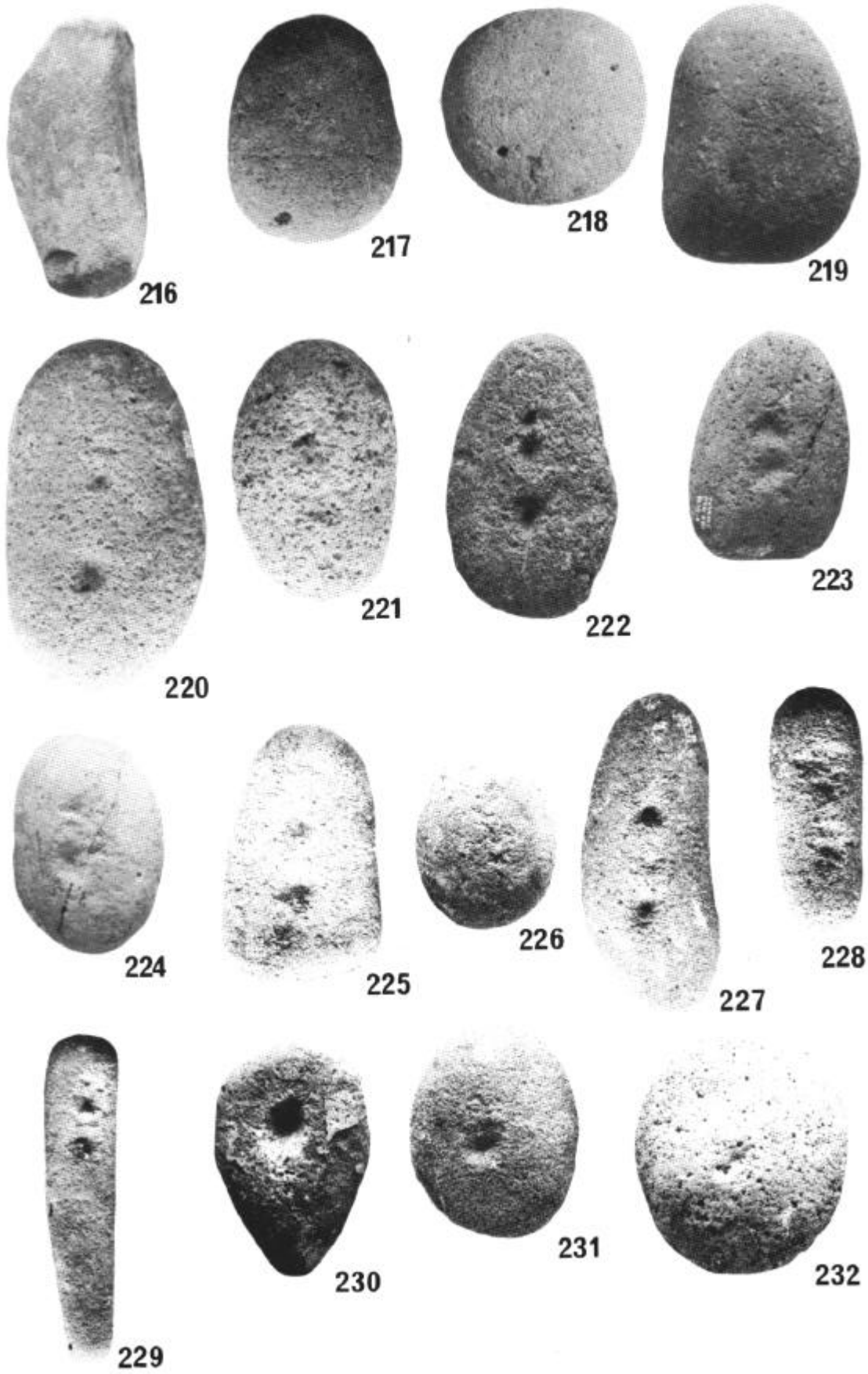
図版38　出土石器(7)　磨製石斧・磨製石斧様石製品・石皿・石棒・多目的礫器



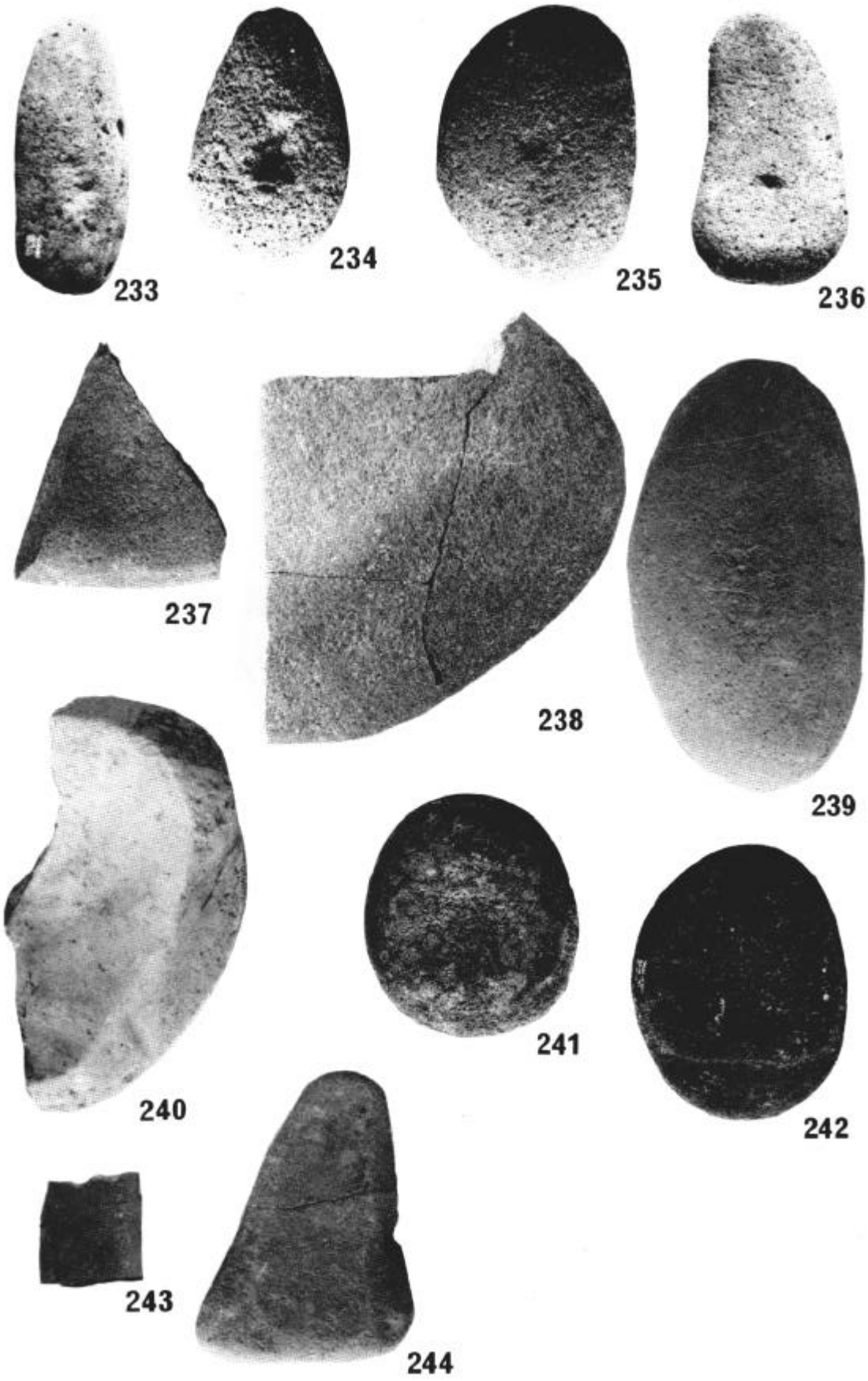
図版39　出土石器(8)　多目的礫器



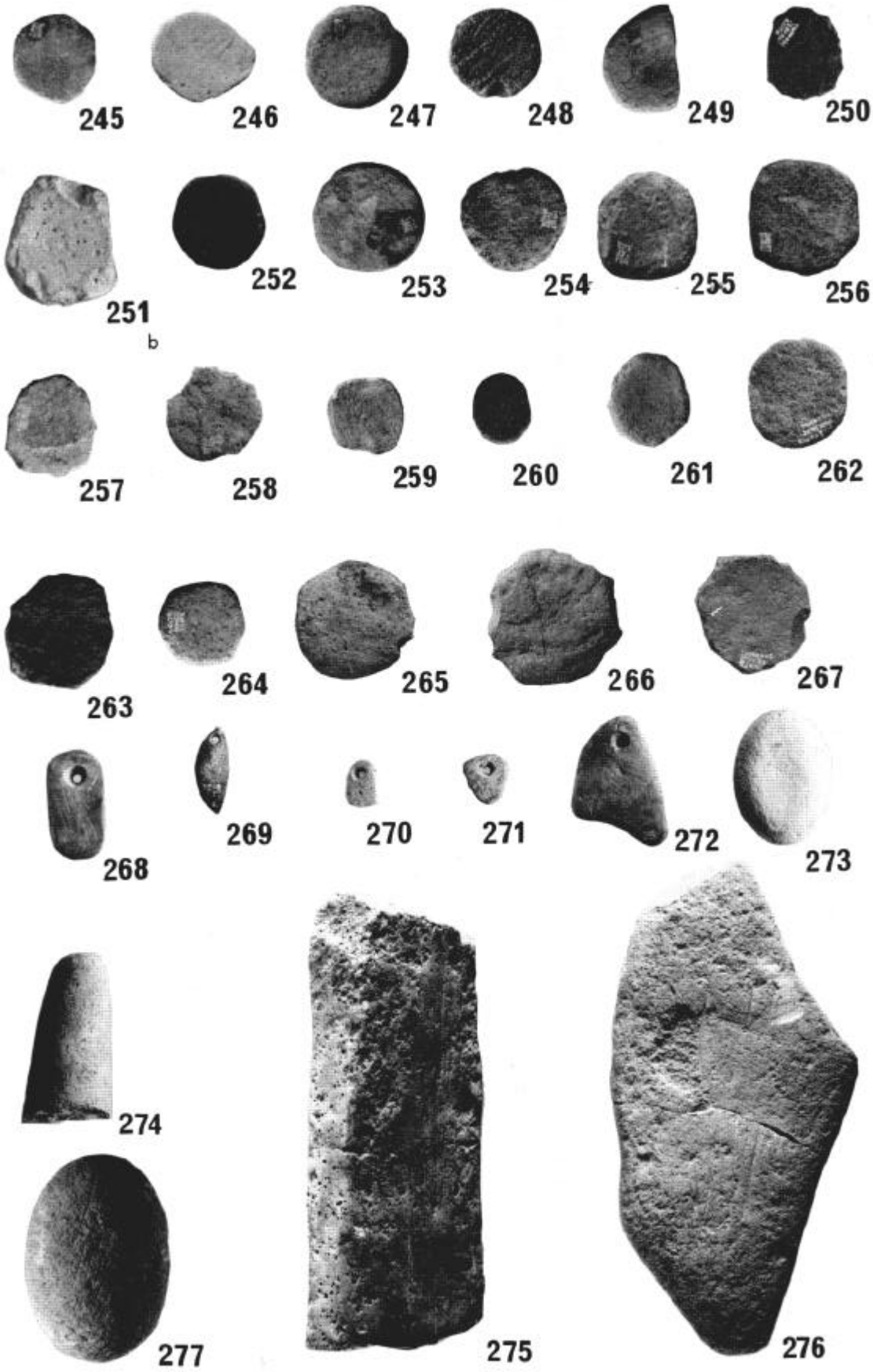
図版40　出土石器(9)　多目的礫器



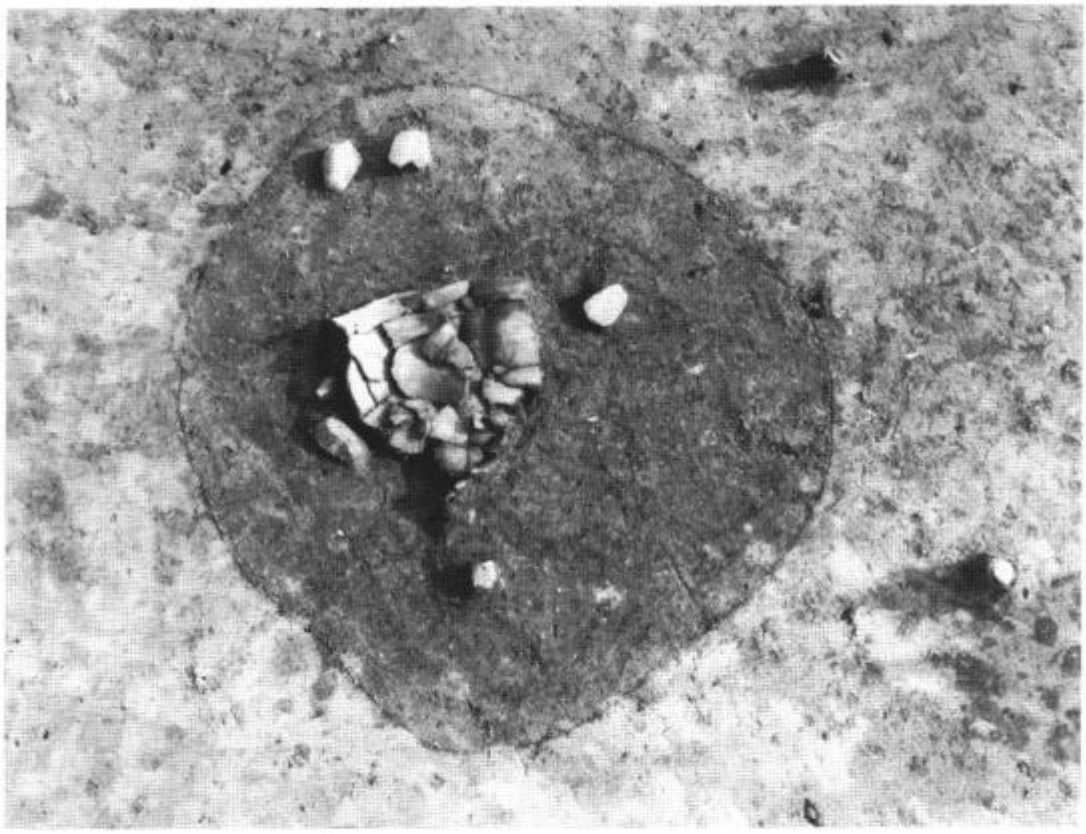
図版41　出土石器(10)　多目的礫器

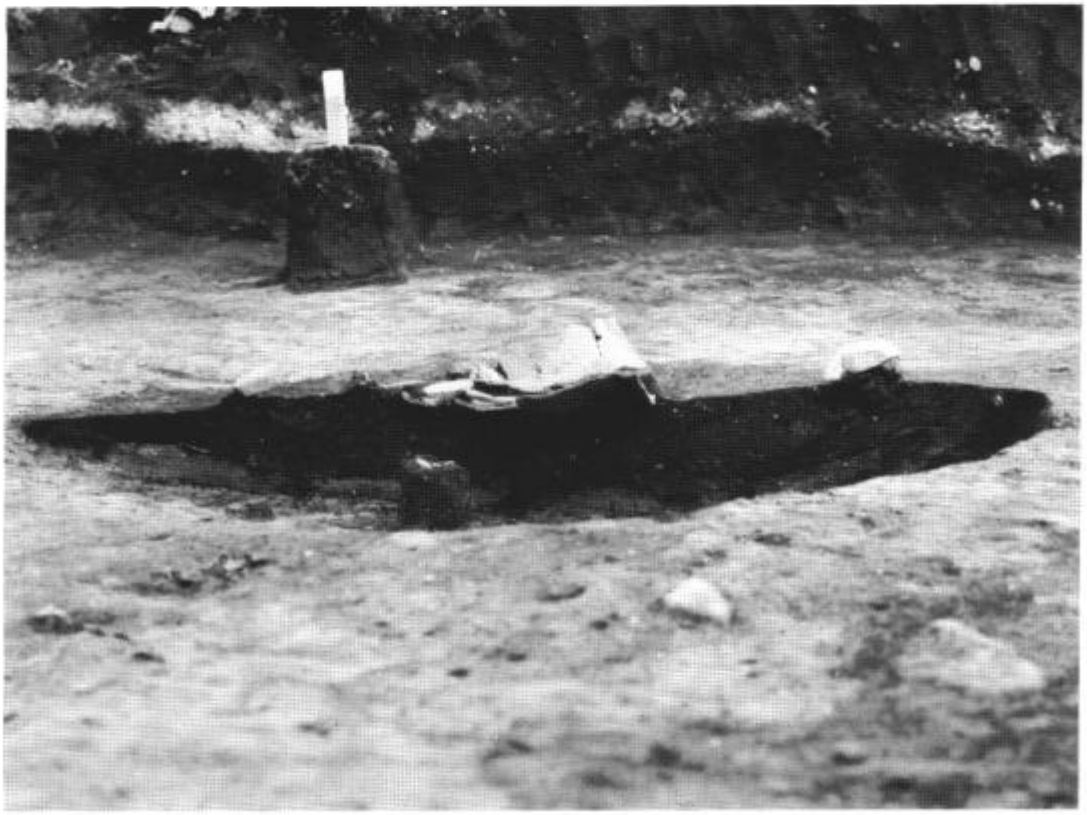


図版42　出土石器(11)　多目的礫器



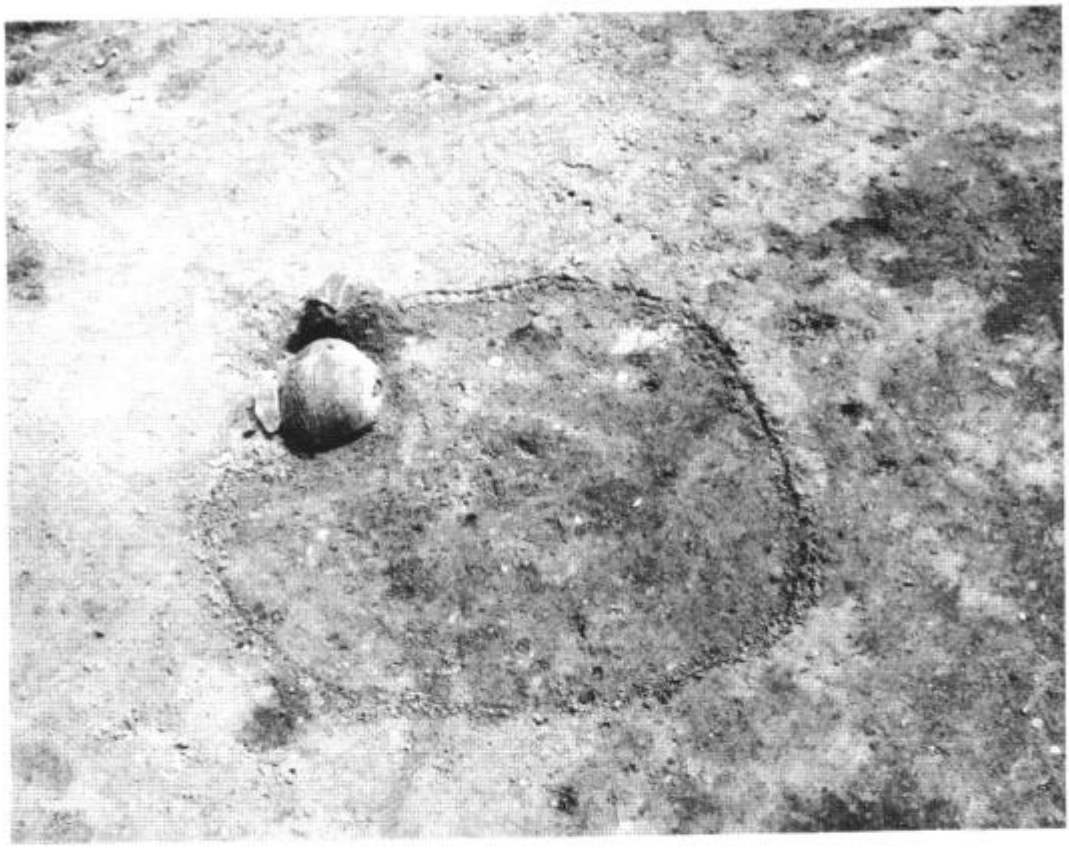
図版43　出土石器(12)　円盤状石製品・有孔石製品・線刻礫・有擦痕礫・有溝礫

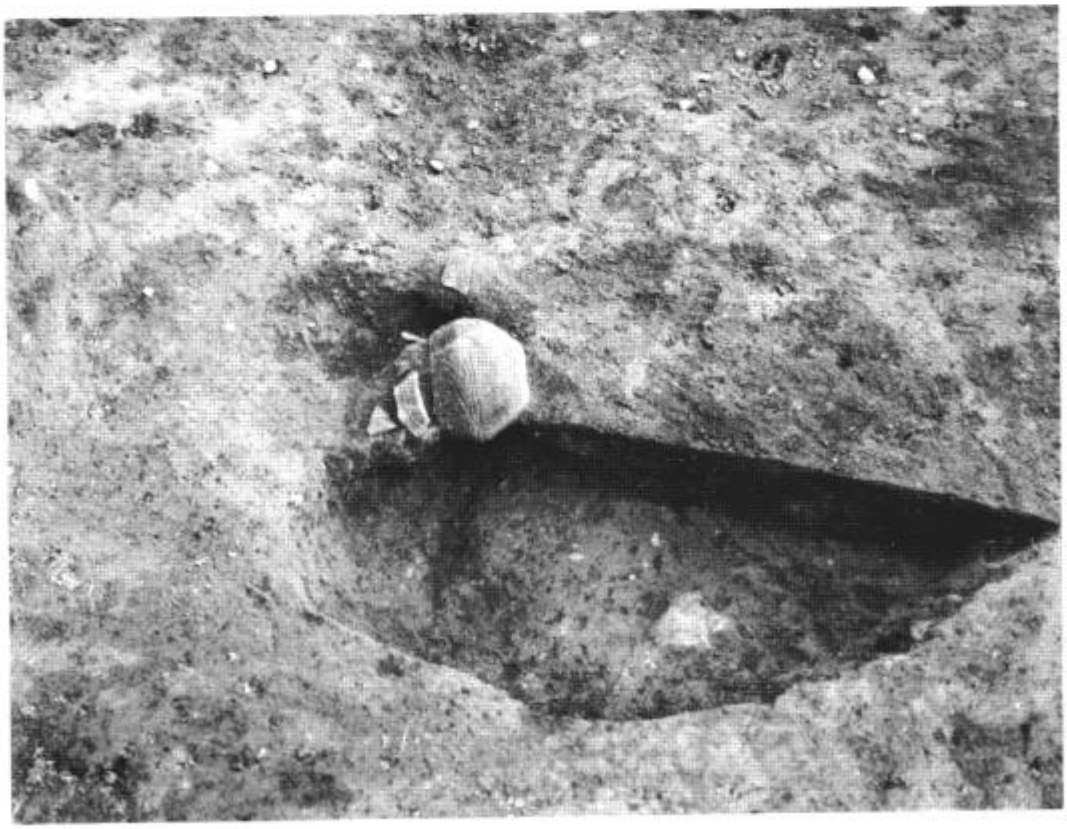




図版44　上　ＳＫ 06　土壙（上が南）

下　同上　断面の状況（西▶）



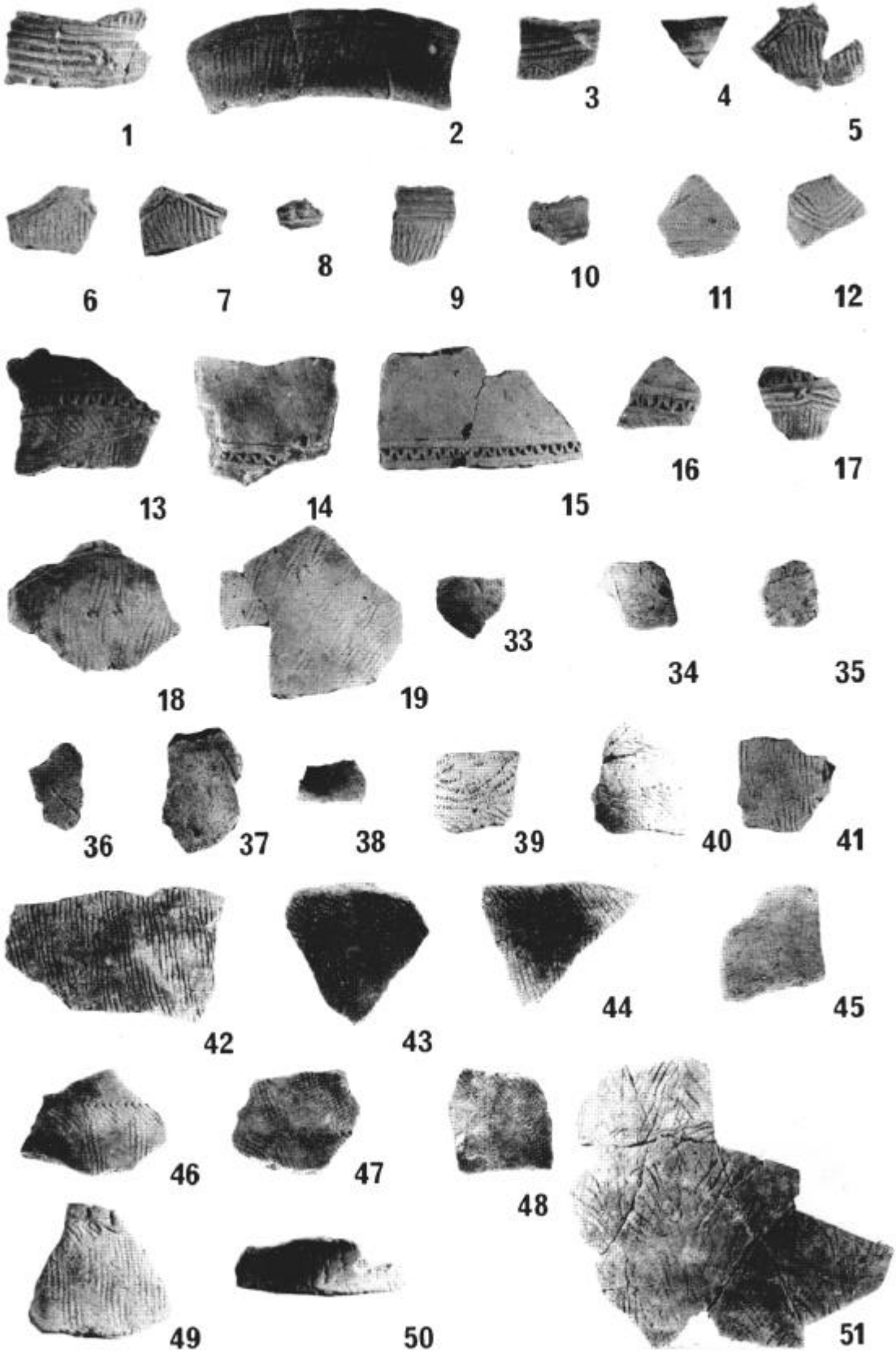


図版45　上　ＳＫ 02　土壙（西▶）

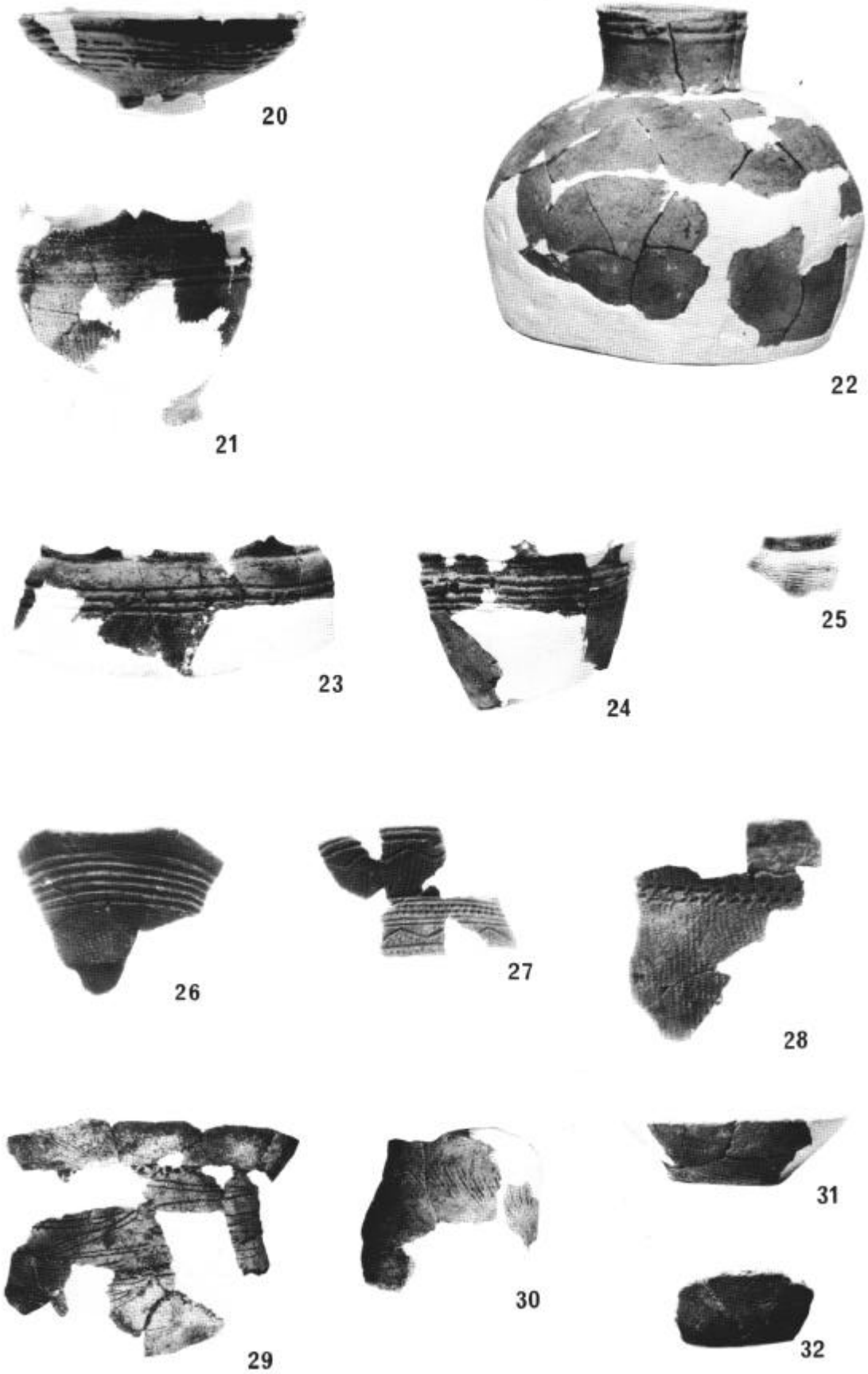
下　同上　断面の状況（西▶）

図版46　上　ＳＫ 06出土土器

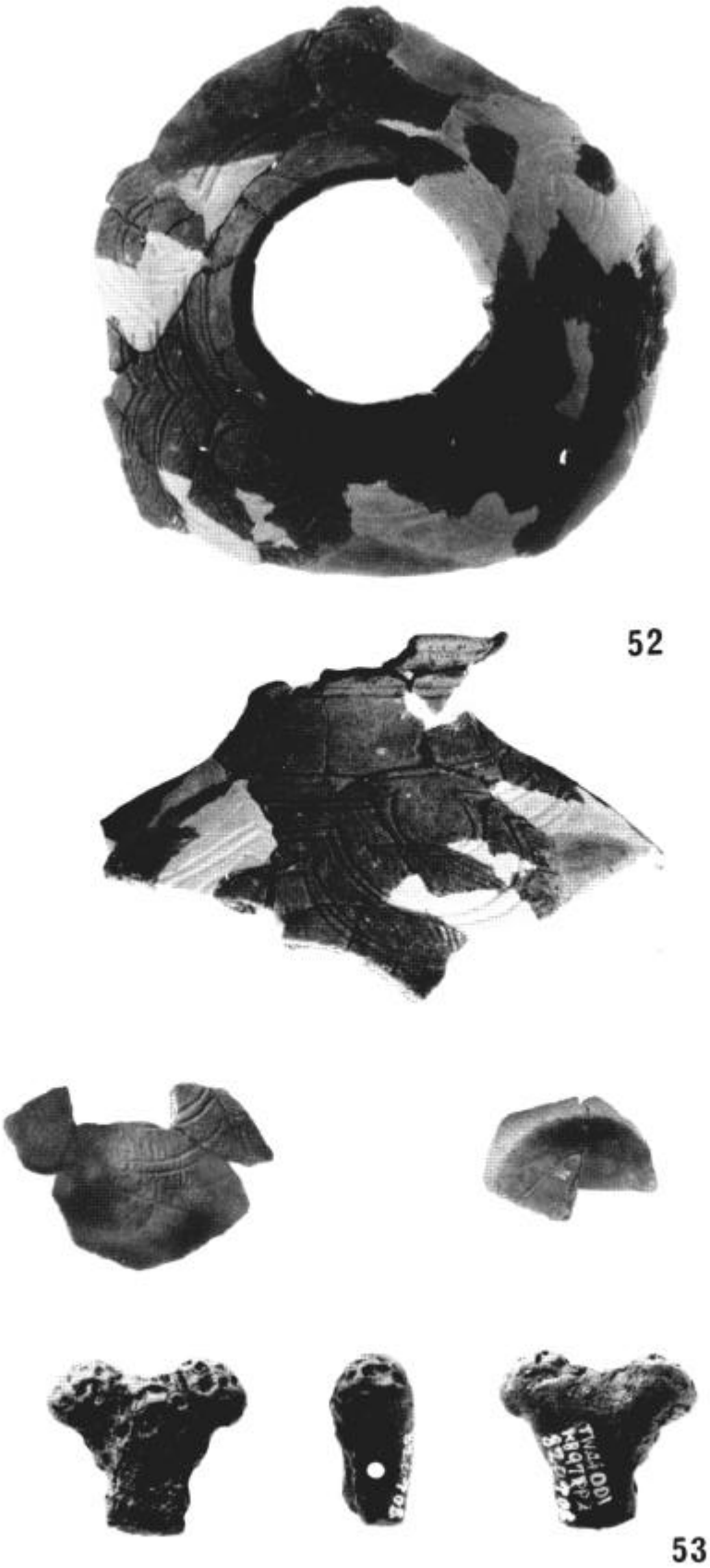
　　下　ＳＫ 02出土土器



図版47　弥生時代Ⅰ・Ⅱ群土器



図版48　弥生時代の土器



図版49　弥生時代II群5類土器・把手